

ザカフカースの民族問題と歴史記述

文部省学研究費補助金
重点領域「スラブ・ユーラシアの変動-自存と共存の条件-」)
一般公募研究

研究成果報告書

課題番号 09206201 (平成9年度)
08206201 (平成8年度)
07206201 (平成7年度)

研究代表者 北川誠一

(弘前大学教授)

平成10年3月31日

弘前大学

ザカフカースの民族問題と歴史記述

文部省学研究費補助金
重点領域「スラブ・ユーラシアの変動-自存と共存の条件-」
一般公募研究

研究成果報告書

課題番号 09206201 (平成9年度)
08206201 (平成8年度)
07206201 (平成7年度)

研究代表者 北川誠一

(弘前大学教授)

平成10年3月31日

弘前大学

目次

はじめに

9年度研究報告

8年度研究経過報告

アルメニア・アゼルバイジャン・グルジア（序文に代えて）	24頁
1 アブハズ・グルジア紛争における歴史記述の機能	46頁
2 古代アブハズィアの種族	51頁
3 アブハズィア・グルジア紛争と歴史記述	73頁
ーサムルザカノ人問題ー	
4 ソ連崩壊とアブハズィアの独立	96頁
5 アジャリアのグルジア人	111頁
6 サインギロのグルジア人	120頁
7 グルジアの国民統合とメスヘティ・トルコ人	130頁
8 歴史記述に於ける境界	148頁
ーエスノヒストリーとアゼルバイジャンの解体ー	
9 アゼルバイジャン政局と民族問題	162頁

ETHNIC CONFLICT AND HISTORIOGRAPHY
IN TRANSCAUCASIA

SEIICHI KITAGAWA

HIROSAKI UNIVERSITY, HIROSAKI

1998

CONTENTS

FORWORD — Armenia/Azerbaijan/Georgia	p.24
1 The Role of Historiography in the Abkhaz-Georgian Conflict	p.46
2 Ethnic Groups of Ancient Abkhazia	p.51
3 The Abkhaz-Georgian Conflict and Historiography	p.73
— On the Identity of the Samurzakanians —	
4 The collapse of USSR and the Independence of Abkhazia	p.96
5 Georgians in Ajaria	p.111
6 Georgians in Saingilo	p.120
7 National Intergration of Georgia and the so called Meskhet-Turks	p.130
8 Boundary in Hitoriography	p.148
— Ethnohistory and Politics in Azeibaijan —	
9 Political Situation of Azerbaijan and her Ethnic Issues	p.162

始めに

この冊子は、平成7、8、9年度にわたって、文部省科学研究費重点領域「スラブ・ユーラシアの変動」の一般公募研究として申請した「ザカフカースの民族問題と歴史記述」の成果を義務としてではなく、まとめたものである。

この間に発表した報告を主として、必要に応じてそれ以前に発表したものも加えてある。これらの報告は学術論文というよりは現状の紹介であり、解説である体裁をとっている。その理由は著者の能力の問題があることは当然であるが、ここで取り上げた種々の問題について広く知見を得、また紹介すると私の意図に従ったからであった。研究上の視野をさらに拡大して対象を広げることと同時に、ここで取り上げた問題についても個々のデータの出所を明示して批判の対象に成りうるものとするのは今後の課題として残された。

この様な研究テーマを持つに至ったのは1981年から2年にかけて学術振興会より10か月の間グルジア、アゼルバイジャン、アルメニアで研究に従事した際に抱いた疑問によるものであった。その時抱いた初歩的な疑念は、北海道スラブ研究会（1982年12月13日）で「ザカフカースにおける民族史編纂の諸問題」として発表することができた。この報告要旨は『歴史過程におけるソ連・東欧』（スラブ研究センター研究報告シリーズNo.12）北海道大学スラブ研究センター、1984年、27-32年に所収されている。

3年にわたる研究を継続することができたのはそれぞれの機関の内部に組織された研究会に私が参加することを許された上智大学宇多文雄先生、北海道大学井上紘一先生、東北大学大学院木村喜博先生の寛大さによるところが大であった。またそれぞれの研究会のメンバーの方々にも感謝の気持ちを述べたい。特に、この報告書のもとになったそれぞれの報告書作成の際にお世話いただいた皆さんにもお礼の言葉を申し上げたい。勿論、3月31日まで私が所属する弘前大学人文学部に教官の研究会がなかった訳ではない。

最後に、アルバイトとして私を背後から支えてくれた土田理絵、斎藤久美子、長内奈宇子、奈良千春の4名のお嬢さん達にもお礼を申しあげたい。彼女達なしでは、義務でもない報告書を決算に間に合うように印刷することは不可能であっただろうから。

A03 課題番号 08206201

ザカフカースの民族問題と歴史記述

北川 誠一

はじめに

ソ連時代、グルジアの自治共和国であったアブハズィア（アブハジア）では、グルジアからの分離を求める運動が行われていたが、ソ連崩壊後の1992年、アブハズィア政府は独立を宣言、グルジア政府がアブハズィア国内を通過するトピリスィ（グルジアの首都）-ノヴォラシースク（ロシア南部）間の鉄道運行確保を口実に軍隊を投入するに及んで内戦に発展した。1994年までにアブハズィア側はアブハズィアの全領域を掌握、グルジア人住民約30万人はアブハズィアの外に避難した。現在断続的に和平交渉会議がもたれているが、最終的和平とアブハズィアの地位に関する交渉は妥結を見ていない。

あらゆる民族紛争と同様にアブハズ・グルジア紛争にも問題の原因と背景がある。社会科学の諸分野の専門家は各人の方法論によってこの紛争の原因を分析することができるであろう。筆者は歴史記述を今日のコーカサスの民族紛争を説明する非常に大きな要素であると考えている。勿論あらゆる紛争はそれ自体の展開に関する歴史を持っている。しかしここで簡単に述べようとするのは、歴史記述はそれ自体が、社会的・経済的・地域的・宗教的・部族的・政治的理由と並んで、紛争の原因であるということである。この研究では、地域をグルジアを中心に設定して研究を行ったが、その主要な成果は、以下の1～4である。

平成9年度の研究成果

- 1 ソ連邦における歴史記述の一般問題及び各連邦構成共和国、共和国内の自治共和国と自治州、と個別民族の歴史記述全般に関わる問題について整理し、その傾向と問題点を考察した。
- 2 また、個別的地域としては、グルジアの自治共和国であったアブハズィアを選んで、アブハズ・グルジア紛争に関わる歴史記述に関する問題点を抽出した。

3 いくつかの問題点について、両当事者の主張を整理するとともに、学説史的研究をおこなった。

4 個人的に単独で研究を行うだけでなく、計画研究井上班（「民族の問題と共存の条件」）の研究会に参加して、共存という主題に関して、漠然とではあるが理解を得た。

1 ソ連邦における歴史記述の問題

和平交渉が進展しないのは実際の利害の調整が困難なこともあるが、アブハズィアの歴史に関して双方の理解が大きく異なり、アブハズィアがグルジアの一地方であるのか、別個な国であるのか意見が一致しないからである。この合意がない限り、アブハズィアが別個の国家として独立するのか、アブハズィアとグルジアが対等の立場で国家連合を組織するのか、グルジアが恩恵としてアブハズィアに自治を与えるのかは決定できない。客観的な論拠のない歴史文学がどれほど読者を誤った歴史理解に導くかについては、説明の必要はないであろう。日中のあるいは日韓の種々の歴史論争と同じく、グルジアの文献学者インコロヴァ教授のアブハズィアのアブハズ人の歴史に関する論文は、アブハズ人の間に強い怒りを引き起こした。この非科学的文献が掲載されるはずの新聞の発行を差し止めようとするアブハズ人の運動がスフーミの1989年の紛争の原因となった。日本で高校の歴史教科書の侵略という字句を進出と書き換えたとする誤った報道が中国と韓国で広い抗議の声を引き起こしたように、この結果的には出版されなかった原稿はアブハズィアで反グルジア運動の原因になったのであった。

ソ連邦の時代にはあらゆる出版物は検閲を受けたが、基本的にはソ連邦の兄弟諸民族の間に不快をもたらす文献は、教科書であろうと新聞や雑誌の啓蒙的記事であろうと出版は困難であった。諸民族の間の将来の調和は過去の紛争の事実より重要であったからであった。1997年に暗殺されたアゼルバイジャン共和国科学アカデミー・アジア・アフリカ民族研究所所長ズィア・ブニャトフの『7-9世紀のアゼルバイジャン』（バクー、1965年、ロシア語）は当時のハイダル・アリエフ・アゼルバイジャン共産党第一書記から、アルメニア、アゼルバイジャン両国民の友好を傷つけるものであると批判され、アゼルバイジャン語訳はペレストロ

イカ期まで出版を許されなかった。

科学的文献は啓蒙的文献より検閲の程度は低かったが、ソ連国内の共和国、自治共和国、自治州もそれぞれの公式の歴史記述を持っているので、研究者はそれぞれの組織の中では公式見解に拘束された。コーカサスでは、最初の民族紛争は隣り合う共和国や自治共和国・自治州の科学アカデミー会員、歴史学博士などの歴史研究者の間で、歴史的過去に関する理論的具体的に様々な問題に関するアカデミックな議論の中で起こった。

先ず、彼らは自分の研究を帰属する共和国、自治共和国・自治州の公認の歴史観の中で研究を発表する必要があった。第二に民族の名前がつけられている共和国、自治共和国・自治州の主権および自治の特権は、例え実際は中央と地方の政治的関係の中で決定されたのであれ、同一名称の民族のその地域における先住性によっている。各地域における民族の人口の集中と発展は、人口政策と名称民族の先住性の根拠を益々確実にする歴史的権利によって統制されていたのである。

少なくともカフカースでは、ソ連時代の共和国や自治共和国・自治州の境界がソ連政府によってしばしば変更されていたことはあまり注目されていない。また境界の変更がそれに満足しない人々によって要求され続けていた。現存の境界を越える歴史的民族領域を想定したり、近隣諸国との公式の領土的徹底に反する研究は近隣関係の侵害とみなされ、著者は社会主義的秩序の破壊者として非難されることになった。

名称民族共和国、自治共和国・州の現在の境界はソ連諸民族の歴史的過去における活動と一致している訳ではない。30年代に根幹民族政策が実施されるまで彼らは、歴史的過去を共有することができたが、その後は、あらゆる歴史的過去を民族毎に分有する必要が生じた。かって、国際的性格を持っていた文化的、政治的活動家は必ず、今日のどれかこれかの民族の指導者であり、従ってその民族の一員であると主張されなければならなかった。今日の民族名称、民族概念が意味を持たない時代に関してであつても。

名称民族の制度は民族政治に向かう政治的立場から発生する。また。民族政治は真の民主主義とは一致しない。名称民族のその名称の領域に於ける他の民族に対する様々な分野での優越はソ連憲法で保証されている訳ではない。しかし、現実には公的組織の重要な官職はその名称民族に与えられており、それに反する任

命は地元住民から民族的権利の侵害であると考えられた。名称民族の一員であることは、他の諸民族との比較で表現すれば、それだけで人生の成功を約束されたのである。従って、名称民族の地域で彼らの先住性を研究することは学術上や民族的プライドの問題ではなく、利害にかかわる行為であった。研究者達の間で静かな議論はやがて民族主義者達の喧噪たるアジテーションに、さらには武力闘争に拡大していった。我々はこのような過程の実例をナゴルノ・カラバフ紛争やアゼルバイジャンのレズギ人、アヴァル人、タレシ人とアゼルバイジャン人官憲との衝突にみることができるが、アブハズィアのアブハズ人とグルジアの間の紛争もこのような例の一つである。

2 主要問題

学術文献におけるアブハズ、グルジア紛争での主要な論争は以下の諸問題である。

- 1 古代アブハズィアの住民であるアバズグ人、アプスル人が今日のアブハズ人（自称はアプスア人）の祖先であるのか、グルジア系民族の祖先であるのか。
- 2 9世紀に現れた中世アブハズ王国の民族的性格。
- 3 10世紀に出現したグルジアのバグラト王家の民族的出自。
- 4 19世紀まで今日のアブハズィアに存在したアブハズィア公国の民族的領土的構成。
- 5 ロシア革命後成立したグルジア共和国（1918-21）の対アブハズ人政策。
- 6 ソ連時代のグルジア政府によるグルジア人移民のアブハズィア導入政策とアブハズ人に対する圧迫。

9年度には、古代中世史、及び近世・近代史に関わる事柄を中心に研究した。

3-1、アブハズィアの古代・中世住民--事例研究（1）

グルジアの最初の国家はギリシャ人によってコルキスとして知られている。「アルゴー船」伝説に言う金羊皮の国である。歴史に関するあらゆるグルジアの文献ではこれをエグリスイ（ロシア語の名称はコルヒダ）と呼び、西グルジアに

多いメグレリ人はその子孫であると考えた。しかし、一部の外国やアブハズ人の研究者は言語学的資料に基づいて、コルキスの住民はアブハズ人の祖先であると考えた。コルキスの王女メディアの兄アプシルトスApsyrtoの語源は、古バビロニア語のabsu割れ目か、古いアブハズ語の*/a-psw-art-（前置詞＋アブハズ人＋人称格語尾）であると考えられた（John Colarussoによる）。この説に従えば古代の黒海東岸の住民はアブハズ人の祖先であり、今日ここに住むグルジア系住民は新参者であるということになる。もしそうであれば、アブハズ人は主権やグルジアからの独立を含む名称民族の権利を持つことになる。コルキスはスキタイ人の侵入によって弱体化し、後にその領域にはローマ時代にラズィカ王国が成立する。この住民は今日トルコのトラブゾンとグルジアのアジャリアに住むグルジア系民族ラズィ人と名称が類似するので、グルジアではラズィカを建てたのは今日のラズ人と彼らに近縁のメグレリ人の祖先であるとするが、アブハズィアではグルジア人によるラズィカの独占に反対する。

ラズィカ住民の多くがグルジア人であると想定しても、では今日のアブハズ人の祖先はその時どこにいたのであろうか。紀元1、2世紀よりローマ人の記した文献は、アプシル人とアバズグ人の存在を記述する。しかし、またこの二つの民族の帰属に関しても学説は大きく、グルジア人説、アブハズ人説に分かれる。彼らはグルジア系スヴァン人の祖先かもしれないし、アブハズ人や類縁のアディゲ人の先祖であるかもしれない。更に彼らの出自に関しても両国の研究者の意見は様々である。彼らはアブハズィアの固有の民族で、それ以前はコルキスやラズィカの政治的連合体の一部であった可能性がある。あるいは、彼らは紀元前後に北コーカサスから南下したのかもしらぬ。もし彼らが土着のアブハズ系集団であるとするならば今日のアブハズ人はアブハズィアの根幹民族として完全な権利を有することになる。もし彼らがグルジア人であると、根幹民族の権利はアブハズ人ではなくグルジア人に帰し、アブハズィアの人口の約半分を占めるグルジア人が完全な意味で多数派の地位に就くことになる。最も典型的なアブハズ人の意見はこの二つの種族が共に今日のアブハズ人の祖先であるというものであり、最も極端なグルジア人の主張は、アプシル人もアバズグ人もグルジア人の種族であり、今日のアブハズ人は17世紀にコーカサスの北からの移住者の子孫であるので彼らに名称民族としての権利はないとする。

紀元前11世紀のアッシリアの碑文にアナトリアの北東部に居住していた「アベシェラ Abeshela」人に関する記述があり、中世にグルジア人ジュアンシェルが記した年代記にはアプシレティ Apshileti（意味はアプシル人の国）という地名を載せる。一部の研究者はこれは、古代のアベシェラ、アプシルの延長上にある地名であり、今日のアプスニ（アプハズ人の自称するアプハズィア国名）との間の失われた輪であるとする。ここでアプハズィア人の政治的指導者ウラディスラ・ヴァルツィンバは古代アナトリアの言語を研究していた文献学者であることを指摘しなければならない。

ラズィカ王国の衰退後の紀元6世紀にアバズグ人の公はビザンツ皇帝に直属することになり、マリアム・ロルトキパニツェ教授の言によれば、アバズグ人は「コドリ川の北にあったアプシル人の領土」を2世紀に征服し、6世紀にはコドリ川とエグリシ（ガリツガ）川の間にあった「アプシル人の本来の領土」を征服した。730年にアラブ・ウマイヤ朝の武将ムルバン・クルは西グルジアを征服した。ジュアンシェルは「アプシレティの都市ツフム（スフーミ）とアプハズィア」は彼によって焼き払われたと記す。

この時ツフムはアプシレティの都市と呼ばれていたが、アプハズィアに併合されていた。このように一部の研究者によるとツフム地方の北に元来のアプハズィアがあり、その住民が今日のアプハズ人の直接の祖先であるというのである。アプシレティのツフムやコドリ川とエグリシ川の間の本来的なアプシレティはグルジア人によって占拠されていた。しかし、別の意見に従えばアプシル人自身がアプスアと自称する今日のアプハズ人の祖先であり、アバズグ人は彼らのコーカサスの北から移住してきた同朋であると考えた。この考え方によるとアプハズ人こそがアプハズィア固有の民族であるということになる。

3-2 サムルザカノ住民の民族的帰属について-事例研究（2）

サムルザカノはアプハズィアの最も南のガリ郡とその北のオチャムチレ郡の一部（ガリツガ川以南）を含む地域の歴史的名称である。18世紀始めにこの地方を与えられたアプハズ人ムルザカン・シャルヴァシツェの子孫が、ロシアによって併合されるまで形式的にはスフーミの公（アフ）の家臣として、実際には独立の

君主として統治していた。サムルザカノとは、「ムルザカンの領地」を意味するグルジア人である。公領期にはアブハズィアの全体は、北からプズィブあるいは狭義のアブハズィア（ガグラ川からグミスタ川）、 Gum（グミスタ川からコドリ川まで）、アブジュア（コドリ川からガリツガ川までの領域）、およびこのサムルザカノ（ガリツガ川からイングリ川までの地域）に分かれていた。帝政ロシア政府は1886年アブハズィアで人口調査を実施したが、この時アブハズィア全体で30,640人のサムルザカノ人が記録されている。しかし、1897年の言語別人口調査ではサムルザカノ人は調査項目にあげられなかった。サムルザカノは、人間集団の名称であり、言語の名称ではないからである。この時母語をアブハズ語と登録したものは、58,697人（55.3%）、グルジア諸語と登録したものの25,873人（24.4%）であった。アブハズ政府は1897年の数値が、1989年には93,000人、17.8%に変化したことに注目し、グルジア政府の反アブハズ人政策がアブハズ人にとって破滅的なこのような変化を生んだと主張している。しかし、グルジア人研究者はいわゆるサムルザカノ人はグルジア人の一部であるメグレリ人起源で、アブハズ語とメグレリ語とのバイリンガル化したアブハズィア南部の先住民であると主張している。この主張によればグルジア系住民の割合は1886年から1989年までに大きな変化がないことになる。

明らかに、この集団の相当数がアブハズ語とグルジア語のバイリンガルであって、1926年に至るまで人口調査の毎にアブハズ人、サムルザカノ人、グルジア人の割合には不可解な変動が見られる。ロシア帝国やソ連の民族施策の方針が、帰属民族を申告する住民に影響を与えていたとみられるが、アブハズ側、グルジア側の双方が彼らを自民族と主張し、和平交渉にも深刻な影響を与えている。

4、カフカースに於ける民族の共存と歴史研究の役割

コーカサスにおける民族紛争には二つの重要な要素が見いだされる。第一は名称民族の制度であり、もう一つは先住民族の理論である。多数派民族としての権利は名称民族に与えられるが、その根拠は先住性に起因するのである。ソ連時代に決定された境界の内部での名称民族の制度が継続すれば、住民のこれを継承し

ようとする要求もまた続いた。アブハズ紛争に関するロシア連邦の調停案の一つは、南部のガリとオチャムチレ地方を国連の平和維持軍の管理下にグルジア領とするというものであるが、アブハズ側は厳しくこれを拒否している。なぜならばこれらは、紛争発生以前に住民の大部分がグルジア人であったにしろ、アブハズ固有の領土であるからである。グルジア側から見ればアブハズは北西の一部を除きグルジア固有の領土であるからである。

しかし、どちらの側も古代の祖先に関する明確な記憶を持っているわけではない。どちらもアブハズという国名、アブハズ人という民族名の変転を確実に説明する知識があるわけではない。彼らに過去に関する満足のいく説明を与えるのは歴史記述だけである。このようにして、歴史記述は歴史的事実だけを求めるだけでなく、名称民族制度と先住民族理論の間をさまようことになる。我々は紛争解決の以前に、現実的利害関係は勿論であるが、彼らの歴史に関するセンチメンタルな感情的をも理解しなければならない。しかる後、名称民族制度でも先住民族理論にもよらない新しい歴史を提示しなければならないであろう。民族問題の解決には多様な前提条件が考えられるが、そこには生活圏を共有する思想が存在する必要がある、人類に限られた資源を共有しなければならないように、時間を共有する民族と歴史の理論が待たれている。

ザカフカースの民族問題と歴史記述 A - 3

研究代表者 北川誠一 弘前大学

1. 全体的説明

上記研究は、代表者単独で行う計画で、予算は主として、この研究主題に関する資料や情報の収集と整理にかかわるものである。

研究の目的は、ザカフカースにおける個々具体的な民族政策や民族紛争と歴史記述の関係を明らかにすることにあるが、許される限り、この重点領域研究計画研究班「民族の問題と共存の条件 (C 0 1)」やその他の研究プロジェクトの研究会に出席し、研究発表をするとともに、情報や意見の交換をおこなうことにする。

2. これまでの研究経過。

平成7年度にかかわるもの。

(1) 「民族紛争における歴史・国家・国境：ザカフカースの事例を中心に」 (重点領域「スラブ・ユーラシアの変動」計画研究班「民族の問題と共存の条件 (C 0 1)」第一回 班会議 (1995,7,14) に於ける口頭発表。

(2) 「グルジアのイスラーム教徒」 (重点領域「スラブ・ユーラシアの変動」計画研究班「民族の問題と共存の条件 (C 0 1)」第二回 班会議 (1995,9,14) に於ける口頭発表。

(3) 「忘れられたグルジア人—グルジア人イスラーム教徒について」 (日本国際問題研究所、「旧ソ連の地域別研究」研究会 (1995,9,20) に於ける口頭発表。

(4) 「民族認識と部族帰属—ムスリム・アジャル人」 (重点領域「スラブ・ユーラシアの変

動」計画研究班「民族の問題と共存の条件（C01）」第四回班会議（1996,2,28）に於ける口頭発表。

(5)「アジャリアのムスリム・グルジア人」『旧ソ連の地域別研究』、日本国際問題研究所、1996年3月

平成8年度にかかわるもの

(1)「アブハジア・グルジア紛争と歴史記述」（「日本国際問題研究所旧ソ連の地域別研究」）
1996.9.30

(2)「サインギロのグルジア人」『民族の共存を求めて（1）』（「スラブ・ユーラシア
に変動」領域研究報告輯,N0.13, 1996年9月

3)「グルジア・アブハジア紛争の歴史学」（1996年度北海道大学スラブ研究センター
冬季研究報告会）1997年1月30日（予定）

3. 研究進捗状況

平成7年度は、ザカフカース諸国の中で、最も深刻な民族紛争を抱えているグルジアの、特にムスリム住民の問題を研究して、グルジア国内のムスリム・グルジア人を抱えるアジャリア自治共和国、グルジア南部のジャヴァヘティ・メスヘティ州に居住するメスヘティ・トルコ人の問題、およびアゼルバイジャンに住むグルジア人ムスリム（一部は正教徒）の問題の文献による調査、考察をおこなった。

平成8年度では、これに続いて、宗教派的にはムスリムが多いと言われるアブハジア人の分離運動を研究対象としている。アブハジアは1989年のセンサスによると、全人口525,061人中グルジア人が239,872人45.7%、アブハズ人は93,267人で17.8パーセントを占めるに過ぎない。文字どおり少数派であるアブハジア人に対して、グルジア人当局者は充分の民族的自治が享受されていると主張していた。しかし、アブハジア人の中ではソ連時代より一貫して、グルジアからの分離とロシア編入運動が続けられていた。この運動は1989年以降特に激しくなり、同年夏の首都スフムにおける流血事件を引き起こし、同年4月グルジアの首都トピリスィの政府庁舎前座り込み、それに続くソ連軍の攻撃による

流血事件を引き起こす事になった。アブハジアの混乱は、1992年のシェヴァルツナツェ元ソ連外相のグルジア帰国後に、グルジア国防軍のスフミ進駐と全面的内乱、ロシア人、チェチェン人などの志願部隊、傭兵隊を加えたアブハズ側の全面的勝利と多数のグルジア人住民の避難をもたらした。ロシア軍を中心とした国際停戦維持部隊派遣によって、戦闘自体は再燃してはいないが、避難したグルジア人住民の帰還、アブハジアの法的地位の問題が未解決のまま、1996年11月には、選挙が行われた。

この研究では、現状の分析を行うのではなく、アブハジア、グルジア双方がアブハジアの法的地位をどの様に考えているか、歴史的方法によって解明をおこなっている。アブハジア人はソ連時代以来、アブハジアの基幹住民と考えられて、全人口4分の1の数に過ぎないながら、ほぼ同人口のアルメニア人がけして行使することのできない、様々な、政治的、文化的権利を行使してきた。このようアブハジア国家とアブハジア民族の歴史的権利を明らかにしなければ、3000年の歴史の帰結である今日の両国家、民族の対立は理解することができないからである。

グルジアとアブハジアとの今日の関係は、結局のところ、いくつかの歴史研究上の主題にのちに要約できる。この際、特にいくつかの問題が挙げられている。

1. アブハジア古代の種族分布。

アブハジア人はけして、アブハジア（アブハズ）人であると自称したことはない。人間的に深い交流のあったオスマントルコにおいても、彼らは、北コーカサスの兄弟民族アバザ人と区別されずにアバザ人と呼ばれていた。グルジア人は、今日のアブハジア人は、アブハジアの一部の住民に過ぎず、アブハジア人と呼ばれることもなかったが、アブハジア全体を占領するに至って、この名称で呼ばれるようになったと主張する。アブハジア人は逆に、今日のアブハズ人の祖先は、アブハジアの全土に広がっていたというものである。

2. 中世初期のアブハジア王国の民族的成分。

6世紀にアバズゴイ人は、西グルジア、ラズィカ王国から分離して、ビザンツに直属し、サニグティ、アブシェレティ、ミスィミアネティを支配した。8世紀にアブハジア公レオンは、ビザンツから王号を与えられた。アブハジア王の領土は西グルジア全体に拡大し、首都は、西グルジア、イメレティア地方のクタイスイに移される。グルジア人は、固有のアブハズ人と西グルジア（メグレリ）人が、一つの国家を樹立したと考えるが、アブハズ

人は西グルジア一帯がアブハズ人の居住域であったと考える。

3. 近世のアブハジア公領の発展とサムルザカン地方の固有住民。

17世紀にアブハズ公の領域は南に拡大するが、土着のグルジア人（メグレル人）は農民として残留する。グルジア人の研究者は、サムルザカンにグルジア語使用者が多いのは、その反映であると考え、アブハズ人は、本来のアブハズ人が、比較的最近にグルジア語されたのであると考える。

4. ソ連加盟後のアブハジアとグルジアの同等な立場による条約的連邦制の評価。

5. ソ連時代にグルジア政府当局によって行われた反アブハジア政策。

KGB文書を研究したヘウイト等の研究者は、ソヴィエト時代のアブハジアでは、グルジア人によって非常に広範に反アブハジア人政策が実施されたという。これによつては、アブハジアの独立する権利が、保証されるものではないが、アブハジア人の反グルジア感情を理解する上では貴重な資料である。

基幹住民であるアブハジア人が、無前提にアブハジアの基幹住民である権利を認められるのではなく、たえず歴史的にそれを証明する必要がある、グルジア政府もアブハジアにおけるグルジア人住民の権利を保証しようとするとき、アブハジア中南部のグルジア（メグレル）人も、地域固有の住民であることを主張することによって、この問題を解決しなければならない。

アブハジアのグルジア人の問題は、すぐれてメグレル人の問題である。トルコ北東部にもグルジア人ムスリム、ムスリムであるグルジア系ラズ人が多く居住しているが、トルコでは1989年にクルド人の民族性を承認し、トルコ国内にはトルコ人以外の土着のムスリム民族は存在しないという政策を放棄した。今後の動静を注目しなければならない。ラズ人はメグレル人と同系の民族であるが、今日ラズ人もメグレル人もこの事実を強く認識する状況になっている。また、トルコ北西部カルス・アルダハン地方は西南グルジアとも呼ばれ、第二次大戦後の一時期ソ連が領土権を主張していたが、数万から数十万のムスリム・グルジア人が居住しており、トピリスィのグルジア人からは、遺憾な状況であると考えられていた。この地域が、グルジアとトルコ領のクルジスタン、アルメニアに挟まれた地域であることを考慮すると、地域的安全保証という観点から、あらかじめこの地方の住民構

成や帰属意識に十分な知識を持つ事が肝要であろう。最近のロシア、グルジア国境警備交渉をみると両国ともこの問題を充分承知し、ロシアのプレゼンスによって、グルジア南部国境を警備を使用とする意図が感じられる。

アルメニア、アゼルバイジャン、グルジア—序文にかえて—

はじめに

黒海とカスピ海をクリミヤ半島からアプシェロン半島まで結び付けている山地を、ロシア人はカフカースと呼び、山脈の南を「カフカース山脈の向こう側」を意味するザカフカースと呼んでいる。ザカフカースという地名はロシア側からの一方的な呼び名で、グルジア語ではロシア語を翻案して「アミエル・カヴカスィ」と呼ぶが、アルメニア語、アゼルバイジャン語では、ロシア語のザカフカースという言葉そのまま用いてる。トランス・コーカサスという語はザカフカースの訳語である。また、ロシア側から見た「あちら」、「こちら」という表現をされるために「南カフカース（コーカサス）」という表現をすることもある。

ロシア帝政時代、南北カフカースはチフリス（トビリシ）の総督によって統治され、州、県、区等に分けられた。革命後は、北カフカースがロシア・ソヴィエト社会主義共和国連邦に所属した。ザカフカースにはグルジア、アルメニア、アゼルバイジャン3共和国が成立したものの、経済区、軍管区もザカフカースを単位としたため、ザカフカースという区分が歴史的にも一元的なまとまりをなしているかのように考えられがちだが、ロシア連邦のダゲスタン・ソヴィエト社会主義自治共和国は、歴史的にも、住民の分布の上でもグルジア、アゼルバイジャンと関わりが深い。アブハズ人とアバザ人、オセッット人（ディゴル人とイロン人）、アヴァル人のように南北にまたがって分布する民族も多い。また局地的には、黒海沿岸、カフカース中央部山地でも、歴史的、民族的な交流、一体感は強く、山脈による南北の区分は、あくまでも便宜的であると知るべきである。

ザカフカース諸国とロシアあるいはルースとの交流は古いが、両者が単一の歴史的共同体の中に結ばれたのは19世紀前半にロシアがこの地方を併合してからであって、その期間はまだ200年に満たない。この点では、ヨーロッパ・ロシアの諸共和国、自治共和国の中でも、古代ルースの共通の後継者であるウクライナや白ロシアとは異なるのはもちろん、モスクワ国家と競争関係にあって歴史を歩んだバルト3国、タタール、バシキール、モルドヴァ、マリ、カレリア等の諸自治共和

国とも異なる。ザカフカースは19世紀まで、ロシアとはほとんど無関係に存在してきたのである。

ザカフカース諸国の歴史的特徴は、古代オリエント時代以来、小アジアやイラン高原と関わりが深いことである。3国は、各々に歴史的ルーツを今日のソ連国境外の南方諸国に有している。ザカフカースは19世紀半ばまで中東の一部として存続したが、第1次世界大戦後になっても、イランはアルメニアとアゼルバイジャンの領有権を請求し、トルコは現実にカルス、アルダハン両地方の返還を実現している。ザカフカースは、国境はあくまでも現状であるに過ぎないのである。

上に述べた歴史的特徴の理由によって、ザカフカース諸国における民族問題は対ロシア関係に留まらず、むしろ、それら国家の形成そのものに深く関わっている。もっとも重要であるのは、モスクワとの関係をどうするかということではなく、3国あるいは自治共和国、自治州を含めて、どのような民族（主として単一民族の、あるいは複数の有力民族の）国家が樹立されるべきであり、どのような理念によって国境が確定されるかということである。そして、第1次世界大戦後の混乱期のように自由な選択が許されるのであれば、旧ソ連の国境の外部も含めて、どのような諸国家が、どのような領土を確保するかということである。

本稿では、ベレストロイカ期以来趨勢が注目されている、アルメニア=アゼルバイジャン民族紛争、グルジア=アブハジア民族関係に限って、ザカフカースの民族問題について述べるものである。

1. アルメニア=アゼルバイジャン民族紛争

(1) アルメニア国家の形成

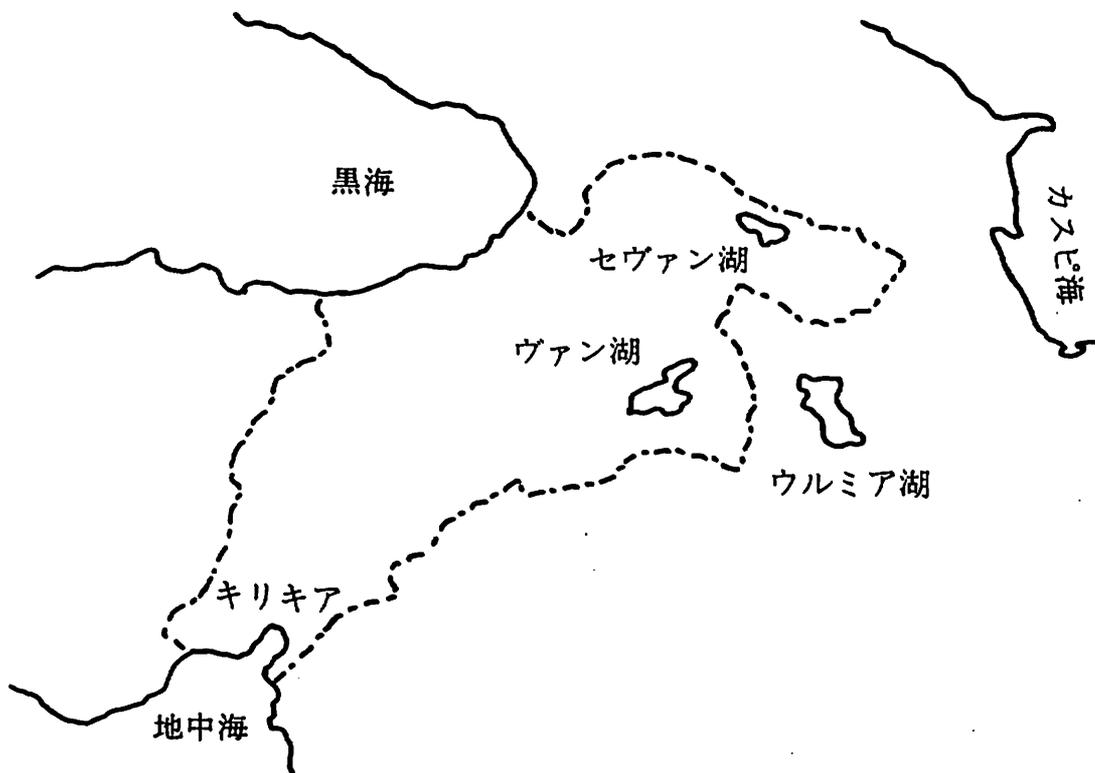
アルメニア民族の起源には謎の部分が多いが、アルメニア語がインド・ヨーロッパ語族に属することは、今日あらゆる言語学者から承認されていることである。紀元前8世紀には既にインド・ヨーロッパ語を用いるアルメニア人の集団があり、その中心はチグリス・ユーフラテスの上流地域であった。やがてアルメニア人の政治的中心はイエレヴァン地方に移り、エルヴァンド朝（紀元前5-3世紀）が起こった。これに続いたアルタクス朝（紀元前190-34年）は、地中海、黒海、カスピ海におよぶ広い領土を支配した。紀元後はイエレヴァン地方にアルサクス朝（53-428年）、バグラト朝（885-1045年）が起こった。また、チグリス川上流

域とヴァン湖周辺にヴァスブラカン王国（907-1021年）、タウロス山脈と地中海の間にキリキア・アルメニア国家（最初バロン領、次いで王国）が1375年まで残った。この後は半独立の小君主領を別にして、アルメニア国家と呼べるようなものはなくなり、アルメニア人は各地に分散した。

19世紀ロシアはイランからイエレヴァン、ナヒチェヴァン両地方、オスマン帝国からカルス地方を奪ったが、両地方はそれ以後アルメニア人地区として発展するようになる。19世紀後半、オスマン帝国のアルメニア人社会は、ロシアの庇護に頼ろうとするものと、オスマン帝国を改革することによって少数民族としての正当な地位を確保しようとするものとの二つに分かれたが、1895～1896年、1915～1916年の二度にわたる組織的追放と虐殺によって、アナトリアのアルメニア人社会は崩壊した。

1918年、チフリスを首都とするザカフカース民主共和国連邦が成立したが、1か月で崩壊した。グルジアはチフリス、クタイシィ両県と、カルス州北部、アゼルバイジャンはバクー県、エリザヴェトポリ県、ザカタル区を取ったので、アルメニア人にはイエレヴァン県とカルス県南部が残されたが、オスマン軍の前進にあって実際にはイエレヴァン地方を支配したに留まった。アルメニア共和国の政権を握ったのはダシュナクツティューン（ダシュナク）党で、彼らの領土的要求の最大綱領は「海から海までのアルメニア」を実現すること、即ち歴史的にはアルサケス朝の領土、文献的には、成立年度および性格不明な地理書『アルメニアの地理』にある地域を統合することであった。トルコ領に対する領土要求は、アルメニア人口の多い「アルメニア諸州」領有請求となったが、その一部はアメリカ合衆国ウィルソン大統領の調停案に盛り込まれた。他方、グルジアに対しては、アルメニア人口の多いロリ・パンバク地方、アハルツィヘ地方が係争地となり、1918年末には戦争に発展した。一方、アゼルバイジャンに対しては、カラバグ地方の西部山地、アルメニアの歴史地理でいうアルツァフ地方とザンゲズル地方の領有が争われた。しかし、アルメニア軍主力は西部国境に張り付けられていたので、高い山脈の間の峠を越えて、軍隊をカラバグに送ることはできなかった。アゼルバイジャン政府の地方権力と、武装したアルメニテ人住民の間には長く緊張が続いた。

1920年12月、赤軍がアルメニアを占領し、ソヴィエト・アルメニアが成立し、



アルメニアの民族主義政権の要求した「海から海まで」のアルメニア

アゼルバイジャン、グルジアおよびトルコ共和国との最終的境界確定は、モスクワ政府によって行われることになる。アルメニアはロリ地方を取ったが、アハルツィへはグルジアに残った。カラバグはアゼルバイジャン、ザンゲズルはアルメニアが取った。またカザフ郡南部のベルト、イジェヴァンがアルメニアに譲られた。これ以前に、カルス、ナヒチェヴァン両地方はトルコ軍の占領下にあったが、トルコはナヒチェヴァンをアゼルバイジャンに譲渡した。また、住民構成も大きく変化した。後にナゴルノ・カラバフ自治州が成立する地域ではアルメニア人が大多数を占めたが、トルコに割譲された地域、及びナヒチェヴァンにはアルメニア人は殆ど残らなかった。

(2) アゼルバイジャン民族の形成

紀元前4世紀、ギリシャの著述家アリアノスは、ザカフカースにアルメニア、イ

ペリアと並んでアルバニアと呼ばれる王国があって、この国の軍隊も、アレキサンダー大王がペルシャのダリウス3世を敗ったガウガメラの戦闘に加わっていたことを知っていた。アルバニアの国民は、カフカース語族ダゲスタン語群の言葉話す人々で（バルカン半島のアルバニア人とは関係がない）、領土はクル川と大カフカース山脈の間に挟まれた地域、首都はカバラであった。その領土は後にカスピ海に達するようになった。ソ連の言語学者イーゴリ・ディヤーコノフは、ザグロス山脈北部に居住していたカッシート人はダゲスタン系の民族であり、彼らはザグロス北部からカフカース北部にかけて居住していたと判断しているが、紀元前4世紀にも、アルバニア王国の領土外のクル川の南に、ダゲスタン系種族が住んでいたことは確実である。アルバニア王国はイランのバルチア、ササン朝の支配を受け入れた。428年、ササン朝は東部カフカースにマルズバン制を施行し、クル川水系の分水嶺に至るまでの地域に、アルバニア・マルズバン領を置いた。中心は北端の要塞都市 Chol (ダルバンド) であった。5世紀にはアルバニア人の間にもキリスト教が広まり、教会の長であるカトリコス是最初 Chol、後にクル川南のバルタヴに住んだ。

462年、ササン朝によって古代アルバニア王国が廃止されて以後、クル川の南ガルドマン地方のメフラン家の力が強くなり、アルバニア王を称した。7世紀ササン朝はアラブ人の支配するところとなり、旧アルバニア・マルズバン領の各地にも、アラブ遊牧民の駐屯軍が置かれ、住民は次第にイスラーム教徒になった。一方、二性説のアルバニア教会の中では一性説のアルメニア教会の影響が強くなり、言葉もアルメニア語化が進行した。

アッパース朝の解体にともなって、9世紀にはクル川の北部シルヴァーンとクル、アラス両川合流地域のムガンには、マズヤド朝のシルヴァーン・シャー国、10世紀にはクル、アラス両川に挟まれたアッラーンにシャッタード朝の政権が成立した。アゼルバイジャン民族形成におけるアラブ人の移住の影響は、11世紀に始まったトルコ系諸民族の移住とは異なり重大ではなかった。アゼルバイジャン住民のトルコ化を決定的にしたのは13世紀のイルハン国の成立であったが、遅くとも15世紀ごろまでには、北西イランのアゼルバイジャン地方、シルヴァーン、アッラーン、ムガーンのほぼ全体がイスラーム化した。キリスト教徒はアッラーン西部の山地や大都市に残るだけだったが、アルバニア教会は教義と用語を完全にア

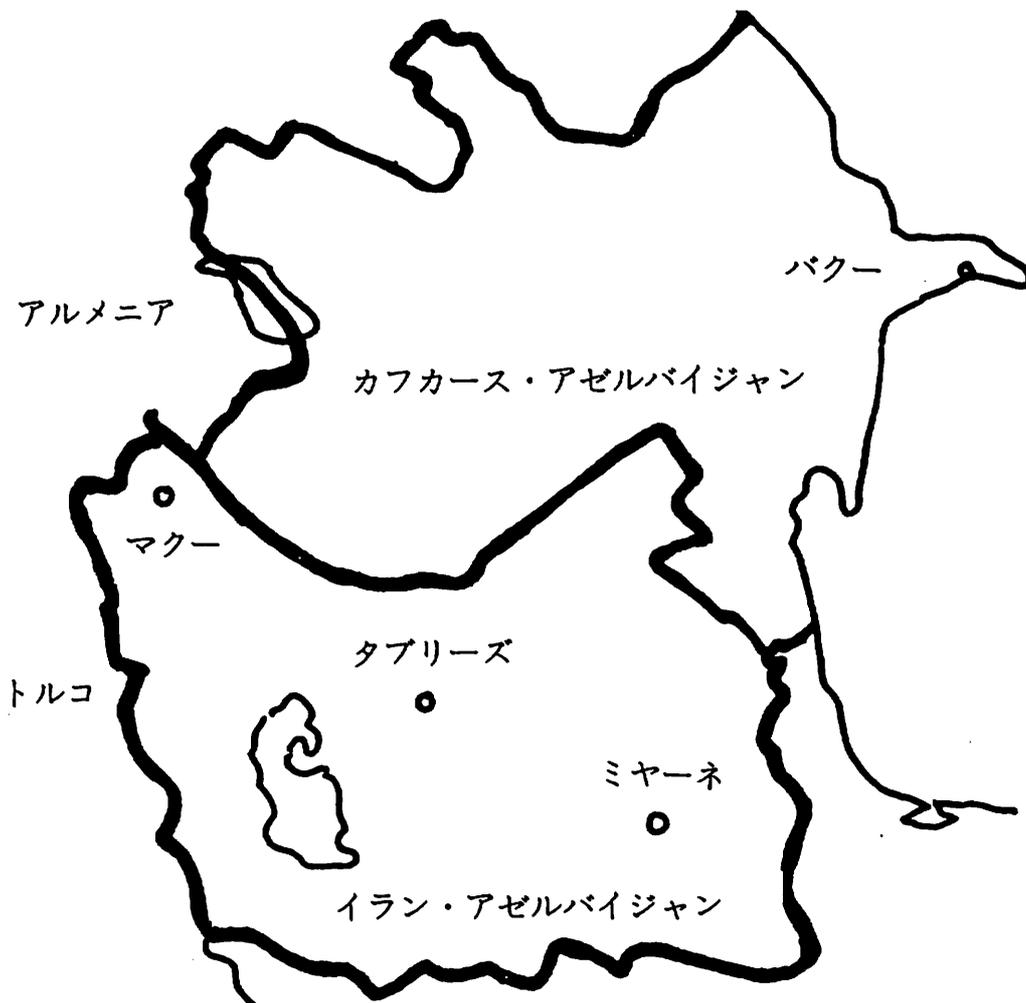
ルメニア化して19世紀まで存続した。

中世前半、北西イランのアゼルバイジャン地方と、今日のソ連領アラス川の北のアッラーン、ムガン、シルヴァーンは別個の地域で、これらの3地域をさす地名はなかった。しかし、住民の言語のトルコ化、信仰のシーア派イスラーム教化は、これらの地域をひとつの民族的範囲にまとめあげた。1500年ころ、サファヴィー朝のイスマイル1世が、アナトリア東部のトルコ系遊牧民の助けを借りて、アラス川の北を征服し、さらにアゼルバイジャンを征服してイラン皇帝を宣言したとき、事実上シルヴァーン地方にイスラーム教スンナ派の信者が多かったことを除けば、アゼルバイジャン民族が成立したと見てよいであろう。しかし、この一時的民族統一は、サファヴィー朝が全イラン的国家に発展したことによって解消した。

18世紀末、将来のアゼルバイジャン共和国となるべき地域はクーバ、シャマハ、バクー、シェッキ、ターレシュ、カラバグ、ガンジャ、ナヒチェヴァン等いくつもの封建所領にわかれていたが、1828年と1831年、イランからロシアに割譲された。人工的国境にもかかわらず、ザカフカースとイランの「トルコ語の一方言を用いるシーア派イスラーム教徒」の文化的、経済的関係は分断されなかった*。石油基地として栄えたバクーには、イラン領から労働者が集まり、タブリーズは、ロシアからもたらされる工業製品のイランにおける販売基地となった。バクーやトビリシ(チフリス)は、イラン領のアゼルバイジャン人が西洋文明に触れ得る学校となり、アゼルバイジャン語で印刷された進歩的新聞、雑誌は国境を越えてイランに持ち込まれた。しかし、アゼルバイジャン人という自己認識の展開は遅かった。東カフカースの諸民族は彼らをカジャール人と呼び、グルジア人、ロシア人はタタール人と呼んでいた。彼らがアゼルバイジャン人という民族名称を採用したのは、1918年ザカフカース連邦が崩壊し、民族政党であるムサヴァト党によってアゼルバイジャン民主共和国が成立してからであった。2年後の1920年、赤軍がムサヴァト政権を倒した後も引き続いて国名としてこのアゼルバイジャンが採用された。

アゼルバイジャン共和国の人々が再び、イラン領アゼルバイジャンを強く意識したのは、1945年のイラン領アゼルバイジャンのタブリーズのアゼルバイジャン自治共和国成立である。モスクワの援助で成立したこの政府は、西側の強い要求

に屈したスターリンが赤軍の撤退を余儀なくされるに及んで崩壊し、これに関わったイラン共産党とアゼルバイジャン民主党関係者は、すべてバクーに撤退せざるを得なかった。1940年代より民族主義傾向を強めたアゼルバイジャンの歴史記述は、南北に分断されたアゼルバイジャン人をひとつの民族として記述している。イランがイスラーム革命によって分解することは、バクーのアゼルバイジャン人、特にタブリーズからの亡命者にとって民族的待望でさえあり、イラン領アゼルバイジャン人との合同は、党内外を問わず民族主義者の目標のひとつになった。



南北アゼルバイジャン

(アゼルバイジャン共和国とイラン領アゼルバイジャン)

(3) アルメニア＝アゼルバイジャン民族問題の発生

アルメニア人とアゼルバイジャン人は敵対する運命に置かれている、とするような説明は正確さを欠くものである。19世紀まで、両民族は友好的とはいかないにしても、隣人として通常の社会的関係を保ってきた。紛争が起こったとしても局地的、個人的なものであった。1895～1896年、オスマン帝国内でアルメニア人に対するポグロムが行われたときも、アゼルバイジャンではこれに応じる動きはなかった。

アゼルバイジャン、アルメニア両民族の敵対の直接的きっかけは、青年トルコ党（統一と進歩のための委員会）のアルメニア人虐殺にあるのではなく、1905年のバクー事件に始まる。バクー事件は1905年のスングイト事件のように、突然起こって全カフカースを揺り動かした。1905年冬、バクーでアゼルバイジャン人ハッジ・レザー・ババイェフは、アルメニア人と争いを起こしたあげく殺された。これを知ったアゼルバイジャン人は激昂し、2月6日、近郊農村の住民を中心に数千人がバクーのアルメニア人居住区アルメニケントを襲撃し、3日間、暴行と略奪を続けた。騒乱は全カフカースに広がったが、アルメニア人のダシュナクツチューン党は、アゼルバイジャン人村落に対する無差別攻撃で応じ、結果として128のアルメニア人集落、158のアゼルバイジャン人集落が攻撃された。死者は3100人から10000人といわれる。原因はムスリム住民の中に、皇帝の敵であるアルメニア人がムスリム虐殺を企てているという噂が広まったためであるが、カフカース総督ゴリツィンおよびバクー知事ナカシーヅェが、第1次ロシア革命の危機を民族紛争によって切り抜けようとして、扇動したのであると信じられている。

バクーのアルメニア人とムスリムの緊張関係は継続していたが、1918年4月、バクーにおいて、ポリシェヴィキの軍事革命委員会とムスリムから編成された「野蛮師団」、およびムスリム住民との間に戦闘が生じ、ダシュナクツチューン党指揮下のアルメニア人は軍事革命委員会についた。この戦闘で最大1万2千人のムスリムが死亡したと言われる。しかし、同年9月、オスマン軍のバクー入城とともに、アゼルバイジャン人兵士がアルメニア人に対して無差別の虐殺を行い、9千人といわれる犠牲者を出した。

1917年10月革命の結果、1918年4月22日に成立したザカフカース民主共和国連邦

は1か月ほどで解体し、今日のようにグルジア、アゼルバイジャン、アルメニアが各々に独立した。オスマン帝国はブレストニリトフスク条約をポリシェヴィキ政権との間で結んだが、一方で、軍隊は進撃を続けた。ギャンジェ市、帝政期のエリザヴェトポリに首都を置いたアゼルバイジャンのムサヴァト政府はオスマン軍を歓迎したが、イエレヴァンのアルメニア政府とアゼルバイジャン領のアルメニア人は頑強な抵抗を続けた。

1920年4月、赤軍は突然アゼルバイジャンを占領し、ナリマン・ナリマノフの指導下にアゼルバイジャン・ソヴィエト社会主義共和国が成立した。しかし、カラバグ西部山岳地域のアルメニア人と赤軍アゼルバイジャン人部隊との流血は、前者が徹底的に弾圧されるまで続いた。

ソ連邦共産党の方針と諸共和国の憲法では、民族の権利がうたわれているが、ザカフカースの現実からはかけ離れていた。1964年ソ連共産党ザカフカース局は、グルジアのボルニスィとアハルカラキ、アゼルバイジャンの山岳カラバグ、アルメニアのバサルゲチャルのような少数民族居住地では、当該民族語の映画配給本数、ラジオ放送時間数が少ないと批判している。このとき、党中央は山岳カラバグ問題を認識していたようであるが、実際には、本質的に同様な問題は各地に生じていた。ボルニスィにはアルメニア人とアゼルバイジャン人、バサルゲチャルはアゼルバイジャン人居住区であって、グルジアにはほぼ50万人、アルメニアには15万人のアゼルバイジャン人が居住していた。一方、1988年の紛争開始以前、アゼルバイジャンには山岳カラバグ（ナゴルノ・カラバフ）を含め、約50万人のアルメニア人がいたからである。

（4）ナゴルノ・カラバフ問題

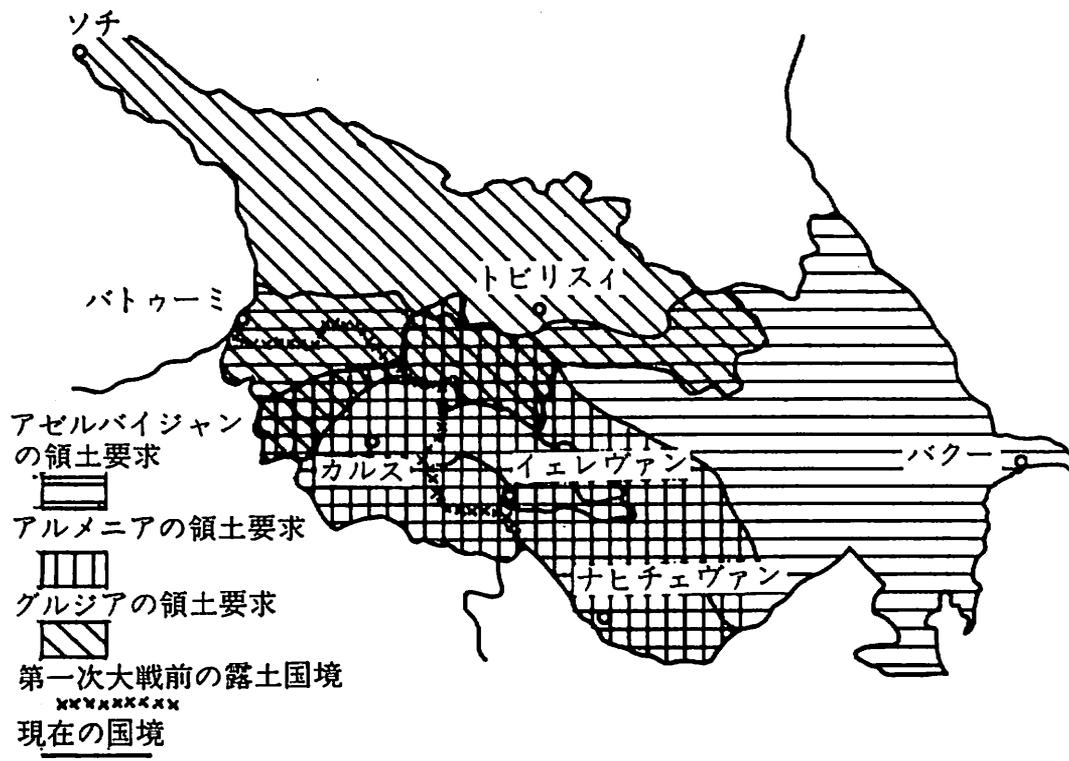
ナゴルノ・カラバフ帰属問題は、1918年カフカース民主共和国連邦が分解し、カフカース東部にアゼルバイジャン、アルメニア両共和国が成立したとき不可避免的に生じた。1920年の赤軍によるアゼルバイジャン、アルメニア占領まで、アゼルバイジャン人とアルメニア人の戦闘は続いた。同年12月、アゼルバイジャン政府は、カラバグの山地、ザンゲズル、ナヒチェヴァンをアルメニアに与えるという宣言を発したが、この宣言は不明確な状況下で取り消された。ただしアゼルバイジャン本土とナヒチェヴァン地方の間の回廊にあたるザンゲズルは、アルメニ

ア領に残された。赤軍のアルメニア占領当時、ナヒチェヴァンはトルコ軍の占領下にあり、イエレヴァン政府はレニナカン（当時のアレキサンドロポリ）でトルコと講和条約を結び、トルコに対してナヒチェヴァンを放棄していたので、主たる問題は、カラバグ地方山地の帰属に絞られたが、1923年、党機関の討議によって、アゼルバイジャンに帰属することが決定された。長い準備期間を経た後の1936年には、ナゴルノ・カラバフ自治州が成立したのである。

しかしこの決定は、当初よりアルメニア人の納得を得るものではなかった。アルメニア人のナゴルノ・カラバフ併合運動は、1960年代以後次第に盛んになった。ペレストロイカとグラスノスチは、運動家に公然活動の機会を与えることになり、政府、党を巻き込んだ大規模な運動がナゴルノ・カラバフとイエレヴァンの両方で展開されることになったのである。

ナゴルノ・カラバフ問題に関する初期の報道は、当地におけるアルメニア人の文化的環境が極端に劣悪である、ということであった。1960年代にカラバグから、クレムリンやイエレヴァンに送られた請願書やメッセージには、この点が強調されている。しかし1977年に作家セロ・ハンザディヤンがブレジネフに宛てた書簡は、むしろ、カラバグがアルメニアの歴史的領土の一部であることが強調されている。ナゴルノ・カラバフ自治州のアルメニア人成人の大部分が署名した1987年の請願書でも、具体的要求の実現を望むのではなく、あくまでもアルメニアへの統一を求めているのである。従って、逆にアルメニア領内のアゼルバイジャン人の民族的・宗教的・経済的利害に配慮する文言はみられない。また、指導者ゾリ・バラヤンの歴史的知識は間違いだらけであり、アゼルバイジャンの歴史や文化に対する配慮、尊敬は全くない。バラヤンが今日ザカフカースに充満している危険な国粹主義者のひとりであることは明白である。

ソ連内外を問わずアルメニア人がナゴルノ・カラバフの帰属を求めるのは、「カラバグは我々のものだ！」からである。経済的社会的矛盾を言論と報道の自由によって解決しようとするペレストロイカの観点からして、このような要求が拒否されたことは当然であると思われる。またこの悪病がカフカースのあらゆるところに伝染することも、予期しなければならぬことであった。アゼルバイジャン人民戦線はこのような要求を往時ダシュナクツチューン党の「海から海まで」主義の主張であると感情的に理解しているのである。



1919年6月パリ平和会議でのアルメニア、アゼルバイジャン、グルジアの領土要求
(R. Hovvanisian氏による)

アゼルバイジャン人民戦線の理論的指導者である故ブニャトフ東洋学研究所所長（1997年暗殺）や、彼につながる一連の歴史学者の理解では、カラバグがアゼルバイジャンの固有の領土であるのは、以下のような理由によるのである。

古代アルバニア人はクル川以北のみならず、アラス川に至る全地域に居住し、彼らがキリスト教に帰依して後は、この地方はアルバニア教会に所属した。アルバニア教会はアラブ人の政権下に次第にアルメニア教会の教義を採用し、用語もアルメニア化した。また一方では、アルバニア人はイスラーム化した。ムスリムかキリスト教徒（この場合アルメニア人というアイデンティティを取る）たるかを問わず、アゼルバイジャン人は古代アルバニア人の子孫なのである。今日山岳カラバグで大多数を占めるアルメニア人は1832年のトルクメンチャイ条約以後イランから移住してきた新しい住民に過ぎないのである。古代アルバニアの一部であったカラバグが、アゼルバイジャンの固有の領土であるのは当然であると主張される。ブニャトフ氏が1965年にこの説を発表して以来、両国研究者の間で批判、反批判の応酬が続いている。

1988年2月27日から29日にわたって生じたスンガイト事件については、袴田茂樹

の「ゴルバチョフを灼く赤い炎」（『文藝春秋』1988年6月号224～236頁）に詳述されている。これによって事件の経過をたどると、27日土曜日夜9時、群衆は店舗を破壊するなどの乱暴を始めたが、翌28日日曜日午前11時、1000人ほどの群衆が車をひっくり返して放火するなどを行った。民警は彼らを解散させようとしたが、投石にあってうまくいかなかった。また、内務省の治安軍が出動したが、群衆は1500人から2000人にも達していたので鎮圧に失敗した。やがて、群衆はアルメニア人のアパートに押し寄せて、暴行、略奪、放火、強姦を行った。暴動は29日朝、正規軍によって鎮圧されるまで続いた。公式発表によると、死者32人（内アルメニア人26人）、負傷者197人であった。

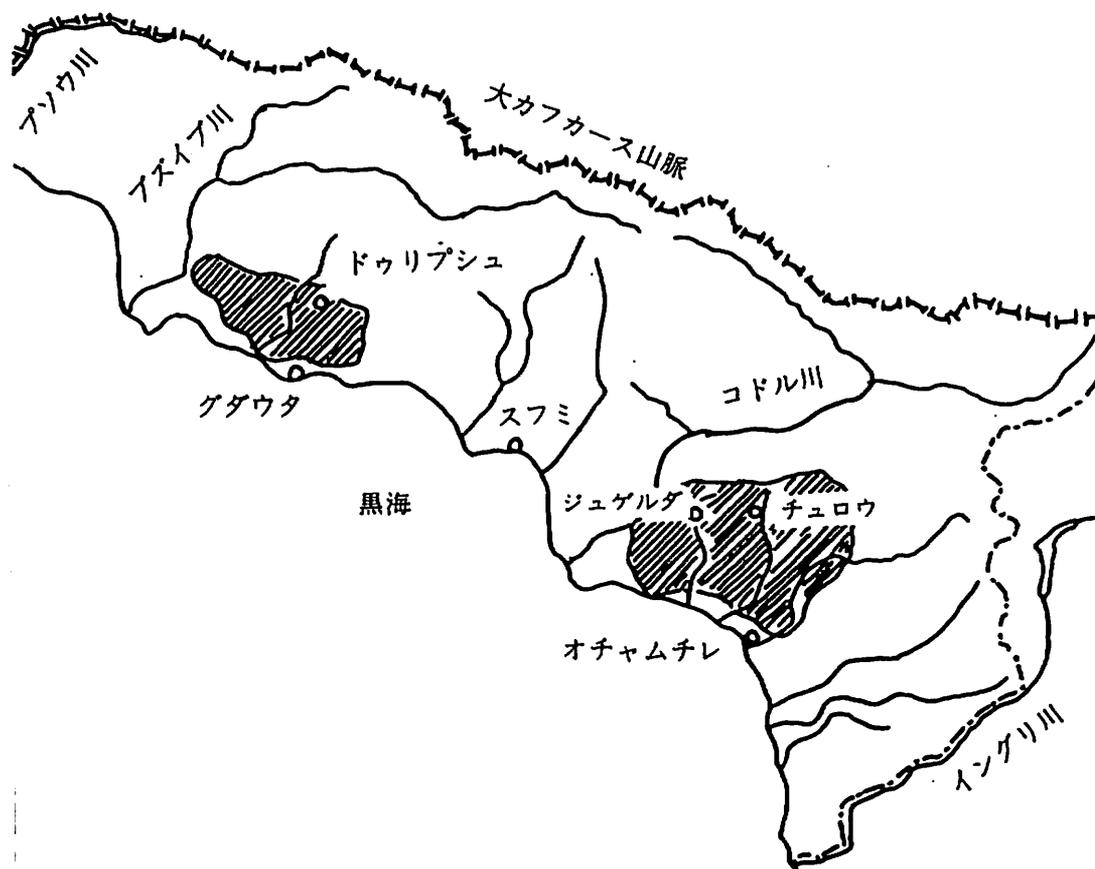
アゼルバイジャン政府は、当初スngaイト事件とナゴルノ・カラバフ問題との関係について述べなかったが、やがて、事件に先立って、アルメニア人の政治組織「クルンク（鶴）」のメンバーが、スngaイトのアルメニア人住民の間で強制カンパ活動を行っていたこと、当日アルメニア人グリゴリアン某が、アゼルバイジャン人を偽ってポグロムの扇動を行ったが、事件のさなかに彼自身殺されたこと等を主張しだした。アゼルバイジャン人民戦線、カラバグ民族救援委員会等は、それが組織的な事件であることを認めず、逆にアルメニア人がアゼルバイジャン人に対して暴力を加えたり、文化遺産を破壊していることを非難している。ソ連三大犯罪都市のひとつなどと呼ばれたバクーではなく、その近郊都市であるスngaイトでこのような事件が起きたことは、居住環境の極端な悪化（ブニヤトフ）や、暴動の主たる参加者である10代半ばの青少年が下層労働者やその予備軍である職業技術教習所（中学にあたる）生徒であり、彼らの労働、生活条件も劣悪であったこと（袴田）など、社会的要因によっても説明できる。しかし、衝突がポグロムやアゼルバイジャン各地の諸都市に波及したことから、政治的原因、すなわちアゼルバイジャン政府当局者がステパナケルトのデモ参加者を「過激派」ときめつけたり、ジャーナリズムも事態の成り行きや、アルメニア人の要求の内容を正確に報道しなかったばかりか、扇動的論調を行う新聞も現れた等のこと（袴田）がより重要であろうと思われる。スターリンのもとで盛んになった大ロシア主義を補強するものとしての地方的民族主義はまさにこのように運用されてきたのである。

2. グルジア民族の成立とグルジアの民族問題

(1) グルジア民族の成立

グルジア人がカフカースを中心とする中東に、有史以前から居住していた古い民族の子孫であることは定説となっている。前8世紀のウラルト国の碑文には、ディアオヒ、コルカという種族の名が見える。旧約聖書エゼキエル書、創世記等に見られるトバルは、グルジア系の種族であると考えられる。一方、ギリシャ人の記述によると、紀元前6世紀にはコルキス王国が建てられた。また、ヘロドトスはいくつかのグルジア系種族の名称を挙げているが、紀元前4世紀には、その中からイベリア（カルトリ）王国が誕生した。グルジア共和国のトピリスィの北30キロメートルの地にあるムツヘタはその都であった。今日に至るまで、グルジア人の精神生活と関わりの深いキリスト教はイベリアでは4世紀、西グルジアでは6世紀に国教化された。グルジア教会はアルメニア教会とは異なり三位一体説を採り、シスマにあってはコンスタンチノポリスを支持した。7世紀に東グルジアはアラブ軍に占領され、トピリスィは11世紀までアラブ人アミールに支配された。この間西グルジアには、8～11世紀にアブハズ人とグルジア系メグレリ人が建てたアブハズ王国が栄えた。ただしこの王国の先住民がだれかについては、アブハズ人、グルジア人の意見が分かれるところである。一方西南グルジアはビザンツ帝国の支配下にあったが、この中のタオのクロパレテス領が強力であった。11世紀、バグラト家のバグラトによってアブハジア、タオ、カルトリの3地方の王冠が合わせられ、首都は西グルジアのクタイスィに置かれた。このようにして形成された新しい国家は、サカルトヴェロと呼ばれた。バグラト朝はビザンツ帝国とセルジューク朝の攻撃に苦しみながらも、領土をザカフカースとその近隣のキリスト教徒地域に広げた。その最盛期はタマラ女王の時代（1184～1213年）で、領土は、東はダラバンドから西はアナトリアのチョロフ川上流、北は黒海沿岸ニコブスィア（スフーミ近郊）から南はアラス川岸に至った。

バグラト朝サカルトヴェロ王国の隆盛は、モンゴル人、ホラズム人、チムール帝国の征服を蒙って下り坂になり、15世紀にはカルトリとイメレティアに分裂し、さらに第3のカヘティア王国がカルトリから分離、西南グルジアもサアタバゴ領として独立した。16世紀イメレティアはアブハジア、メグレリア、グリア、スヴァネティアの独立君侯領に分解、その他の王国にも自立的な封建所領が形成された。



アブハジア（斜線部は現在アブハズ人が集中して居住する地域）

東部、西南部では住民のイスラーム化も進んでいた。諸王は常に国家の統一と独立に意を尽くしたが、オスマン帝国とイランからの侵略、諸侯の抵抗によって成果をあげることができなかった。ついにカルトリ・カヘティア王は、1801年、ロシアに併合される以外の解決を発見できなかった。イメレティア王もこれに続き、西グルジアのアブハジア、メグレリア、グリアの諸侯もこれに続いた。

（2）グルジアの民族主義

ロシア帝国への併合は、トルコとイランの侵略による民族絶滅の危機に臨んで、他に選択の余地がなかったという点で、半ばグルジア人が望んで行われたものであったが、ツァーリの支配はグルジア人の意に沿うものではなかった。各地に次々と起こった農民反乱は鎮圧されたが、一方、資本主義の発達にともなって新しい知識人層が成立し、自覚的民族解放運動が進められた。文学者イリヤ・チャフチャヴァーゼ（1837-1907年）は民族独立を求めて、鋭くツァーリズムを攻撃した。カヘティア地方の大貴族で、チフリス貴族土地銀行頭取を勤める有力政治家であったイリアは、グルジア識字普及協会、新聞『イベリア』等の後援者であ

った。彼は元社会民主党員に殺害されたが、人々は犯人を秘密警察の手先であると考えた（ただし、ベレストロイカ以後この説には疑問がだされている）ので、チャフチャヴァーツェはロシアに対する民族独立運動の象徴的存在となった。

1918年5月、グルジアはロシア社会民主党メンシェヴィキ派の指導下に独立した。革命前からグルジアには反アルメニア的機運があり、むしろロシア人に対する民族的反感は少なかったが、それはグルジアの商人、企業家にはアルメニア人が多かったからであった。グルジア人のアルメニア人に対する敵意は、1918年末のグルジア・アルメニア戦争勃発の際には略奪行為となって現れたが、これにはメンシェヴィキ政府によって、ブルジョワジーに対する階級闘争であるという規定さえ現れたのである。このようなグルジア・メンシェヴィキ政権のもっていた民族政策上の問題は、後に自治的政体をとった3集団、アブハズ人、アジャル人（グルジア人ムスリム）、オセッт人に対しても遠慮のないものであった。「オセッт人を打ち敗って殺し尽くし、アブハジアではあらゆる村々を焼き払い、アゼルバイジャンとアルメニアに対してショーヴィニズム的要求を突きつけた」と、1920年9月のバクーにおける東洋民族大会で批判されたが、当事者の回想録にもそれを裏づけるものがある。

1921年2月、赤軍は、アルメニア国境に近いロリ地方の農民反乱を口実にグルジアを占領した。アゼルバイジャン、アルメニアに続いた一連の事件であるが、アゼルバイジャン、アルメニアとグルジアの国際的地位には、かなりの違いがある。アゼルバイジャン、アルメニア両国が国際的に承認された国家ではなかったのに対し、グルジアは欧州各国と種々の協定を結び、他ならぬロシアを始め、国際的承認を得たに等しい状態にあったのである。対グルジア作戦においても、赤軍は対アルメニア、アゼルバイジャン作戦と同様にトルコ軍と連携して動いた。トルコ・ソ連友好条約における国境確定条項がトルコに対して有利に決定している点を考慮すると、1920～1921年のザカフカースの状況は、1939～1940年のバルト地方を巡る状況と酷似しているように思える。

スターリンの支配下においても、グルジア人は民族主義的感情を失わなかったが、これはグルジア事件（1923年）、メグレリ事件（1951年）、スターリン像撤廃阻止暴動（1956年）等をひきおこして弾圧された。1972年グルジア党第1書記に就任したシェヴァルドナーゼは、少数民族の文化的権利を擁護しただけでなく、

グルジア人のナショナリズムを押さえる政策を追求した。しかし、その一方では1976年、作家レヴァズ・ジャッパリーツェはグルジア作家同盟総会で、高等教育のカリキュラムにおけるグルジア史、グルジア地理の欠如を批判した。1978年には有名な憲法改正事件、すなわちグルジア語を唯一の公用語の地位から外そうとしたことに反対する運動が起こった。また1981年にはトピリスィ大学の英文学助教授であったズヴィアド・ガムサフルティア罷免撤回運動が起こった。1989年春の運動は、これら一連の動きの中で考えなければならないであろう。なお、上記の市民、学生の動きは、すべて4月に起こっている。

(3) アブハジア事件を巡って

政治・行政上のアブハジアは、グルジアの北西部、黒海に面し、北はブソウ川、南はインギロ川の間地域で、面積8600平方キロメートル、ほぼ我が国の島根県に相当する。人口は53万7千人。主要民族アブハズ人は、約9万人にすぎず、最大民族集団はグルジア人24万人である。

アブハズ人の言語アブハズ語は、コーカサス語族の北西コーカサス語派アブハズ語群に属する言語で、ロシア語、アルメニア語とはもちろん、グルジア語とも異なる。ソ連の言語学者ディヤーコノフの説に従えば、ヒッタイト時代のアナトリア中央部のカスカ語・原ハッティ語はアブハズ語と同系であるという。~~ディヤーコノフ~~¹⁷氏によって~~特定~~されたアブハズ人の祖先が小アジアからカフカースへ移住したものか、当時よりこの地方に定住していたかは不明である。明らかなことは、古代ギリシャの著述家達が「アブハズィア」あるいは「アバズギア」の地名を知っていたということである。

アブハジアはコルヒダ、ラズィカ、後にアブハジア王国の一部となった。伝説的アチャア氏によって建国されたアブハジア王国は8世紀から10世紀にアブハジアと西グルジアを領有し、ビザンツ皇帝から王号を与えられた。アブハズ王国の民族的性格についてもアブハズ、グルジア人の理解がわかるが、しかし、アブハズ人がアブハジアと西グルジアに定住していたのでも、アブハズ人が西グルジアを征服したのでもなく、国名は単に王号に由来するのであって、王冠の下にアブハズ人とメグレル人が統合されていたと考えるべきであろう。この王冠は、11世紀に西南グルジア出身のバグラト家に伝えられた。西アジアでは、バグラト家の

グルジア王国は「アブハーズ」あるいは「アブハーズとゴルジ」と呼ばれていた。統一グルジア王国成立後、西グルジアには小都市ダディアを中心に、ベディアニ家のサベディアノ公領が成立。15世紀サベディアノはアブハジアのシャルヴァシーツェ家、ダディアニ家のオディシェリ領、グリエリ家の分有するところとなった。15世紀までのシャルヴァシツェ家領はコドリ川以北であったが、17世紀以後はインギロ川以北を獲得した。これが19世紀ロシアに併合されるまで続いたアブハジア公領、いわゆる大アブハジアである。同地方は伝統的にはブズィブ、グム、アブジュイ、サツサムルザカン等の地域からなり、これに加えてブズィブ川以北のヘオタ川までが小アブハジア、プスフ川流域が山地アブハジアと呼ばれていた。19世紀前半、アブハズ人は、ソチ川からオルヘイ川までの間の全域に住んでいた。オルヘイ川とインギロ川の間はサツサムルザカン地方ではメグレリ人の流入が多く、早くからメグレリ人が人口の多数を占めるようになったが、これについてもアブハズ人とグルジア人の理解はかなり異なっている。

アブハジアを初めとして、カフカース西部は地中海方面の影響を強く受けた。最初にアブハジアの海岸にやってきたのは、メディアやペルシャの軍隊ではなく、ギリシャ人の植民者であった。アブハジアはローマの版図に入り、ビザンツの影響下、6世紀にキリスト教化した。そして小アジアがオスマン帝国の支配下に入ると、アブハジアも1578年から1771年までスルタンの名目的支配下にあった。スルタンはスフーミに城砦を築いてイエニチェリを配備し、陸海の監視にあたった。トルコの支配下でアブハズ人の多くがイスラーム教に改宗した。1877～1878年の露土戦争後、カフカースのスンニー派ムスリム諸民族の間に、オスマン帝国領に移住しようとする動きが起こった。ムハーージェルン運動である。これは法的には、サンステファノ条約にうたわれている露土両国住民の交換条項によっているが、オスマン側からの強力な扇動とロシア側の承認があって可能となった。アブハジアからは、人口の半ばを越える6万人ほどが出国した。スフーミ地方（グムあるいはグミスタ）では、住民のほとんどが移住し、スフーミの27か村のうち、アブハズ人の集落は1村を残すのみとなり、残る26村は、ギリシャ人10、ロシア人6、メクレリ人5、エストニア人3、ドイツ人2となった。オスマン帝国における移住者（ムハーージェルン）には苛酷な運命が待ちかまえていた。オスマン政府は、彼らの移住を奨励したにもかかわらず、この政策には財政的な裏づけが欠けていた。

アズハズ人農民は、期待した農地を与えられなかったばかりでなく、忽ちその日の糧にも事欠くようになった。空しく異境に朽ち果てることを望まなかった人々は帰国を試みたが、ロシア官憲は海岸を封鎖して、彼らの上陸を阻止した。生き残った人々は、当時のオスマン領内の各地に分散して移住した。中東各地における彼らの子孫は、今日約10万人と推計される。

悲劇的なムハージェルン運動からロシア革命の勃発までは、半世紀を経なかった。10月革命後、アブハジアはグルジア・メンシェヴィキ政権の支配を経て、1921年に、グルジアとは別個の自治ソヴィエト共和国として成立したが、1930年にはグルジア共和国の一部として、アブハジア・ソヴィエト自治共和国に編成替えされた。この時、ソチ地方はアブハジアから切り離されてロシア連邦に帰属した。1937年の粛清はアブハジアをも襲い、統治グルジア共産党第一書記であったコンスタンチン・ベリヤはアブハジア党の幹部10名をトロッキズムと民族主義的偏向の名目で銃殺した。アブハジアは大グルジア主義の犠牲となり、1928年にラテン文字に変更されたアブハジア語アルファベットは、1938年、グルジア語字母に基づくものに変更された。

北カフカースの諸民族、トルコ国境ぞいのメスヘティ・トルコ人やヘムシン人が中央アジアに移住させられたとき、アブハズ人に対しても同様の計画が練られていたがこれは実施されなかった。1953年はグルジアの少数民族政策に大きな転換をみた年であった。教育制度が改革されて、新しいアズハズ語学校が建てられ、新聞が創刊され、スフーミの師範学校にはアブハズ語アブハズ文学部門が設立された。1954年、字母もキリル文字に基づくものに変更された。しかしグルジア共産党第一書記ムデイヴァナゼの長い統治に、全グルジアは闇経済と民族主義に直面した。トビリシの政府が、少数者の代表と利益を排除した政策を保持しようとしたのと同じく、アブハジアも、アブハズ人による政権を樹立しようとして、トビリシ政府と衝突した。シェヴェルドナーツェは、ギリシャ人のような少数民族の権利を擁護すると同時に、グルジア民族主義を押さえようとして、しばしばトビリシの民族主義者と対決しなければならなかった。

スフーミでは1981年に政府のアブハズ人閣僚枠増加を要求するデモが起こった。スフーミ師範大学はアブハズ人の高等教育の要求を満たすために、国立アブハジア大学に昇格した。そして、この大学におけるアブハズ化の進行の結果、グルジ

ア人のための大学として、トビリシィ大学分校が必要となった。アブハズ人がこれに反対したのは、トビリシィ大学分校設置によって彼らの権利が侵害されるからというよりは、アブハジアはアブハズ人の国であるという主張からであろう。1989年のスフーミ事件後、トビリシィ、イエレヴァンのテレビ放送は共に、アブハズ人の用いた自動小銃、機関銃等はトルコからもちこまれたものであると報道した。真偽の確認はできないが、アブハズ人がスンニー派イスラーム教徒であり、トルコ国内に多数のアブハズ人がいることを考え、事態が深刻化する事も案じられた。

結論と展望

ザカフカース諸共和国における民族問題の特徴は、単に対ロシアであっただけでなく、民族間の利害が輻そうし、一層深刻であること、国境の変更を必要とするような処置を講じても、万人を納得させるような解決策は見だし難いこと、過激な民族主義者の要求範囲はソ連国境内部に留まらないので、対外関係上の問題が生じる可能性があることである。

日本はソ連に対して国境の変更を要求していた。ソ連は一旦獲得した領土はなかなか返還しないから、交渉は困難であるというのは楽観論を戒める立場からの議論であったが、フィンランドからルーマニアに至るソ連西部国境に接するあらゆる国々が、現国境に何らかの不満を持っており、国境の外側に同胞が取り残されていると考えている。ソ連崩壊後、このような要求は各国政府とロシアとの国境不変更条約によって抑えられている。南部ではトルコ、イランが、潜在的な領土要求を持っている。イランは論外としても、第2次世界大戦に際して、スターリンは戦況次第ではトルコの参戦があり得ると考えてザカフカースに軍隊の配備を怠らなかった。この様な状況で日本の領土要求は国際的な関心と呼ぶであろう。しかし、ザカフカースで重要なのはソ連に対する領土要求ではなく、ソ連側からの領土要求であった。グルジアはトルコ領アルダハン、アルトヴィン両地方が、アルメニアはトルコ領カルスを「固有」の領土であると考えている。これらの地方は、古代や中世の国境線に基づいた誇大妄想的歴史的領土の要求ではなく、1878年のサンステパノ条約に定められた国境なのである。またアゼルバイジャンはイラン領アゼルバイジャン人を同胞とみなし、いつの日か統一国家を樹立するこ

とを夢見ている。イラン革命後、イギリス出身の中東研究家バーナード・ルイスはイランの民族的分解を想定し、北西イランはソ連に編入されるものと考えた。またナヒチェヴァンにつながるトルコ領にも、アゼルバイジャン人が居住していることを考えておかなければならない。即ち、北方領土返還要求に付随して当然発生する、ソ連内外の領土問題に対する処置を講じておかなければ、必ず悪い結果が生ずるであろう。政府見解をうけた浅田彰氏は北方領土購入を考えたが、購入するにしても、その後で続々と生ずるモスクワ政府に対するソ連国内外からの国境変更要求と日本の経済力に対する嫉妬をなだめるためには、日本はソ連西南国境全域に「円」を敷き詰めなければならなかったであろう。*

ひとつの民族が二つの国家に分断されている状態、すなわち、分裂国家が悲劇であるとすれば、ザカフカースは国家的悲劇の極みにある。これの解決は人工的境界の確定と、有無を言わさない強制移住によらないかぎり不可能である。あのスターリンでさえもあえてなさなかったことであるが、かりにこの独裁者があえてそのようなことを行っても、ただ当時の国境の範囲で一時的な駒の置き換えが可能になっただけであろう。真の解決は、民族国家という擬制を捨て去ることによってしかなし得ない。19世紀に国民国家（＝民族国家）という幻想にとりつかれた西欧は、第2次大戦後、民族紛争や国家のエスニック的分解という、新たな混乱の中に投げ入れられた。彼らがこれから抜け出るために選んだ方法は、エスニック集団に対する自治、とくに文化的言語的自治の承認とヨーロッパ統合であった。地域の政治的統合と少数民族の自治付与、文化言語の尊重は、1920年代のカフカースで実施された進歩的政策のはずであった。これが今日の混乱を生んだのは、最上層に大ロシア主義を置き、中位に共和国主要民族の民族主義、最下位に自治共和国・自治州の民族主義を置いた、スターリン統治下の重層的排外的民族主義のためである。しかし、我々はスターリン・シンドローム（あらゆる責任をスターリン個人や彼の少数の側近に帰し、冷静に真の状況を解明する努力を放棄すること）に陥ってはならない。混乱の源は、1918年にザカフカース連邦が解体した直後から始まり、ポリシェヴィキ党はその過ちを1921年に受け継いだのである。スターリンに彼一流の粗暴さがあったことは認めるとし、また、彼の動機や行為に全幅の信頼を寄せるものではないとしても、グルジア事件における彼の対応は、本当に過ったものであったのであろうか。あるソ連研究者はペレストロイ

カをパンドラの箱に譬えたが、筆者は、レーニンが民族共和国の連邦制というパンドラの箱を開けてしまったと愚考するのである。彼が箱の隅を覗いたときは、そこに党と指導者の絶対的権威が残っていたが、今や、それはもうないのである。

参考文献

アレム、ジャン=ピエール、藤野幸雄訳『アルメニア』白水社、1986年。

Carr, E.H., the Bolshevik Revolution, 1917-1923, 3 vols, London, Pelican Book, 1966 (First Pb., London, Macmillan, 1950) .

カレール=ダンコース、エレヌ、高橋武智訳『崩壊した帝国』新評論、1981年。

北川誠一「アルメニア人問題の背景」『海外事情』拓殖大学海外事情研究所、1987年3月号。

同 「アルメニア・アゼルバイジャンの民族間紛争」『海外事情』拓殖大学海外事情研究所、1988年7・8月号。

同 「山岳カラバフ帰属決定交渉」『海外事情』拓殖大学海外事情研究所、1989年4月号。

同 「平和のカラバフ--紛争以前のアルメニア・アゼルバイジャン関係」『ビュレティン』ソビエト研究所、第2号、1989年。

同 「アルメニア古代史展望」『弘前大学国史研究』86号、1989年。

サイミス、コンスタンチン、木村明生訳『権力と腐敗』PHP研究所、1982年。

木村英亮、山本敏『ソ連現代史』第二巻、山川出版社、1978年。

木村英亮「ナゴルノ=カラバフ自治州」『ソビエト研究』創刊号、白石書店、1989年。

佐藤信夫『ナゴルノ・カラバフ』泰流社、1989年。

高橋清治「ザカフカス--1918年夏」『歴史学研究』405号、1974年。

同 「グルジア問題の展開」『ロシア革命論』（菊地昌典編）田畑書店、1977年。

同 「民族の問題」『ロシア・ソ連』（倉持俊一編）有斐閣、1980年。

同 「グルジアの現代史から」『等身大のソ連』（倉持俊一編）有斐閣、1983年。

同 「歴史における民族—ガムサフルディアの『レーニン宛公開状』」『ロシア史の新しい世界』（和田春樹編）山川出版社、1986年。

同 「民族の問題とペレストロイカ」『世界』1988年6月号。

袴田茂樹「ゴルバチョフを灼く赤い炎」『文藝春秋』1988年6月号。

藤本信 「傾いたバベルの塔」『世界』1988年6月号。

同 「怨讐の森は動き出す」『世界』1988年7月号。

山内昌之「トルコ=アルメニア戦争とトルコの対ソ関係（1919-1920）」『スラヴ研究』19号、1974年。

注

* イラン領アゼルバイジャンの文化は、言語を除きイランの他の地域と共通であると言ってよい。

** 1981年ゴルバチョフソ連大統領訪日の直前、『トゥルド（労働）』は、領土問題には直接触れず、「白海からオホーツク海まで我が領土」という大見出し、写真入りの記事を一面に掲載していて、庶民や保守派の領土観を示した。1998年2月、ロシアの世論調査によると条件付きを含めると大多数が返還に賛成したという報道がなされたが（『朝日新聞』1998年2月8日付）、他ならぬその記事の中に、調査の客観性には問題があるとコメントがなされていた。客観性のない世論調査の結果を報道する意味があるのは、誰が何の為にそのような調査を企画し、報道機関に通知したかも調査した場合だけである。

初出 『現下ソ連の民族問題』1990年3月、外務省欧亜局ソヴィエト連邦課ただし、ポスト・ソ連の現状に併せて若干の変更を加えている。

1 アブハズ・グルジア紛争における歴史記述の機能 *

あらゆる民族紛争と同様にアブハズ・グルジア紛争にも問題の原因と背景がある。社会科学の諸分野の専門家は各人の方法論によってこの紛争の原因を分析することができるであろう。筆者は歴史記述を今日のコーカサスの民族紛争を説明する非常に大きな要素であると考えている。勿論あらゆる紛争はそれ自体の展開に関する歴史を持っている。しかしここで簡単に述べようとするのは、歴史記述はそれ自体が、社会的・経済的・地域的・宗教的・部族的・政治的理由と並んで、紛争の原因であるということである。

客観的な論拠のない歴史文学がどれほど読者を誤った歴史理解に導くかについては、説明の必要はないであろう。日中のあるいは日韓の種々の歴史論争と同じく、グルジアの文献学者インコロヴァ教授のアブハズィアのアブハズ人の歴史に関する論文は、アブハズ人の間に強い怒りを引き起こした。この非科学的文献が掲載されるはずの新聞の発行を差し止めようとするアブハズ人の運動がスフーミの1989年の紛争の原因となった。日本で高校の歴史教科書の侵略という字句を進出と書き換えたとする誤った報道が中国と韓国で広い抗議の声を引き起こしたように、この結果的には出版されなかった原稿はアブハズィアで反グルジア運動の原因になったのであった。

ソ連邦の時代にはあらゆる出版物は検閲を受けたが、基本的にはソ連邦の兄弟諸民族の間に不快をもたらす文献は、教科書であろうと新聞や雑誌の啓蒙的文章であろうと出版は困難であった。諸民族の間の将来の調和は過去の紛争の事実より重要であったからであった。1998年に暗殺されたアゼルバイジャン共和国科学アカデミー・アジア・アフリカ民族研究所所長ズィア・ブニャトフの『7-9世紀のアゼルバイジャン』（バクー、1965年、ロシア語）は当時のハイダル・アリエフ・アゼルバイジャン共産党第一書記から、アルメニア、アゼルバイジャン両国民の友好を傷つけるものであると批判され、アゼルバイジャン語訳はベレストロイカ期まで出版を許されなかった。

科学的文献は啓蒙的文献より検閲の程度は低かったが、ソ連国内の共和国、自治共和国、自治州もそれぞれの公式の歴史記述を持っているので、研究者はそれぞれの組織の中では公式見解に拘束された。コーカサスでは、最初の民族紛争は隣り合う共和国や自治共和国・自治州の科学アカデミー会員、歴史学博士などの歴史研究者の間で、歴史的過去に関する理論的具体的に様々な問題に関するアカデミックな議論の中で起こった。

先ず、彼らは自分の研究を帰属する共和国、自治共和国・自治州の公認の歴史観の中で研究を発表する必要があった。第二に民族の名前がつけられている共和国、自治共和国・自治州の主権および自治の特権は、例え実際は中央と地方の政治的関係の中で決定されたのであれ、同一名称の民族のその地域における先住性によっている。各地域における民族の人口の集中と発展は、人口政策と名称民族の先住性の根拠を益々確実にする歴史的権利によって統制されていたのである。

少なくともカフカースでは、ソ連時代の共和国や自治共和国・自治州の境界がソ連政府によってしばしば変更されていたことはあまり注目されていない。また境界の変更がそれに満足しない人々によって要求され続けていた。現存の境界を越える歴史的民族領域を想定したり、近隣諸国との公式の領土的徹底に反する研究は近隣関係の侵害とみなされ、著者は社会主義的秩序の破壊者として非難されることになった。

名称民族共和国、自治共和国・州の現在の境界はソ連諸民族の歴史的過去における活動と一致している訳ではない。30年代に根幹民族政策が実施されるまで彼らは、歴史的過去を共有することができたが、その後は、あらゆる歴史的過去を民族毎に分有する必要が生じた。かって、国際的性格を持っていた文化的、政治的活動家は必ず、今日のどれかこれかの民族の指導者であり、従ってその民族の一員であると主張されなければならなかった。今日の民族名称、民族概念が意味を持たない時代に関してであってても。

名称民族の制度は民族政治に向かう政治的立場から発生する。また。民族政治は真の民主主義とは一致しない。名称民族のその名称の領域に於ける他の民族に対する様々な分野での優越はソ連憲法で保証されている訳ではない。しかし、現実には公的組織の重要な官職はその名称民族に与えられており、それに反する任命は地元住民から民族的権利の侵害であると考えられた。名称民族の一員である

ことは、他の諸民族との比較で表現すれば、それだけで人生の成功を約束されたのである。従って、名称民族の地域で彼らの先住性を研究することは学術上や民族的プライドの問題ではなく、利害にかかわる行為であった。研究者達の間の静かな議論はやがて民族主義者達の喧噪たるアジテーションに、さらには武力闘争に拡大していった。我々はこのような過程の実例をナゴルノ・カラバフ紛争やアゼルバイジャンのレズギ人、アヴァル人、タレシ人とアゼルバイジャン人官憲との衝突にみることができるが、アブハズィアのアブハズ人とグルジアの間の紛争もこのような例の一つである。

二、主要問題

学術文献におけるアブハズ、グルジア紛争での主要な論争は以下の諸問題である。

- 1 古代アブハズィアの住民であるアバズグ人、アプスル人が今日のアブハズ人（自称はアプスア人）の祖先であるのか、グルジア系民族の祖先であるのか。
- 2 9世紀に現れた中世アブハズ王国の民族的性格。
- 3 10世紀に出現したグルジアのバグラト王家の民族的出自。
- 4 19世紀まで今日のアブハズィアに存在したアブハズィア公国の民族的領土的構成。
- 5 ロシア革命後成立したグルジア共和国（1918-21）の対アブハズ人政策。
- 6 ソ連時代のグルジア政府によるグルジア人移民のアブハズィア導入政策とアブハズ人に対する圧迫。

三、アブハズィアの古代・中世住民--事例説明

グルジアの最初の国家はギリシャ人によってコルキスとして知られている。「アルゴー船」伝説に言う金羊皮の国である。歴史に関するあらゆるグルジアの文献ではこれをエグリシィ（ロシア語の名称はコルヒダ）と呼び、西グルジアに多いメグレリ人はその子孫であると考えた。しかし、一部の外国やアブハズ人の研究者は言語学的資料に基づいて、コルキスの住民はアブハズ人の祖先であると考えた。コルキスの王女メディアの兄アプシルトス Apsyrtos の語源は、古バビ

ロシア語のabsu割れ目か、古いアブハズ語の */a-psw-art- (前置詞+アブハズ人+人称格語尾) であると考えられた (John Colarussoによる)。この説に従えば古代の黒海東岸の住民はアブハズ人の祖先であり、今日ここに住むグルジア系住民は新参者であるということになる。もしそうであれば、アブハズ人は主権やグルジアからの独立を含む名称民族の権利を持つことになる。コルクスはスキタイ人の侵入によって弱体化し、後にその領域にはローマ時代にラズィカ王国が成立する。この住民は今日トルコのトラブゾンとグルジアのアジャリアに住むグルジア系民族ラズィ人と名称が類似するので、グルジアではラズィカを建てたのは今日のラズ人と彼らに近縁のメグレリ人の祖先であるとするが、アブハズィアではグルジア人によるラズィカの独占に反対する。

ラズィカ住民の多くがグルジア人であると想定しても、では今日のアブハズ人の祖先はその時どこにいたのであろうか。紀元1、2世紀よりローマ人の記した文献は、アプシル人とアバズグ人の存在を記述する。しかし、またこの二つの民族の帰属に関しても学説は大きく、グルジア人説、アブハズ人説に分かれる。彼らはグルジア系スヴァン人の祖先かもしれないし、アブハズ人や類縁のアディゲ人の先祖であるかもしれない。更に彼らの出自に関しても両国の研究者の意見は様々である。彼らはアブハズィアの固有の民族で、それ以前はコルクスやラズィカの政治的連合体の一部であった可能性がある。あるいは、彼らは紀元前後に北コーカサスから南下したのかもしれない。もし彼らが土着のアブハズ系集団であるとするならば今日のアブハズ人はアブハズィアの根幹民族として完全な権利を有することになる。もし彼らがグルジア人であると、根幹民族の権利はアブハズ人ではなくグルジア人に帰し、アブハズィアの人口の約半分を占めるグルジア人が完全な意味で多数派の地位に就くことになる。最も典型的なアブハズ人の意見はこの二つの種族が共に今日のアブハズ人の祖先であるというものであり、最も極端なグルジア人の主張は、アプシル人もアバズグ人もグルジア人の種族であり、今日のアブハズ人は17世紀にコーカサスの北からの移住者の子孫であるので彼らに名称民族としての権利はないとする。

紀元前11世紀のアッシリアの碑文にアナトリアの北東部に居住していた「アベシェラAbeshela」人に関する記述があり、中世にグルジア人ジュアンシェルが記した年代記にはアプシレティApshileti (意味はアプシル人の国) という地名を載

せる。一部の研究者はこれは、古代のアベシェラ、アプシルの延長上にある地名であり、今日のアプスニ（アプハズ人の自称するアプハズィア国名）との間の失われた輪であるとする。ここでアプハズィア人の政治的指導者ヴラディ斯拉・ヴァルツィンバは古代アナトリアの言語を研究していた文献学者であることを指摘しなければならない。

ラズィカ王国の衰退後の紀元6世紀にアバズグ人の公はビザンツ皇帝に直属することになり、マリアム・ロルトキパニツェ教授の言によれば、アバズグ人は「コドリ川の北にあったアプシル人の領土」を2世紀に征服し、6世紀にはコドリ川とエグリスイ（ガリツガ）川の間にあった「アプシル人の本来の領土」を征服した。730年にアラブ・ウマイヤ朝の武将ムルバン・クルは西グルジアを征服した。ジュアンシェルは「アプシレティの都市ツフム（スフーミ）とアプハズィア」は彼によって焼き払われたと記す。

この時ツフムはアプシレティの都市と呼ばれていたが、アプハズィアに併合されていた。このように一部の研究者によるとツフム地方の北に元来のアプハズィアがあり、その住民が今日のアプハズ人の直接の祖先であるというのである。アプシレティのツフムやコドリ川とエグリスイ川の間の本来的なアプシレティはグルジア人によって占拠されていた。しかし、別の意見に従えばアプシル人自身がアプスアと自称する今日のアプハズ人の祖先であり、アバズグ人は彼らのコーカサスの北から移住してきた同朋であると考えた。この考え方によるとアプハズ人こそがアプハズィア固有の民族であるということになる。

四、結論

コーカサスにおける民族紛争には二つの重要な要素が見いだされる。第一は名称民族の制度であり、もう一つは先住民族の理論である。多数派民族としての権利は名称民族に与えられるが、その根拠は先住性に起因するのである。ソ連時代に決定された境界の内部での名称民族の制度が継続すれば、住民のこれを継承しようとする要求もまた続いた。アプハズ紛争に関するロシア連邦の調停案の一つは、南部のガリとオチャムチレ地方を国連の平和維持軍の管理下にグルジア領とするというものであるが、アプハズィア側は厳しくこれを拒否している。なぜならばこれらは、紛争発生以前に住民の大部分がグルジア人であったにしろ、ア

ブハズィア固有の領土であるからである。グルジア側から見ればアブハズィアは北西の一部を除きグルジア固有の領土であるからである。

しかし、どちらの側も古代の祖先に関する明確な記憶を持っているわけではない。どちらもアブハズィアという国名、アブハズ人という民族名の変転を確実に説明する知識があるわけではない。彼らに過去に関する満足のいく説明を与えるのは歴史記述だけである。このようにして、歴史記述は歴史的事実だけを求めるだけではなく、名称民族制度と先住民族理論の間をさまようことになる。我々は紛争解決の以前に、現実的利害関係は勿論であるが、彼らの歴史に関するセンチメンタルな感情的をも理解しなければならない。しかる後、名称民族制度でも先住民族理論にもよらない新しい歴史を提示しなければならない。

*（これは、この重点領域研究平成8年度冬期研究報告会における英文報告の日本語訳である）

初出 『民族の共存を求めて』（3）、「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯、北海道大学スラブ研究センター、1997年

2 古代アブハズィアの種族

はじめに

ソ連邦の民族共和国では、共和国内に多数の民族が存在している事実を認める一方、国家名称を冠した民族（*tilter nation, koren'nyj narod*）のその国家の境界内での民族としての生成、発展を基調とした国民史学説が好まれた。しかし、実際はある民族が他の民族と分離して集中して住み続けるということはないし、共和国間の国境の多くが帝政期に様々な理由で決定された行政上の区画に基づく機能的なものであり、ソ連期にも開発等の理由によって政策として住民の社会的移動が起こったので、国民主義的な歴史記述には様々な点で無理があったことが指摘される。さらに、民族共和国とその民族共和国の内部に設置された自治共和国、自治州がある場合は、両者の関係は矛盾に満ちたものとなった。大部分の場合、共和国基幹住民の民族形成史と自治共和国の基幹住民の民族形成史の両立が困難であったからである。

ザカフカースにおいても、あらゆる住民に対してソ連邦市民としての共通の義務と権利が保証される一方、その国家の基幹住民であるかどうか、つまり帰属する民族名と居住する国家の名称の一致、不一致は、個人の社会的地位に大きな差を与えた。基幹住民としての権利は個人の問題でもあれば、その地域における民族全体の問題でもある。民族のその領域における基幹性は、その国家の国境内部における土着性によるものである。土着性を主張するものは歴史記述以外にはないのであるから、国家間の国境をめぐる主張も、又民族問題も、歴史記述に直接的に表明されることになる。ナゴルノ・カラバフ紛争、北オセチア・イングーシェチア紛争、南オセチア紛争、アブハジア紛争の解決が容易でないのは、現実の和解と共存のためには、歴史の共有と相互理解が必要であるからである。

以下では、古代、古典時代前期及び古典時代後期に分けて、ギリシャ語、ラテン語の著述家によって言及されたカフカース西部、黒海東岸部の住民で、所在地と今日の民族との関係について、現在アブハズ人とグルジア人との論争の対象となっている学説を紹介したい。より具体的に言うとアブハズ人がアブハズィア

に固有の民族であるとするれば彼らはどのような民族形成の過程をたどり、彼らの先祖はかつてなんと呼ばれる人々であったかということである。また、逆にグルジア人がアブハズィア固有の民族であるとする、その人々は他のグルジア人とのような関係にある集団であったのであろうか。

1 古代（アベシュラ、アベシュラ）

アブハズ人にかかわると考えられる最古の集団名は、紀元前11世紀アッシリアの碑文に見えるアナトリア北東部の種族名アベシュラあるいはアベシュラである。ソ連の言語学者イーゴリ・ディヤコノフによるとその碑文の内容は次のようである（注1）。

「ティグラトピレセルが戴冠する50年前、即ち紀元前1156年頃、ムシュキ諸部族（これはトラキア・フリギア諸部族に対するアッシリア名である）が、ユーフラティス川を通りアルサニマス（現ムラツスー川）の溪谷に深く侵入して、アルズィとプルムズィの国々を占領した。同時にカスカとウレミ人も上ユーフラティス河の溪谷に前進した。カスカというのは非常に一般的な名称であると考えべきで、ティグラトピレセル一世の碑文のいくつかでは、個別のカスカについて特定している場合があるが、それはヒッタイトの資料にも知られていないアベシュラである」。1114年、この時移住してきたこれらの人々の内、4千人のカスカ（アベシュラ）人は、アッシリア王の支配下に入った。

カスカ人の言語とアナトリア中部の先住民族であるハッティ語の関係については、グルジアではG. メリキシユヴィリ、G. ギオルガツェ（注2）の研究があり、またハッティ語とアドゥィゲ語群との関係については、Vy. イヴァノフの研究があるが、ウラルトゥ語、ミタンニの言語であるフリル語、ヒッタイトの先住民であるハッティ語やルヴィ語は、今日カフカースの北西部で用いられているアドゥィゲ語、アブハズ語の祖先語と同一の語族にあったことが確認できるという（注3）。

アブハズ人の歴史学・人類学者であるSh. イナルイバは、自著『アブハズ人（歴史民族学的概説）』（注4）、および執筆陣の一人である1960年出版の『アブハズィア自治共和国史』第一巻（注5）で、アベシュラをアブハズ人の、カスカをアドゥィゲ人の祖先であると判断した。根拠はカスカがアドゥィゲ系の諸集団の歴史的名称との、アベシュラが古典古代期の種族名称アプシル人、中世のア

プシュレティ、現代アブハズ人の自称アプスニ等との類似によるものである。これが今日までアブハズ人の間では基本的見解になっている。

ディヤコノフはカスカとアベシュラとをそれぞれ別個の集団と見るよりは、カスカという広義の集団のなかの一部にアベシュラという小集団があると考えてはいたが、アベシュラをアブハズ人とする仮説を支持している。ただ、ディヤコノフは、アベシュラがアブハズ人の祖先であると述べているのではなく、状況証拠があることを認めているのであって、彼自身が述べるようにアベシュラ族がカルトヴェリ語（グルジア語、メグレリ語、ラズ語、スヴァン語）使用者であることもあり得るし、他の言語の使用者であることもあり得ることを保証している。「第一に、名称の一致は単なる偶然であるかもしれない。第二に、同じ民族名称が言葉は異なるが、文化は同じ近隣の民族によって用いられるということとはまれではない（注6）」からである。大家の文章にあえて一言をつけ加えると、しかも、アベシュラ人がアブハズ語を用いていたとしたところで、アベシュラ人が遺伝子的に今日の誰の直接の祖先であるかどうかは別の問題である。今の所我々には、彼らがそのままムラトスー川流域に定住したのか、あるいはカフカースへ移住したのかについてさえ、その運命を知る手だてはないからである。

アブハズ人研究者は、現在知られている黒海東岸の地名を調査し、中北部トルコのシノペSinope、アカムプシスAkampsis、アリプサAripsa、アブサレアAp sarea、ツアブズDuabzu、カスピ海原油のグルジア側搬出予定港スプサSupsa、グルジア西海岸のファシスF/p/asisなど（注7）の地名のアブハズ語起源を主張し、黒海東南岸地域の古代住民の言語資料の欠如を補い、アブハズ人の祖先が今日のアブハズ人の領域を越え、広く分布していたことを強調している。

紀元前1、2千年期の古代オリエント北部でのアドゥィゲ、アブハズ系言語の流布が言語学者によって確定された事実であるのに対して、カルトヴェリ語は一切記述資料を残していない。『グルジア史概説』第1巻においても、北カフカース系諸言語の存在を確認しながら、アッシリアやウラルトゥの碑文から知られる歴史的グルジアに存在したディオエヒヤコルヒ（南コルヒダ）に触れ、西グルジアに多い「シ -sh」の語尾を持つ地名をグルジア系の言語であるスヴァン語起源であると考え、「西グルジア地方にスヴァン人住民が広く分布していたことについては、古典作家の証言の分析が行われている。特に、スヴァンの要素はこれら

の作家によってしばしば言及されている古代に西部グルジアに広がっていたヘニオキ人であると考えられている（注8）」として、グルジア人の祖先がアブハズィアを含む西、西南グルジアの固有の住民であることを主張する。ただし、このヘニオキ人も法務省担当官の請求する書類の山なしでは、グルジア国籍を獲得できないのであるが。

古代国家の民族問題に関するさらに重要な問題は、前12世紀のアッシリア文書に見え、8世紀にウラルトゥの碑文に強力な隣国として名前の見えるコルハ（グルジアの研究者はこれを南コルヒダと呼ぶが、これはギリシャ語、ラテン語のコルキスにあたる）に関するものである。歴史的グルジアの南西部、現在ではトルコからグルジアにわたる地域に存在したと考えられるこの国はキンメリア人の侵入によってウラルトゥとともに崩壊したが、存在の事実はギリシャの伝説「アルゴ船冒険物語」に反映している。『グルジア史概説』ではコルヒ人の言語については明示していないが、グルジア人の意識ではコルハはグルジア民族の国である。このコルハはやがてアケメネス朝の支配下に発展し、グルジア人によってコルヒダと呼ばれる国家になる。ローマ人の征服を経て、このコルヒダ（コルキス）は、3世紀から6世紀にかけてラズィカと呼ばれる国家となる。これはグルジア史ではエグリシィとして知られている。ラズィカの国名はカルトヴェリ系ラズ人を思い起こさせるし、エグリシィは、ラズ人に近いカルトヴェリ系民族のメグレリ人の国家であると考えられている。グルジア人にとって、コルキス人がグルジア人であることは、あまりにも明白な事実である。

一方、「アルゴ船冒険物語」中の登場人物であるメデアの兄であるコルキス王アプシルトス Apsyrtos の語源解釈について、コラルツソは、*/a/-psw-art/（定冠詞＋アブハズ人＋代名詞語尾）のように解釈している。コルキス王アプシルトスの名前は、アブハズ人という意味であるというのである（注9）。アブハズ人はアブハズィアは勿論西グルジアの固有の民族であったという現代アブハズ人の間に強い信念はここから生まれる。

今日のところ学問的に明確であるのは、アベシュラ（アベシュラ）人の周囲の諸民族であるウラルトゥ、フリル、ヘット等の言語は、アブハズ・アドゥィゲ群の言語と系統的類似が確認できることである。しかし、アベシュラ（アベシュラ）人の言語資料は残っていない。彼らと1千年以上後の、アプシル族との関係は、

カタンKatan人カスピ海の民族。

コラクスKoraks人、コルキス人の種族、コラ人と隣り合っている。コラクスの城壁とコラクス人の国。

コラKola人、カフカースの民族。コラの山々と呼ばれるカフカースの下に。コラ人の城壁。

ヘカタイウスは、ファズィスFazis河は海に流れていると述べている。

モスヒMoskhi人、コルキスの種族。マティエネMatien人と隣接している。

マクロネスMakron人、現在のサンSan人である。

マルMar人、モスイネクMosinek人に隣あっている。

ティバルTibar人の東の境に、モスイネク人が住む。彼らの国にホイラデスKhoirades市がある。

前4世紀の人カリアンドのスキラクスSkilak Kariandskij(注11)も黒海東岸の民族を北のアゾフ海から南へ数え上げている。

タナイダTanaida河からアジアが始まる。ポントス最初の民族はサウロマトSavromat人である。サウロマト人は女性によって治められている。

モエトMoet人、女に治められている人々の背後にいる。

シンドSind人、モエト人の背後にシンド人がいる。彼らの地域は湖の境に広がっている。彼らのギリシャ人の都市は次の通りである。ファナゴラ市、キパ(サダ)市、シンド港、パトゥスである。

ケルケトKerket人。シンド港の背後にケルケト民族がいる。

トレトToret人。ケルケト人の背後にトレト民族がおり、ギリシャ都市はトリクTorik港である。

アヘイAkhei人、トレト人の背後にアヘイ民族。

ヘニオヒIniokhi人。アヘイ人の背後にヘニオヒ人。

コラクスKoraks人、ヘニオヒ人の背後にコラクス人。

コリクKolik人、コラクス人の背後にコリク人。

メランフレンMelankhlen人。(黒服人)。コリク人の背後に黒服人。彼らの地域の河はメタソリMetasorij河とエギピEgipij河である。

ゲロンGelon人、黒服人の背後にゲロン人がいる。

名称の類似以外の何の根拠もない。逆に、グルジア人の間に存在する最も極端な意見であるが、仮に現代アブハズ人の直接の祖先が近世に北カフカースからアブハズィアに移住した人々であったとしても、アベシュラ（アベシュラ）族が、アブハズ・アドゥィゲ語群の使用者でなかったということを証明することはできない。また、彼らが後にユーフラテス上流地域方からカフカース方面に移住した人々で、アブハズィアの固有の民族であるとする根拠もない。一方、紀元前12世紀から前8世紀の間にグルジア人が、西南グルジアと西グルジアに存在したことを示す確実な資料もないのである。

次に、ヘカタイウスやヘロドトス、ストラボンなどギリシャ語とラテン語の著者が伝聞や旅行記を書き残す古典期の種族に関する言説を検討しよう。

2 古典時代前期

ギリシャ人は紀元前8世紀よりミレトスの住民が中心となって、盛んに黒海北岸、東岸に植民した。アブハズィアに関する初期の記録はミレトス人航海者、植民者のもたらした情報によるものと考えられる。ここでは、ミレトスの人ヘカタイウスとダリウス大王の命令でインダス川を探検したと言われるカリアンドのスキラクスの記録を示し、それに対するアブハズ人、グルジア人歴史学者の解釈を示そう。

ミレトス人ヘカタイウス（前550年に生存）の記録（注10）。黒海東岸の民族を北から南へと数えあげている。

メランフレン人はスキタイ人の種族である。

ダンドリDandarii人、カフカース周辺の種族である。

ティパニスTippaniss人、カフカース沿いの民族である。

ファナゴリアFanagolija市、ファナゴル諸島のファナゴルから名前を採った。

アナトゥロンAnaturonファナゴリアのアフロディティの神殿。ヘカタイウスはさらに、アナトゥルAnaturの入り江とアジアを知っている。

イクスイバトIksybat人、ポントゥスの民族シンディSind人の隣人。

イセドンIssedon人、スキタイ人の種族。

コルキス人。彼らの背後にコルキス人がいる。ディオスクリア市とギインがギリシャ都市である。ギインGiin河、ヘロヴィー河、ホルス河、アリー河、ファズイス河、ファズイスはギリシャ都市である。河に沿って、180スタディオン遡れば、異邦人の大市に至る。そこからメディアであり、ここは、リス河である。さらに、イスイドIsid河、荒川、アプサルApsar河。

ヴィズイルVizir人。コルキス人の背後にヴィズイル人とダラーノンDaraanon河、アリオンArion河。

エケヒレイ人。ヴィズイル人の背後にエケヒレイEkekhirej人、ポルダニスPor danis河、アラヴィスAravis河、リンパLimpa市、ギリシャ都市オディニイOd inj

ヴェヒル地方。エケヒレイ人の背後に、ヴェヒル港、ギリシャ都市ヴェヒリアダVekhiriada。

長頭人。ヴェヒルVekhir人の背後に長頭族とプソロン（疥癬）港、ギリシャ都市、トラベズント。

モスィニクMossinik人。長頭族の背後にモスィニクMossinik人とゼフィリーZefirij港、ギリシャ都市ヒラダKhirada、アレアAreja島。彼らは山地に住んでいる。

ティバレン人Tibaren。モスィンMossinik人の背後にティバレン人が住む。

ソヴィエト時代初期の最も重要なアブハズィア人歴史家、文学者であるグリアは、シラクスのヘニオヒ人をアブハズィア北部のグダウタ郡に、コラクス人をアブハズィア南部のコドリ、サムルザカノ、グルジアのズグディディ郡に充て、その南に狭義のコルキス人を置いている（注12）。

1960年の『アブハズ自治共和国史概説』は本文中では資料中の種族の帰属や住地比定はしていないが、著者の含む所は地図によって明らかである。北から、アゾフ海からソチ近辺までにシンド人、ケルケル人、アヘイ、ズィヒ人を置き、イニオヒ（ヘニオヒ）人はソチからディオスクリア（現スフーミ）にかけての地域に、コラクス人はスフーミの南から、ケラスル川左岸にかけて、そこからコドリ河の間の海岸にコラ人が、コドリ河以南にコルキス人が配置されている（注13）。『アブハズ自治共和国史』の執筆陣の一人であったイナルイパは、同書と同年に

個人で『アブハズ人-歴史人類学概説』を出版し、自説を明確に主張している。彼はコラクス人をディオスクリアに、コラ人をディオスクリアの南東の今日のオチヤムチレに置いている（注14）。

ヘカタイウスは、コラクス人とモスヒ人を共にコルキス人の種族に数えている。黒海東岸の北と南に二つのコルキス種族があることになる。南のモスヒ人がカルトヴェリ系であることには異論がないが、北のコラクス人の帰属は大変微妙な問題となる。グリアは、直接コラクス人、コラ人には触れず、コラクスの更に北にいるヘニオヒ人をアブハズ人の最も近い祖先であり、コルキス人の一部であると主張する。また、スキラクスのテキストによれば、コラクス人の南にコルキス人とディオスクリアがあると考えられるが、アブハズ人の歴史学者Z.アンチャバツェの意見は明快である。「後者（コルキス）人とディオスクリアとギューエノスの町々を偽スキラクスは関連つけている。従って、コラクス人とコラ人は、ディオスクリアの北にあり、偽スキラクスはコルキス人と別にしてしているのであるから、種族的にも関係がないのであろう（注15）」。アンチャバツェは、彼らが歴史的コルキスの内部にあり、コラ人が内陸部に住むという以外には、確実なことは言えないとして、両者の民族的帰属については言及しなかった。アンチャバツェはグルジア姓を名乗っているがアブハズ人で、アブハズ姓は中世アブハズ王の姓であるアチアアである。したがって、アブハズ人であるアンチャバツェは敢えて、グルジア人に有利な記述をしていることになる。

グルジア側の主要な見解では、1989年の『グルジア史概説』第一巻では、資料中の種族名の住地や帰属の比定は行わず、考古学資料を利用して物質文化の発達に記述を集中させている（注16）。これに対して、グルジア人のマリヤム・ロルトキパニツェ（注17）の意見は、明快かつ極端である。「明らかに、ディオスクリア（スフーミ）に至る地域は主として固有のコルキス人が住み、その北には、種族的にさらに混雑した世界が広がり、そこではコルキス人とともに北カフカースの種族（たとえば、チェルケス人であると考えられているケルケト人）が記憶されている。西グルジアの種族地図の確定のためには、2世紀の著者フラヴィウス・アリアヌスとクラヴィウス・プトレマイウスがニコプシア（トゥアブセ）周辺にラズィカという地名をおいているという事実の重要性は小さくない。

アリアヌスはこの地点を旧ラズィカと呼んでいる。確実な文書によってここにラズ（コルキス、即ちグルジア）住民の存在したと思われる状況を考慮に入れる必要がある」。1、2世紀にはアブハズィアの全域にわたってカルトヴェリ人が住んでいて、更に北のソチ地方に広がっていたと主張されているのである。

また、ロルトキパニツェは、「紀元前6-1世紀の現在のアブハズ自治ソヴェト社会主義共和国の領域は全体がコルヒダの範囲に含まれていた。ここではアブサラ（パトゥーミ周辺）から、ディオスクリア（スフーミ）に至るまで、本来のコルキス人が住んでいた。更にコルキス人の北の山地にはカルトヴェリ種族のスヴァン人が住んでいた。これに関してスヴァン人がディオスクリア周辺に住んでいたというストラポンの証言に注意を払わなければならない」。今日西北グルジアの山地に住んでいるカルトヴェリ系スヴァン人が、紀元前後に黒海海岸近くに住んでいたというのは、ストラボン（第9巻第2章第19節）によると、スフーミの近くには、20万人の兵士を動員する能力のあるソアンSoanes人がおり、周囲の総ての範囲に支配権を及ぼしていたとあるからである。ストラボンがソアン人の名を直接にしる間接的にしる言及するのは一度だけであって、この記述をスヴァン人の種族史とうまく関連づけることは難しく、今の所グルジア人歴史学者の努力も、ソアン人という名称を後の記録に現れる別名の種族すなわちスヴァン人と機械的に結びつけることしかできない。あるアブハズ人歴史家の主張するように、ストラポンの記事はあまりにも唐突であるかもしれない。

しかし、彼女の意見がグルジアの歴史学界を代表している訳ではない。グルジア科学アカデミーの民族間関係研究センターは、「グルジア共和国人権保護および国際関係委員会」を置き、アブハズ問題に関するグルジア政府の公式見解を作り上げようと試みた。委員会の見解は以下の通りである。ギリシャ人の著述家によると「黒海東岸の諸部族の中では、グルジア人の1部族であるコルキス人が圧倒的で、最終的にはすべての諸部族を結集して、紀元前6世紀に最初の西グルジアの王国であるコルキスを樹立した。古代の作者達は、しばしば、コルキスに住んでいるあらゆる部族をコルキス人と呼んでいる」と述べる（注18）。ただ、ヘロドトスが南から北へメディア人、サスペロイ人、コルキス人と並べ、19徴税区のコスコイ人、ティバレノス、マクロネス人、モシュコイノイ、マレスとは別個に、献上品（5年毎に男女の児童100人づつ）を納入するコルキス人（へ

ロドトス第2章94、97節)が、カルトヴェリ系メグレリ人であると断定できるのは、結局コルキスのグルジア名エグリシィとメグレリ人との名称の類似、コルキスの故地に形成され、後継者国家であるラズィカとメグレリ人に近いカルトヴェリ系民族であるラズ人との名称の一致、状況の推移による判断であろうか。

上記二人のギリシャ人の記述によっても、紀元前4世紀ファシス川流域にコルキス人の国家があったこと、前6世紀には恐らくその国家は形成期にあったこと以上を知ることにはできない。記録された種々の種族を具体的な証拠によって今日の民族と結びつける材料は十分とは言えない。イナルイバは「発展したコルキス文化を作り上げたのは地域で相互に関連した西グルジアとアブハズィアの諸部族である」と述べる。委員会見解にないアブハズ人とカルトヴェリ人の境界の問題は明確な態度を示されずに残っているが、この問題は古典後期の作者のテキスト解釈に際してより深刻なものとなるであろう。

3 古典時代後期と中世初期(サニグ、アプスィル、アバズグ)

紀元前後からローマ人の記述の中に新しい種族、サニグ、アプスィル、アバズギなどに関する情報が現れるようになる。アブハズ、グルジア両陣営の主張を理解するために、先ずアリアノス・フラヴィウスとプリニウス・セクンドゥスの関連の記述を検討して見よう。

3-1 プリニウス・セクンドゥス(1世紀)

「その下手にコルキスという名の黒海地区が横たわり、そこに、我々が既に述べたように、カフカス山脈が湾曲してリバエア山脈に連なっている。その片側は黒海とアゾフ海に向かって、他の側はカスピ海とヒュルカニア海に向かってなだれている。海岸の残りのほとんど全部を占めている諸種族はメラクラエ族とコルキス族、これはアンテムス河畔にディオスクリアというコルキスの市をもっていたが、いまは荒廃している。しかしかつては非常に有名で、ティモステネスによれば、違った言葉を話す300の種族がそこに集まったものだという。その後ローマの商人たちによって、130人の通訳の助けをかりて取引が行われた。普通、ディオスクリアは、カストルとポルクスの戦車の御者のアンピトゥスとテルキウ

スによって建設され、これらの人々からヘニオキ族が血脈を引いていると考えられている。ヘラクレウムの町はディオスクリアから100マイル、セバストポリスからは70マイルある。ここに住む種族はアカエイ族、マルディ族、ケルケタエ族、その後ろにセリ族、ケパロトミ族である。この地域の内部には非常に豊かなピティウスの町があったが、これはヘニオキ族によって略奪された。第1巻、p.249」(注19)

3-2 アリアヌス・フラヴィウス(注20)

「我々は、以下の民族のもとを通り過ぎました。トラπεζント人とは、クセノフォンが語るように、コルクス人と隣り合っています。この民族は、彼の言葉によれば、非常な好戦的性格と、トラπεζント人との和解しがたい敵意とを特徴としています。彼は彼らをドリル人と呼んでいますが、私の考えでは彼らはサン人でありなす。彼らは今に至るまで好戦的で、トラπεζント人の和解し難い敵で、堅固な場所に住んでいます。この民族は王を持たず、大分以前からローマ人に貢納を支払うことになっていますが、彼らの荒々しい性格のお陰で、きちんとは支払っておりません。もっともこれからは、神様のお陰で、きちんと支払うでしょう、さもなくば彼らをこの国から放り出しましょう。彼らと並んで、マクロン人とヘニオヒ人が住み、彼らの王はアンヒアルAnkhialです。マクロンMakron人、ヘニオヒHeniochi人とズイドリトZidrit人が隣り合っています。彼らはファラスマンFarasmanの支配下に在ります。ズイドリト人に並んでラズLaz人がおります。ラズ人の王はマラサMalasaで、権力を陛下から受けております。ラズ人の背後にアプシル人Apsilが続きます。彼らの王はユリアヌスJulianで、王国を陛下の父君から受けております。アプシル人とはアバスクAvask人が隣り合っております。アバスク人の王はリスマグRismagです、この者もまた権力を陛下から受けています。アバスク人と並んで、サニグ人がおります。彼らの土地はセバストポリにあります。サニグ人の王はスパダグSpadagで、王国を陛下からいただいております。

(中略)トラπεζントからディオスクリアまでの距離は上記の河川に沿って計量される。トラπεζントから今日セバストポリスSevastopolとして知られるディオスクリアDioskuriaまでの距離は2、260スタディアであります。

さて、もしディオスクリアから出帆すれば、最初の停泊地はピティウンタPiti

untaで、350スタディアの距離にある。ここから150スタディアでニティキで、古代にはここにスキタイ人の種族が住んだ。それについては歴史家ヘロドトスが記述している。彼はこの民族が虱を食べると入っているが、そんな噂は今でも言われています。ニティキNitikiからアバスクAbask河まで90スタディアです。ヴォルギVirgijはアバスクから120スタディアのところであり、ヴォルギから60スタディアでニスィNisijで、ここでイラクリIraklij岬と分かれています。ニスィからマサイティキMasaitikiまで90スタディア、そこからアフブンタAkhbuntaで、その河がズィヒZikh人とサニグSanig人を隔てています。ズィヒ人の王はスタファムファクStakhamfakで同じく王権を陛下からいただいています」。

グリアは、アリアヌスの述べる諸民族についてアプシル人をガリ地方に、アバスクをオチャムチレ地方に、スフミ地方をとばして、サニグ（サパギと読んで）をグダウタ地方に当てている（注21）。『自治共和国史』では、これら諸民族の居住地、民族的帰属については明示しないが、地図上ではソチの東のアドレル川からスフーミの東のケラスリ川までの地域にアプシル人を配置し、アバスク人をケラスリ川からモクヴァ川までに、アプシル人をモクヴァ川からイングリ川までに配置している（注22）。ロシア連邦ソチ地方の西南部と現在のアブハズィアの範囲である。イナルイバは、「アリアヌスによるとアプシル人とアヴァスグ人の領土は2世紀にはセバストポリスに至り、3世紀から5世紀にかけては、アバスクという特徴ある名前の河（今日のブソウ河、自著では「ブズィズ、より正確にはブソウ」とある）までの、北の隣人サニグ人の土地を奪った」とする（注23）。アブハズ人にはこの民族の帰属と領域について一貫した考えがあったと見られる。1989年の『グルジア史概説』（注24）では、「1世紀にサニグ人は「ディオスクリア地区に」、アバスク人は「その南に」、アプシル人は「更に南」と慎重である。彼らは「疑いなく、以前ジキ、アヘイ、ヘニオヒとして知られる恐るべき要素に含まれ、ストラボンによれば北コルヒダと近隣を支配していた」とする。

イナルイバは自治共和国史においては、アプシル、アバスク、サニグ3種族の帰属について触れない。しかし、自著においては、彼らをアブハズ民族の直接の祖先であるとし、アプシルという名称は「初めて紀元一世紀にプリニウスが、

記憶にとどめているが、アブハズ人の自称『アプスア』という言葉をおぼやせる」とする。また、グルジア語のアブハズは「アバズグ」から起きているとする（注25）。当時公式の文献で、これら古代種族の帰属を論じるのがタブーであったことが判る。

アンチャバツェはサニグをアドゥィゲ系のサツ族に比定する以外は、アプスィル、アバズグに関しても、アブハズ系であるとする。自治共和国史やイナルイパと同じである。ラズ人との境界についても、イナツェの論文を援用し、イングリ河とする。ただしグリアはその南のズグディディ地方を入れている。自治共和国史でも地図上で、境界をイングリ河にしている。委員会（注26）は、「1-2世紀、アバズグ人とアプスィル人は今日のアブハズィアの山地に公国を建てたが、時には、サニグ人の公国があった黒海沿岸に領域を延ばした」と記し、暗にアバズグ、アプスィルの領土が今日のアブハズィアの領域の南端（イングリ河）に及んでいなかったことを述べている。サニグについては、「サニグ人を西グルジア人（メグレリ、チャン人あるいは、スヴァン人であると考察するものと、またアブハズ・アドゥィゲ種族であるとみなすものがある（注27）。アンチャバツェは「サニグ人をスヴァン人（I.Orbeli,D.Gulia等）、メグレリ、チャン人（N.Marr,S.Janashia等）、サツ人（A.D'jachkov-Tarasov等）、さらにジャン族（L.Lavrov）に比定する諸説を批判し、スヴァン説は歴史的資料を欠く上、当時のスヴァン人の住地は西グルジアのラチャ・レチュフミ山地であり、今日のアブハズィアの山地まで勢力を伸ばすことは考えられても、ガグラやソチ地方ではない。サニグとサン即ちメグレリ・チャン人とを同一するのは、他の多くの古典時代の作者の記述と一致しない3世紀のキプロスのイッポリトの説によるので、メリキシユヴィリが述べるように名称の外見的類似によることが大きい。ジャン説に至っては、名称の類似について述べるのみである（注28）。アンチャバツェ自身が賛成するサツ説の根拠は以下のとおりである。サニグ人の土地は、大概して今日のアブハズィアのガグラ地方からロシアのソチ地方にまたがる地域である。19世紀まで、ここにはアブハズ・アバザ語とアドゥィゲ語の中間形態をとるウブィフ人が住んでいた。17世紀の旅行者の観察によると当時、この地方に残存していたサツ人はアブハズ語をしてはいたが、それ以外にアブハズ語でもウブィフ語でもない「アサツィ・プスア」語を母語として用いていた。

委員会（注29）では、「アブハズ諸部族の祖先（アプシル人とアバズグ人）は、最初コルキスの北西部に住んでいたと紀元前1-2世紀にカイウス・プリニウス・セクンドゥスとフラヴィウス・アリアヌスによって言及された」と明言し、なおかつ、どちらか一方または両方をグルジア人とする見解もあることを付記した。両方をグルジア系であるとするのは、アンチャバツェによると、グルジア文献学者でアブハズ人の近世渡來說を主張するインコロバ、グルジアおよび古典文献学者のカウヒチシュヴィリ、歴史学者ロモウリなどである。このグループに属する中世史研究家マリヤム・ロルトキパニツェは次のように述べる（注30）。

「紀元1、2世紀より、ギリシャの記述資料に今日のアブハズィア自治ソヴィエト共和国の領域内にアプシル人とアバズグ人が記録される。問題は、1、2世紀の文献史料に記憶されているアプシルとアバズグが、いつからここに住んでいるかは議論の余地があるということである。幾人かの研究者の見解によれば、彼らはここにより古い時代からいる。しかし、彼らがコルキスの歴史・文化圏に入っていたのであれば、より以前の資料も彼らの存在について無視しなかったであろう。これら諸種族が北カフカース人の種族に属するかということについても見解が分かれる。研究者の一部は彼らを北カフカースのアドゥィゲ系の出自であると考え、多数は、彼らは周辺に住んでいるメグレ（ラズ）人やスヴェン人やその他の種族と同じくカルトヴェリ（グルジア）人であろうとみなしている」と記す。勿論彼女はこれらをカルトヴェリ人であるとするのである。

グルジア科学アカデミーの公式見解はこの点についても断言しない。1964年トビリシ出版のアトラスにおいては、国家としてのコルキス、ラズィカの領域を示すだけで、個々の種族の名称もその種族的帰属も記載していない。1989年の共和国史でも明示しないし、そもそもこの通史には地図さえつけられていない。しかし、グルジア側の論点を明示しない公式見解は、アブハズ側には妥協あるいは結論の保留として見られてはいない。全く逆に、アブハズ史の抹殺であると考えられる。なんとなれば、今日のアブハズ人の祖先の種族的領域であることを明示しなければ、古代の「アブハズィア」という領域は、単なるグルジア北西部と表現されてしまうからである。グルジア側にとって、「西グルジアにコルキス王国が存在した」という表現は可能だが、アブハズ的表現ではこれを「西グルジアとアブハズィアにコルキス王国が存在した」と訂正されなければならない。

古代種族の民族的系譜は、別の方法で証明する必要があるであろう。アンチャバツェは、コルキス人と20世紀までに至るアブハズ人の樹上葬の習慣や、種族名称のアバザやアプスニとの類似、アブハズィア東南部ツェベルダにおける考古学調査の成果等を考慮に入れ（注31）、「このようにして、古典期のアブハズィアの住民の大部分は、アブハズ・アドゥィゲ起源の種族的共通性があり、そのなかでも、アプシル人とアバズグ人等は、アブハズ民族の直接の祖先であった」。また、「太古に今日のアブハズィアの領域におけるアブハズ民族の種族的根源があったことは、様々な資料によって支持されている」のであるとする（注32）。

ただし、アンチャバツェは今日のアブハズィア東南部にスヴァン系の要素の種族が存在した可能性を除外しない。「古典古代後期に（明らかに紀元2世紀より早くなく）南アブハズィアに北のアブハズ人と緊密に結びついていたメグレル・チャン種族が浸透した」。「彼らは、ここに住んでいたミスィミアン（最初に文献に現れるは、6世紀）と関係がある可能性もあると述べる」。このようにアンチャバツェの見解では、古典時代後期にコルキス人は、南北二つに分かれ、北コルキス人は今日のアブハズ人の祖先であって、全アブハズィアに及んでいたとする。しかし、問題は、両者の境界である。イナツェが主張し、アンチャバツェが受け入れている見解は、「アプシルとアバズグの公国は2世紀にはイングリ川から大体スフーミに至っていた。それは、サニグ人の領域にあった」「2世紀からは、ラズ人が北進し、アプシル人とアバズグ人の領土が彼らに占領されることによって、彼らの国境は北に移動した。かくして、以前（2世紀）アバズグ人の北の境が、スフーミの南にあったとすると、後に（5世紀）にはアバスク（ブソウ）川に至ったかってサニグ人の領地にあったセバストポリスはいまや、アプシル人の領地にある」というものである（注33）。

アンチャバツェは、「もしアバズグ人がどこかスフーミと新アフォン（アナコピア）にいたるとすると、北の境界はブズィブ河（グルジア語史料のカポエティ河）である。このようにアバズグ人は中世のブズィブ・アブハズィアの領域を占めていた」とする（注34）。これは、6世紀のことを述べているのであるが、9世紀のアブハズ王国、近代のアブハズ公国発祥の地が、名称の酷似する「アバズグ」人によって占領されていたことが強調されている。だが、アンチャバツェの見解がアブハズ人を代表するわけではないのは、彼は6世紀以後の文献に見えるミス

ィア二人がカルトヴェリ系であることを否定していないからであるが、アブハズ人の中にはこれをアブハズ人の祖先であるとする主張も強い。中世史上の問題についてはここでは論じない。

結語

アブハズィア古代史に関する我々の簡略な展望は、具体的事実に関しては何等明快な結論をあたえることができない。しかし、いくつかの潮流は明らかになったであろう。一つはアブハズィア側に古代の民族的境界を現在の政治的境界であるイングリ川に置こうとする強い意志があることであり、グルジア人の一部に強く残っている現在のアブハズ人は総て近代の移住者の子孫であり、従って古典作家にあるアブハズィアの種族は総てカルトヴェリ人に属するという信念である。『グルジア史概説』に表明されるグルジア歴史学会の公式の見解には、古代の種族の現在の民族との関連づけ、その境界等のように直接証明できない問題には触れないという慎重な態度がみられる。しかし、論争は中世に持ち越して継続する。グルジア人の歴史家にアバズグ人とは別にスフーミにカルトヴェリ人の国家があり、そもそもスフーミという地名は中世スヴァン語によるという強い主張があるからである。その問題に関しては、稿を改めて論じなければならない。

注

- 1 Diakonoff, I. M., *The Pre-History of the Armenian Peoples*, tr. by Lori Jennings, Caravan Books, 1984, p. 67-8
- 2 *ibid.*, p. 5
- 3 *ibid.*, p. 145n
- 4 Inal-IPA, p. 31
- 5 *Istoriija Abkhazskoj, ASSR*, p.
- 6 *ibid.*, p. 5
- 7 Anchabadze, 1976, p. 20

- 8 Istorija Gruzii,p.183
- 9 Colaruss,John,Abkhazia,Central Asian Survey(1995)14(1),75-96
- 10 Guria,p.242-30 原文はV.Latyshev,Izvestija drevnykh pisatelej grecheskikh i latinskikh o Skifii i Kavkaze.t.1,SPB,1893所収。
- 11 Guria, pp. 248-9 原文はLatyshev,op.sit.,p.85-6
- 12 Gulia,p.53
- 13 Ocherki istroii AASR,p.21 (付図 1 参照)
- 14 Inal-Ipa,Abkhazy, p.32.
- 15 Anchabadze,Ocherki Etnicheskii istroii,p.30
- 16 Ocherki Istorii Gruzii,t.1,pp.223-244
- 17 Lordikipanidze,The Abkhazians and Abkhazia,p.40
- 18 Zhorzholiani,p.4
- 19 中野定雄、中野里美、中野美代訳『プリニウスの博物誌』1-3巻、雄山閣、昭和61年
- 20 Guria,p.263原文は、Latyshev
- 21 Gulia,p.53
- 22 Ocherki istroii Abkhazskoj ASSR,p.49 (付図 2 参照)
- 23 Inal-Ipa,Abkhazy,p.35
- 24 Ocherki istorii Gruzii,t.1,p.326
- 25 Inal-Ipa,loc,sit.,p.34
- 26 Zhorzholiani,p.5
- 27 ibid,p.5
- 28 Anchabadze,Ocherki Etnicheskii,p.34-35
- 29 Zhrzholiani,p.4
- 30 Lordikipanidze,p.40

ロルトキパニツェ (op.sit.,p.44) 「今日のアブハズ人は、アプスア人であって17世紀に北カフカースから移住して来た」と述べるが、同書はV.ヴォロノフによって厳しく批判されている (Voronov,Yuri,Mariam Lirdkipanidze" The Abkhazins and Abkhazia" in Georgian,Russian and English);Tbilisi,1990,Ganatileba,in Hewitt,p.259-264)。

- 31 Anchabadze, Istorija, p.183
- 32 Anchabadze, Ocherki etnicheskoj, 1986, p.39
- 33 ibid, p.38
- 34 Anchabadze, Ocherki etnicheski, p.440 2世紀の資料は、数世紀後の資料によって補強されるが、我々のすべての疑問を解くには至らない。東ローマの歴史家カエサリアのプロコピウスは、アプシル人とアバズグ人について、「アプシル人の背後には、・・・海岸にそってアバズグ人が住んでいる。その境界はカフカースの山脈まで延びている（『ペルシャ人の戦争』ロエブ叢書 Procopius, with an English Translation by H.B.Dewing, in 7 volumes, History of the Wars, Book 1 and 2, London, MCMLXI）」と述べるだけである

文献目録

- Anchabadze, S.V., Istorija i kul'tura drevnej Abkhazii, ANSSSR, Institut Narodokh Azii, Moskva, 1964
- Anchabadze, S. Ocherk etnicheskoj istroii abkhazskogo naroda, Alashara, Sukhumi, 1976
- Akademii Nauk Gruz, SSR, Abkhazskij institut jazyka, literatury i istorii imeni D.I.Gulia, Ocherki Istorii abkhazskoj ASSR, ch.1, Abgosizdat, Sukhumi, 1960
- Diakonoff, The Pre-History of the Armenian People, NY, 1984
- Gulia, D., Istorija Abkhazii. t.1, Tiflis, 1925
- Inal-IPA, Sh., Abkhazy--Istoriko-etnograficheckoe ocherki, Agrosizdat, Sukhumi, 1960
- Hewitt, G., Ed., Caucasian Perspective, Munchen, 1992
- Lordkipanidze, The Abkhazians and Abkhazia, Tbilisi, 1990
- Ocherki Istorii Gruzii, t.1, 1989, Tbilisi
- Zhorzholiani, G., Solomon Lekishvili, Levan Toidze, Edisher Khoshtaria-Bross

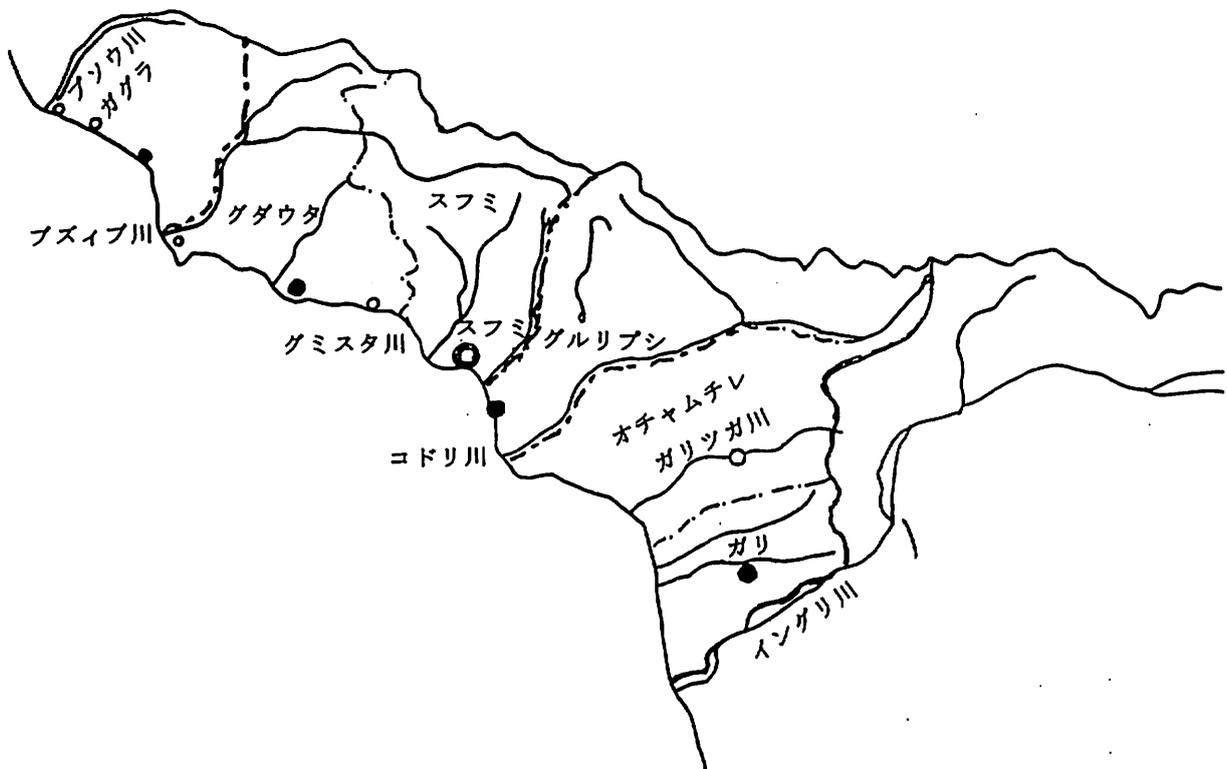
et. Historical, Political and Legal Aspects of the Conflict in Abkhazia,
 Georgian Academy of Sciences, Reserch Center for Relations Between Nati
 ons, Georgian Republican Committee for Protection of Human Rights and
 for International Relations, Tbilisi, 1995

Tslaja, G.V., Abkhazija i abkhazy v kontekste istorii Gruzii-Domongol'skij
 period, Moskva, 1995

初出 『民族の共存を求めて』(3)、「スラブ・ユーラシアの変動」領域研
 究報告輯、北海道大学スラブ研究センター、1997年

地図1 アブハズィアの行政区分

凡例 ガグラ 郡名 ◎首都 ●郡中心地(都市名は郡名に同じ)



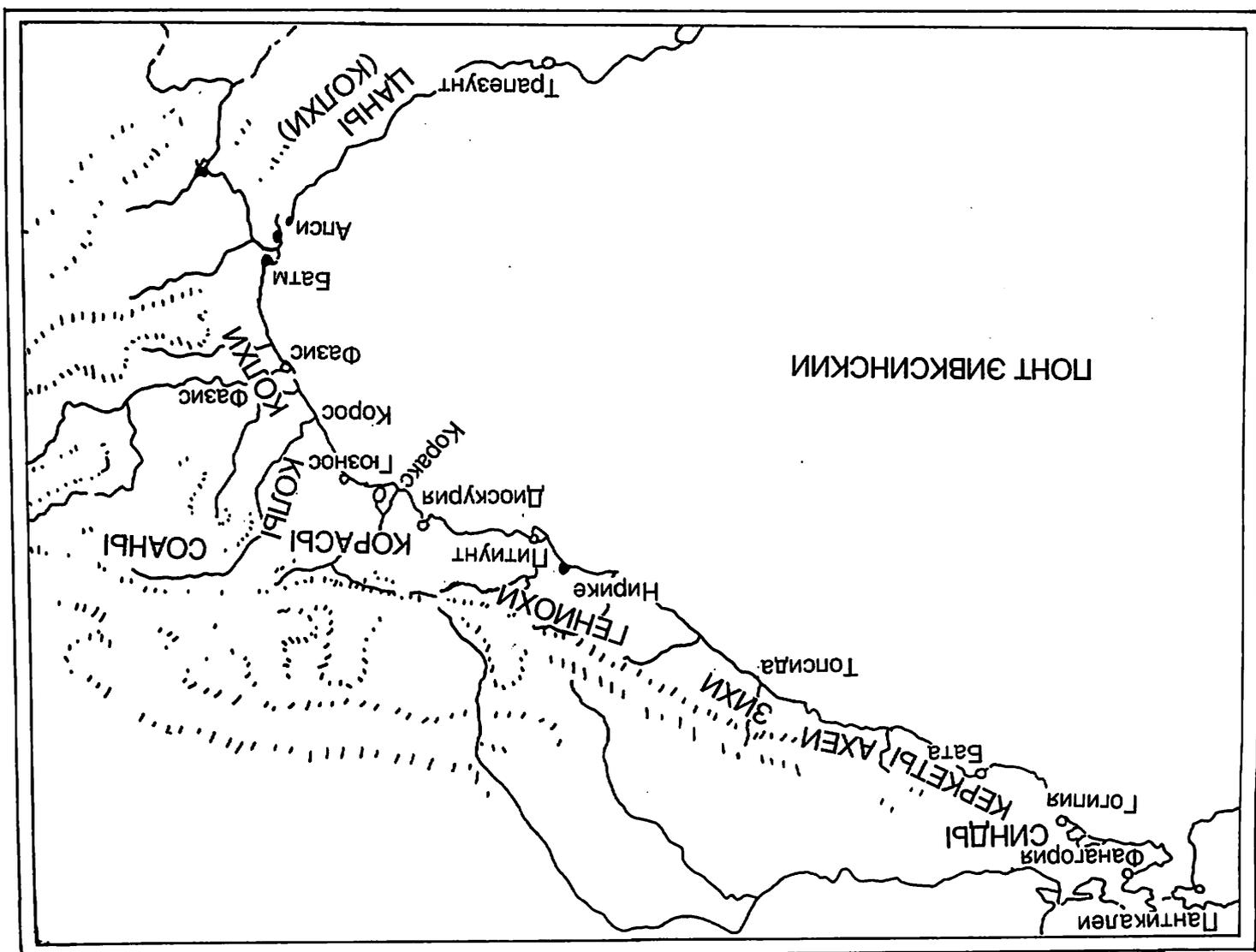
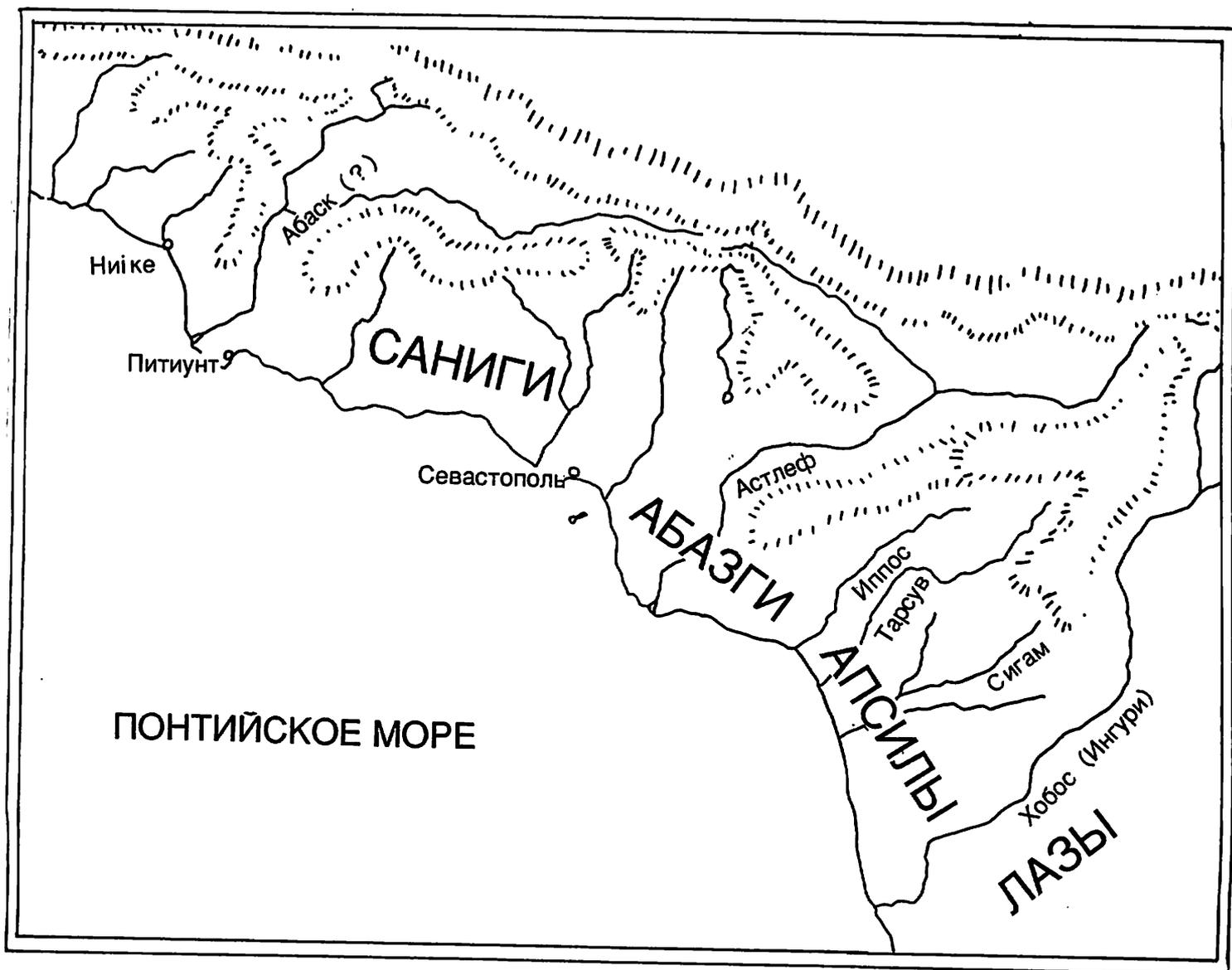


图 2

地图 3



3 アブハズィア、グルジア紛争と歴史記述---サムルザカノ人問題

はじめに

ソ連時代グルジア・ソヴィエト社会主義共和国の自治共和国であったアブハズィア（アブハジア）で、1992年から93年まで続いたアブハズ人とグルジア人の戦争は、戦闘員と非戦闘員を問わず多数の死傷者を出した。人口の半ばを占めるグルジア人を始め、多数の住民が難民となり、アブハズィアの経済と社会組織を根底から破壊した。1994年5月14日に停戦協定が結ばれたので、現在戦闘は行われていない。和平交渉は断続的に行われ、1997年8月にはトピリスィで、ウラジディスラヴ・アルツィンバ・アブハズィア大統領とエドワルド・シェヴァルツェ・グルジア大統領にエヴゲニー・プリマコフ・ロシア外相を交えた三者会談が開かれたが、最終的和平とアブハズィアの地位に関する交渉は妥結を見ていない。難民の帰還は遅れており、アブハズィア国内は無政府状態で、あらゆる社会的経済的活動が停止していると報道されている。

戦闘ではアブハズ人側が一方的に勝利し、長く戦闘は停止しているにも関わらず、和平交渉が進展しないのは、実際の利害の調整が困難なこともあるが、アブハズィアの歴史に関して、アブハズ人とグルジア人の理解が大きく異なるからである。この文章ではアブハズ人とグルジア人の歴史理解の著しく異なる一例として、サムルザカノ地方の歴史的帰属における双方の主張について述べるが、先ず長寿国であるということ以外に日本に知られることのなかったアブハズィア自体について説明しよう。

第1節 アブハズィア

ソ連崩壊まではグルジア・ソヴィエト社会主義共和国のアブハズィア自治ソヴィエト社会主義共和国であったアブハズィアは大カフカース（コーカサス）山脈と黒海に挟まれた面積8万6千平方キロメートルの小国で、北西に向かってブズィブ川でロシア連邦と境を接し、南西ではイングリ川でグルジア共和国ズグディディ地方と境を接している。北は大カフカース山脈の分水嶺を経て、ロシア連邦のク

ラスノダル地方、カラチャイ・チェルケス共和国、東は大カフカース山脈の支脈を経てグルジア共和国のスヴァネティ地方である。

アブハズィアは最高峰のドンバイウルゲン（4,047m）、それに次ぐベラナ・カヤ（3,851m）などをロシアとの国境に持つ山国であるが、その内部自体が西からガグラ、ブズィブ、アブハズィア、コドリ等の複雑な支脈に細分され、古来山間の渓谷には種族共同体社会が形成された。アブハズィアの国旗に描かれている7芒星の7の数は、海岸部5、内陸部2の歴史的領域を示している。ブズィブ川上流でブズィブ山脈と大カフカース山脈の間のプスフ、コドリ川の上流のダルとツベルダ（ツバル）などである。一方、大カフカースの山脈はアブハズィア内部の山地を全く孤立させたのではなく、サンチャロ（2,603m）、マルフ（3,033m）、クルホル（2,781m）などの北へ通じる峠が、クバン川の支流流域へ至る通路を確保した（地図1参照）。

国際的に用いられているアブハズィアという国名は、グルジア語の「アブハゼティ」によるロシア語や英語によるが、アズハズ人の国を意味する。アブハズ語では、アブスニである。アブハズ人はソ連時代最後の1989年の全国人口調査では、全ソ連に10万5千人を数え、その内訳はアブハズィア国内に9万3千人、国外に1万3千人であった。国内居住立は88.6パーセントである。アブハズィア総人口（50万人）の17.8パーセント（グルジア人45.7、アルメニア人14.6、ロシア人14.2パーセント）を占める。この調査では、アブハズ人の93.5パーセントがアブハズ語を母語とし、78.8パーセントがロシア語に習熟している。つまり、アブハズィアのアズハズ人の事実上100パーセントがロシア語に習熟していることになる。しかし、ロシア語以外の第三の言葉の習熟者は全人口の3.4パーセントでしかないので、アブハズ人はアブハズ語とロシア語のバイリンガルではあるが、アブハズ語、ロシア語、グルジア語のトリリンガルではない。一方、グルジア人のロシア語習熟度は33.1パーセント、第三語習熟度は1.0パーセントに過ぎない。しかもアブハズィアに住むグルジア人の大部分は、家庭ではグルジア語ではなくグルジア語に近いメグレリ語を用い、メグレリ語とグルジア語のバイリンガルである。アブハズ人とグルジア人の言語による理解はロシア語に限られ、相互理解度は決して高くなかったと判断できる。

現在数万人のアブハズ人がトルコ共和国やいくつかのアラブ諸国に住むのは、

大量移住のためであった。19世紀までアブハズィアを支配してきたシェルヴァシツェ家は、1770年サムルザカノの領主レヴァン・シャルヴァシツェがロシア皇帝の家臣となり、1818年には全アブハズの公（アフ）ゲオルギイ・シャルヴァシツェがロシアに併合されることを宣言した。1864年には公の制度も廃止され、旧領主はロシアの貴族になった。しかし一旦ロシア領に編入された後、1821,1824,1857,1866年にわたって、反ロシア反乱がくり返された。特に1866年の反乱は旧公の所在地リフヌィ村で起こったが、ロシアの官憲を殺害して、数日間この地域を支配した。間接的原因は、グルジアにおける農奴制度改革に関して、特に農民は領主から賦役義務権を購入する義務を負わされたり、更には土地から追放されるという噂が流れたことにあるという。反乱鎮圧の後、アブハズ人のオスマン領への集団移住・追放が行われた。1877-8年の露土戦争終了後までに、数万人のアブハズ人が故郷を後にした。残ったアブハズ人には有罪民族の汚名が着せられ（1907年まで）、5キロメートルまでの海岸部居住を禁止された。これをマハジル運動と呼ぶが、マハジル運動はアブハズィア民族の健全な発展にとって深刻な^傷害になった。しかもアブハズ人の多くは、アブハズィアの国内でグルジア人が全人口の約半数を超えるのは、単にアブハズ人の人口が減少したからでなく、アブハズ人が立ち去った農村に新たにグルジア人農民が移住したためであると考えていて、アブハズ人とグルジア人の民族関係のマイナス要因になっている。なお、現在アブハズは北からガグラ、グダウタ、スフム（スフミ）、グルリプシ、オチャムチレ、ガリの6郡に分けられているが（地図2参照）、アブハズ人はグダウタとオチャムチレに集中している。1979年の統計では、グダウタに50.1パーセント（グルジア人は12パーセント）、オチャムチレに39.6パーセント（グルジア人は43.9パーセント）である。また都市では鉾山都市トクバルチェリで36.9パーセント（グルジア人は24.0パーセント）、首都スフミでは9.9パーセント（グルジア人は38.3パーセント）となっていた。

アブハズ語は、グルジア語やチェチェン語を含むイベロ・カフカース語族と呼ばれる言語グループに属している。イベロ・カフカース語は、南カフカース（あるいはカルトヴェリ）支族、北カフカース支族に二分される。南カフカース支族には、グルジア語、スヴァン語、メグレリ語、ラズ語を含むカルトヴェリ語群があり、北コーカサス支族は、北西語群あるいはアブハズ・アドゥイゲ語群、ナヒ

・ダゲスタン語群に分かれる。アブハズ語が属する北西グループは、アドウィゲ語のグループ、アブハズ語に非常に近いアバザ語、及びその中間のウプィフ語等からなる（図1参照）。ナヒ・ダゲスタン語群には、チェチェン語やイングーシ語が含まれている。アブハズ語は、メグレリ語からの借用語は多く含むものの、グルジア語とは全く異なった言語で、アブハズ語とグルジア語は、アルメニア語、ロシア語、アゼルバイジャン語に較べると分類上近縁であっても、實際上、僅かでも相互理解ができるというわけではない。アブハズ語はカルトヴェリ語の中でもメグレリ語からは多くの単語を借用しているので、アブハズ人のメグレリ語学習は比較的容易ではあるが、アブハズ人が母語、ロシア語に加えてグルジア語を修得するのは困難である。アブハズ人が政治的独立を求めるのは、文化的独立を達成するための前提条件でもある。これに対して、大カフカースを越えたロシア連邦のカラチャエボ・チェルケス共和国に使用者が集中するアバザ語は、アブハズ語とは方言関係にあると言える程に近い言葉である。また、アドウィゲ語は別個の言語であっても、学習は容易である。19世紀までにソチ地方に住んでいたアドウィゲ系の民族の中には、アブハズ語との広範バイリンガル現象が見られた。アブハズ人が北カフカースの諸民族に抱く一体感には、文化的とともに言語的根拠があると言えよう。

アブハズ語、グルジア語を含めたイベロ・カフカース語の起源は不明であるが、多くの研究者が一致する点は、イベロ・カフカース語はカフカース地方における最も古い語族であって、インド・ヨーロッパ語族（ロシア語、アルメニア語、イラン語）やアルタイ語族（トルコ語、アゼルバイジャン語）等より古くから用いられ、古代にはアナトリア、メソポタミアなど今日よりも大変広い地域で用いられていたということである。近年、紀元前2千年期にアナトリア中央部で用いられていたヘット語、アナトリア、イラン、アルメニアにかけた地域のウラルト語、メソポタミアやシリア、トルコ南部のフルリ語は、アブハズ語と非常に近い関係の言葉であったと主張されている。このような認識は、アブハズ人の中に伝承として伝えられたのではなく、近年の言語学研究成果によるのものであるが、アブハズ人の民族的自尊心の理由の一つになっている。

カフカースの高地と黒海沿岸に挟まれたアブハズィアは温暖な気候に恵まれ、1月の平均気温は、11-14度で、日中17-20度に上がることもある。平均気温は8月

には23-24度になる。同時に内陸部の高地は夏冷涼である。このため、アブハズィアは旧ソ連でも有数の観光、保養地であり、ソ連や東欧から多数の保養客が訪れた。多くの観光地のなかで最も歴史のあるのは、ロシア帝室の一員であったオルデンプルグ公が開いたガグラであった。海岸部では1959年に開設のピツンダ、ノーヴィ・アフォン、グダウタ、グルリピシ、内陸部ではアヴァドハラ、リツァなどが有名である。これらは、地形の関係でアブハズィア北西部に集中している。

冬の雨に恵まれた地中海気候と大カフカース山脈から流れる多くの河川は十分な農業用水となり、また、海流の関係でアブハズィアの海岸は、グルジアの黒海岸とは異なって湿地を作らず、海運にも便利でありまた健康的でもあった。19世紀にアブハズィアを征服したロシアは、商品作物の生産のために大規模な農場を開くことを計画したが、その政策はソ連に受け継がれた。茶（1931年より）、蜜柑・檸檬・オレンジなどの柑橘類（本格的にはソ連第一次五カ年計画）、マシュマロ、葡萄、柿、梨、リンゴ、タバコ（1860年代より）などが重要である。また、トクバリチェリでは石炭（1950年代）も開発された。このため、ロシア帝国やソ連の各地から多数の農民と鉱山労働者がアブハズィアに移住した。これはアブハズィアの産業を盛んにしたが、民族構成を複雑にするとともに、アブハズ人を自国における少数派の地位に追い込むことになった。またアブハズィアの産業は、観光を除くと第一産業で、旧ソ連でもバルト諸国などの先進工業地域と比較するとその経済的基盤は脆弱であると言えよう。

第2節 紛争の問題点とサムルザカノ論争

イギリスのカフカース言語学者ヒーットは、アブハズィアとグルジアの紛争の本質を「アイデンティティと所有権の問題」であると看破した。アブハズ人がアブハズィア固有の民族であるのかという問題が争われ、日本人が当然のこととして北海道から沖縄県までの日本を領有するように、固有の民族であればアブハズ人がアブハズィアを所有する権利があるという議論がなされているのである。このような分析が正しい論拠として、紛争の山場がソ連各共和国で共和国語を公用語とする動きが始まり、市場経済・私有化の動きが始まった1988年からトビリシ大学スプーミ分校学生募集の動きがあった1989年にかけて、およびソ連が解体した1992年であったことがあげられるであろう。

グルジア、アブハズィア交渉では、同様の問題を解決するための交渉にはあまり取り上げられない議題、すなわち歴史的にアブハズィアが、グルジアの一部であるのか、別個の地域であるのかが議題になっている。この問題に両者の合意がない限り、アブハズィアが別個の国家として独立するのか、アブハズィアとグルジアが対等の立場で国家連合を組織するのか、グルジアがアブハズィアに自治を認めるかを決定することができないであろう。

歴史上のアブハズィアとグルジアの関係は、歴史上の様々な時代にわたる問題の中で論じられているが、主要な論点は、次にあげるものであろう。

1) ギリシャ語やラテン語の文献に名前が挙げられている古代のアブハズィアの様々な種族は、グルジア系かアブハズ系か。

2) 中世に、アブハズィア北部から興り、西グルジア全体に拡大したアブハズィア王国の基幹住民はグルジア人かアブハズ人か。

3) 現在アブハズィアの南部で西グルジアに接するガリ地区とオチャムチレ地区の一部にあたるサムルザカノ侯領の元々の住民は、アブハズ人かグルジア人か。

4) 帝政ロシアとソヴィエト時代のグルジア人が大量移住して、アブハズ人の数を凌駕した。スターリン時代にはアブハズ人エリートにたいして大規模な粛清があった。

これらの1)-4)がすべてアブハズ人の主張する通りであると、アブハズ人は紀元前より今日のアブハズィアに住み、中世初期にもアブハズ人の居住地は西グルジアに広がっていて、グルジアとは別個の独立国家を樹立した。近世にはシャルヴァシツェ家が全アブハズィアを支配していたが、ロシア編入後にマハジル運動と西グルジアから農民の移住があってグルジア人住民が過半数を占めるようになり、さらにソ連時代にはグルジア政府によって、アブハズィアのグルジア化政策が実施された。

グルジア人の考えを模式的に整理すると次のようになる。古代にギリシャ人、

ローマ人があげたアブハズィアの古代住民の種族は大部分グルジア人である。中世初期にアブハズ人は現在のアブハズィアのごく北部に住むだけであり、アブハズ王国は領域が拡大すると事実上グルジア人の国家になった。中世以降アブハズィアの中南部には、グルジア人が住んでいたが、政治的にはシャルヴァシツェ家に支配されるようになった。ソ連時代にアブハズ南部にグルジア人農民が大規模に植民したことは事実であるが、アブハズ人は冠民族として人事的、文化的に十分な自治的特権を享受していた。ただし、最も極端なグルジア的見解は、アブハズ人は元来アブハズィアには住んでおらず、16-7世紀北カフカースから移住してきた新しい住民であるとするものである。

ここではこれらのすべてについては述べず、サムルザカノの問題だけを取り上げる。現在のアブハズィアの国境や内部区分は、アブハズ公国の国家組織が基本となっているからであり、また国家にとらわれない地域住民のエスニック意識の変化が明瞭に観察でき、いわゆる民族問題解決の現実的方法を思索する場合に裨益するのではないかという期待がもたれるからである。

第3節 サムルザカノ

帝政ロシア政府は1886年に現在のアブハズィアであるスフーム管区で人口調査を実施する。この報告書には30,640人の古代や中世にも、20世紀にも見慣れないサムルザカノ人という種族が数え上げられている。この調査の11年後の1897年にはロシア全土で人口調査が実施されたが、報告書にはただ1人のサムルザカノ人も報告されていない。3万人のサムルザカノ人は何処へ行ったのだろうか。

サムルザカノは、アブハズィアの最も南のガリ郡とその北のオチャムチレ郡の一部（ガリツガ川以南）を含む地域の歴史的名称である。18世紀始めにこの地方を与えられたムルザカン・シャルヴァルシツェの子孫が、ロシア併合まで形式的にはスフミの公（アフ）の家臣として、実際には独立の君主として統治していた。サムルザカノとは、「ムルザカンの領地」を意味するグルジア語である。公領期にアブハズィアの全体は、北からブズィブあるいは狭義のアブハズィア（ガグラ川からグミスタ川）、 Gum（グミスタ川からコドリ川まで）、アブジュア（コドリ川からガリツガ川までの地域）、およびこのサムルザカノ（ガリツガ川からイングリ川までの地域）の諸侯の領地に分かれていたが、このそれぞれの内部も他

の領主の領地や独立の地域的共同体に分かれていた。1810年から1864年までの間、ロシア宗主権下にあったアブハズィア公国は、ブズィブ、アブハズ（スフーム）、アブジュア各管区と軍(okrug)とサムルザカノ、ツェベルダの2警察管区(uchastka)に区分されていた。

公国は1864年に廃止され、アブハズィアがロシアの管轄地となると、先ずこの年に旧アブハズィア全体が、クタイシの総督の支配下に、スフーム軍事管区(skhumskij voennnyj otdel)として編成され、ここにはブズィブ、スフーム、アブジュアの3管区(okrug)、ツェベルダ、サムルザカノの2郡警察管区(pristavstvo)に区分されていた。ついで1866年には、ピツンダ、ツェベルダ、ドラнда、オクミの4管区が加えられた(この時サムルザカノはオクミ区域に入っていた)。更に1886年にはピツンダとオチャムチレの2管区(okrug)、グミスタ、グダウタ、コドリ、サムルガノの4警察官区(uchastka)に区分された。同時にアブハズィア全体は、41の共同体に分割され、このうちサムルザカノの内部は、ガリ、バグレビ、ナバケヴィ、サベリ、オクミ、ベデツィ等の共同体に分かれていた(注1)。

1902年にはガグラがスフーム管区から黒海総督府に移管されたが、後にアブハズィアに戻った(ctr.237)。1903年スフーム管区は、クタイシ総督府からカフカス総監府の直接支配に移された。現在アブハズィアは、北からガグラ、グダウタ、スフーミ(スフーム)、グルリプシ、オチャムチレ、ガリの6郡に区分されている。中心都市は郡名に同じである(図2参照)。

地域住民の名称としてのサムルザカノ(人)は、20世紀に入っても用いられていた。ロシア革命まで、現在のガリ郡とオチャムチレ郡の南東部を含む地名としてサムルザカノの名称が使用されていた。しかし、19世紀からサムルザカノ人の種族的出身については謎であった。彼らはアブハズ語とカルトヴェリ語の一つであるメグレル語とのバイリンガルであったからである。

1990年にトビリシ刊行の新聞『民族教育』誌において、二人の歴史学者、アブハズ人のスタニスラフ・ラコバとグルジア人ソロモン・レキシユヴィリが争ったのは、つまるところこのサムルザカノ人は、アブハズ人なのかグルジア人なのかということであった。論争は、読者であるある地方の教員が、1897年にはアブハズ全人口の55.3パーセントを占めていたアブハズ人が1989年には17.8パーセントでしかないことに関する素直な驚きを投書(1990年1月7日)したことに端を

発した。レキシユヴィリ氏は、直ちに同誌に反論を投書（2月14日）し、1989年の統計が当時のアブハズィアの住民構成を正しく反映していないことを主張した。しかし、ラコバ氏が改めてレキシユヴィリ氏に対する批判を投書したので、同誌はこの論文と当のレキシユヴィリ氏のラコバ論文に対する反論を一括して掲載したのである（6月14日付け）。以下では、この両者の所説を紹介する。

第4節 スタニスラヴ・ラコバの主張（注2）

1 サムルザカン人の民族的帰属について

ラコバ氏は、レキシユヴィリ氏が自説の根拠として挙げた1886年のスフーム管区人口調査について、先ず数値をレキシユヴィリ氏の65,716人ではなく、68,773人と訂正し、以下の表の通りであると主張した。また同年の管人口の民族別内訳を下の表の通りとした。

1886年（スフーム管区）民族別人口（表は、筆者が作成）

全人口	68,773	100 %
アブハズ人	58,963	85.7%
サムルザカノ人	30,640（内数）	
グルジア人	4,166	
メグレリとラズ人	3,558（内数）	6.1%
その他の民族	5,644	8.2%
ロシア人	971（内数）	

ラコバ氏は上の統計中のサムルザカノ人をメグレリ人等のサムルザカノ土着のグルジア系住民であると解釈し、「グルジア・サムルザカノ人」と呼んだレキシユヴィリの表現を批判し、サムルザカノ人はアブハズ人の内、旧サムルザカノ侯

領に住んでいた人々であると考えた。この統計上のメグレリ人をサムルザカノ土着の住民ではなく、アブハズィア領外メグレル地方から移住した人々とした点でレキシユヴィリ説とは異なる。ラコバの見解によると「サムルザカノ人」とサムルザカノに土着の「メグレリ人」は、全く別の民族なのである。1886年人口調査の項目をみれば、サムルザカノ地方では、ガリ、バグレビ、ナバケヴィの共同体での、サムルザカノ人とメグレリ人の人口数は、以下の通りであった。

ガリの共同体	サムルザカノ	4,881人
	メグレリ人	19
	計	4,900
バグレビの共同体	サムルザカノ人	1,396
	メグレリ人	250
	計	1,646
ナバケヴィの共同体	サムルザカノ人	3,975
	メグレリ人	382
	計	4,357

また、1909年の『カフカース年鑑』でも、

共同体	種族名	数	増減	上表を100 絶対値とする値
ガリ	サムルザカノ人	6,339	+1,458	1.30
	メグレリ	693	+ 674	36.47
	合計	7,034	+2,132	1.44
バグレビ	サムルザカノ人	1,299	-97	0.93

	メグレリ	391	+141	1.56
	合計	1,620	-26	0.98
┌-----┬-----┬-----┬-----┬-----┐				
ナバケヴィ				
	サムルザカノ人	4,714	+739	1.19
	メグレリ人	300	-82	0.79
	合計	5,014	+657	1.15
└-----┴-----┴-----┴-----┴-----┘				

また旧サムルザカノ全体では1908年の数字が挙げられている（10共同体、71か村）。サムルザカノ人とメグレリ人の合計41,376人、サムルザカノ人38,362人、メグレリ人3,014人である（注3）。

このように、サムルザカノ南部に共同体の例を見ると、一貫してサムルザカノ人とメグレリ人は区別されている。従って、サムルザカノ人はメグレリ人にしろ、スヴァン人、ラズ人にしろグルジア人とは別の民族、すなわちアブハズ人であるというのがラコバ氏の所説である。従って、言語別調査である1897年の全国センサスの数値、アブハズ人 58,697人（55.3%）、グルジア人 25,873人（24.4%、メグレリ人は内 23,810人）という当然の結果が出るのである（注4）。

さて、ラコバは統計から得られた結論を記述資料の上でも確認しようとする。グルジア正教会の長司祭、ダヴィティ・マチャヴァリアニの息子で、歴史家のコンスタンチンの「気質と習慣、言葉と宗教から見て、サムルザカノ人はアブハズ人の一種族である。もし、アブハズ語がサムルザカノで衰えたとするならば、サムルザカノだけでなく、アブハズィア全体を牛耳っているメグレリ人のおかげである」という言葉を引用している（注5）。

また、コンスタン・マチャヴァリアニとあるアブハズ人の老翁との会話が引用される。

「サムルザカノ人は、今も昔もメグレリ語を話すし、サムルザカノは、メグレリ公国の一部であったから、彼らはメグレリ人であると主張するものがある。

何ですって、一人の農民が答える。それでは、あなたに申し上げます。私は生まれてから60年余りです。父と祖父のことをよく憶えております。彼らは、

けてメグレリ語を話したことはありません。何でもかんでも、アブハズ語で言いました。共同体全部を見て下さい、ベディ、チュホルトリ、オクム、ガリ、ツアルチョ。何処でも、至る所で大人はアブハズ語を話しているのをお聞きでしょう。サベリ、オトバ、ディハズルガフでメグレリ語を話しているとすれば、これらの村に住んでいる人々は、メグレリ人と近い関係にあるからです。いったい、我々の名前や名字、我々の気質、習慣や、迷信ですら、我々はメグレリ人ではなく、アブハズ人であると証明しないでしょうか。50年代はサムルザカノ中で、メグレリ語は聞かれませんでした。それまではメグレリ語は珍しかったのです。では、お尋ね致しますが、あなたは何人ですか。

--私は、グルジア人です。

--どうして、メグレリ語とアブハズ語で話すことを習いましたか。

--メグレリアに生まれて、子供の時も若い時も、サムルザカノやアブハズィアにおりましたから。」（注6）

ラコバは、19世紀の半ばにはサムルザカノ全体でメグレリ語は聞かれず、アブハズ語とメグレリ語のバイリンガル状態は19世紀の末に近くなってから生じたと言うのである。

2 マハジル運動

それでは、1886年に86パーセントを占めていたアブハズ人の割合は何故低下したか。ラコバは二つの理由を挙げる。大規模な国外移住（マハジル運動）とアブハズィアの外部からのメグレリ人の大量移住である。キリスト教徒であるロシア皇帝の支配を嫌ったコーカサスの人々にはオスマン帝国への移住を望む者が少なかつたが、オスマン、ロシア両国政府も移住を勧め、後にロシアは移住を望まない者に対しても追放処置を行った。この結果アブハズィアでは「グミスタ地域（現在のスフムとグルリプシ郡）のアブハズ人住民は全員移住し、コドリ地区（オチャムチレ郡）とグダウタ地区の人口もかなり減少した。この間、サムルザカノからは誰も移住しなかつた」。サムルザカノ人がレキシユヴィリの述べるようにキリスト教徒のグルジア・サムルザカノ人だったからではなく、サムルザカノ人はロシアに対する反乱に加わらなかつたからである。

ラコバは、60-70年代のアブハズィアからだけで8万人、全時期でアブハズ、ア

バザ人で135,000人、ウブイフ人を加えて18万人に上るというツィツィグリの数字を紹介して、サムルザカノではキリスト教徒が多かったので強制移住を被らなかつたという説に反対し、サムルザカノの人々は反乱を起こさなかつたからであると述べている（注7）。

3 新住民の入植

アブハズ人の出国と時を同じくして、外国人がアブハズィアへ入植を開始する。1866-7年にはギリシャ人とブルガリア人の入植が始まったが、これを待たず1864年には土地不足の状態にあったメグレリ地方からメグレリ人農民の移民が始まった。彼らはアブハズ人貴族の小作農民であった。1879年には特にズグディディとセニャキの農民がスフーム地方のメルヘウル（1879年）、ベスレトカ（1881年）、アカバ（1882年）ケラスリ（1882年）、プシャブ（1883年）に移住した。この結果、アブハズィア全体、特にサムルザカノではアブハズ人住民の間に深刻なメグレリ化が生じていった。ガリ郡では、1926年の第一回全ソ国勢調査では1万3千人ほどいたアブハズ人は、現在では数百人に減少した。この結果アブハズィア全体でも1879年から1926年までに、アブハズィアにおけるアブハズ人とグルジア人の構成は以下のように変化したという。

1879年と1926年のアブハズィアにおけるアブハズィア人の構成比比較（表は、ラコバによる）

	1897年		1926年	
	人数	百分比	人数	百分比
アブハズ人	58,697	55.3%	55,918	16.4%
グルジア人	25,873	24.4%	67,494	31.4%

ラコバの所説は、あらゆるサムルザカノ人をアブハズ人であると解釈することによって成り立つ。提示された数値からはラコバの所説と決定的に異なる結論は導けないように見える。もし1926年のガリ郡に1万3千人のアブハズ人がいることにすると、1908年にサムルザカノ全体で38,362人を数えたその差は何を示すのであろうか。人口の社会移動を無視すれば、1908年のサムルザカノ人の中には1926年にアブハズ人と申告した人々とグルジア人（メグレリ人の項目はない）であると申告した人々（および父祖）がいたことになるのではないか。

次に、1886年から1897年までの微減、1897年から1926年までの減少（95パーセント）の理由はラコバ氏の説明からは得られない。自然的、社会的に加えて人口変動の第三の要素、統計上の変動を考える要素はないのであろうか。

第5節 グルジア側の反論

ラコバ氏の論文は、グルジア人の歴史家レキシユヴィリ氏のグルジア語新聞『サハルホ・ガナトレバ』誌への投稿記事に対する批判であった。これに対して、レキシユヴィリ氏は同誌に反論を執筆した。これが次に紹介する「歴史家スタニスラフ・ラコバへ答えて」である。

レキシユヴィリ氏は、ラコバ氏の19世紀後半の人口比変化の主張を直接反批判せず、先ず18世紀のサムルザカノ形成過程を提示する。「アブハズ人領主のメグレリ公領（サメグレロ）に対する攻撃は、17世紀80,90年代に続いた。80年代にはソレフ・シュエルバシツェを戴くアブハズ人は、アブハズィアにガリツゴイGalidzgoj川とイングリInguri川の間の新領土を併合することができた」と承認されている歴史的事実を確認する（注8）。サムルザカノ領成立以前から、ガリツガ川とイングリ川の間にはメグレリ人住民が存在していたことの歴史的理由をあらかじめ示唆しているのである。さて、そのうえでレキシユヴィリ氏は、ラコバ氏が主張する19世紀後半からではなく、同世紀前半にもサムルザカノではメグレリ語が広範に用いられていたことを主張する。1833年にこの地方を訪れたスイス人、学者、旅行家デュボア・デ・モンペリ（P.Diubua De Monperi）は、

「サムルザカノでは、グルジア人とアブハズ人は彼らは、ある時は最初の、ある時は、二番目の言葉で話す」と記す（注9）。またカフカース事情に詳しいロシア人、トエナウ（P.T.Toenau）は、1835年に「サムルザカノは以前は別の領国に分

けられていた。後にアブハズィアの領主シャルヴァシツェ家の支配権のもとに入った。今は、メグレリアと統一されている。その人々の起源が誰であるのかをハッキリと定義することは難しい。あるものはアブハズ語をあるものはメグレリ語を話す。顔つきで判断すれば、彼らは画然とは最初の民族とも第二の民族とも区別されない」（注10）とした。

19世紀後半には、サムルザカノで広くバイリンガル現象が広がっていた。ディミトリ・キピアニは、「彼らの顔は、はやり廃りがある。流行の言葉はアブハズ語、書くのはグルジア語、共通の、民間の、内の中の言葉は、メグレリ語である」と述べ（注11）、ダヴィティ・マチャリアニは（注12）、

「サムルザカノは、4つに分けられある。メグレリアに近いのはナバケヴィとサベリで、これらの地域ではメグレリ語が話される。西の部分はオクミとベディツィでアブハズィアに接していて、北では言葉と習慣はアブハズであるが、南部ではメグレリ語も話される」（注13）とした。医者で人類学者のパントゥホフ(Pantukhov)は、論文「サムルザカン人」で「ベデツィの共同体だけでは、大部分の人々がまだアブハズ語を話し、自分をアブハズ人であるとみなしている」、有名なグラナト百科事典の「サムルザカノ」の項目（注14）で「サムルザカン人はメグレリ語とアブハズ語を話す」等である。

さて、ラコバ氏の論文で触れられなかったのは「サムルザカノ人」の統計上の定義である。1878年のサムルザカノの人口について、スフームの「身分および領地委員会 (tsodebriv da saadgilmanulo komisia) の責任者であったヴェデンスキー (A.N.Vedenskij) は「アブハズ人であろうとメグレリ人であろうとサムルザカノの原住民であるが、残念ながら我々はまだ、彼らの種族的起源によった分布を手に入れられないでいる。メグレリ人は、後からメグレリから移住してきた者をいう」（注15）。ラコバ氏は統計で一貫してサムルザカノ人とメグレリ人を区別していることを理由に、サムルザカノ人はアブハズ人であると結論に至ったが、ここでレキシユヴィリ氏が提示した証拠によるとそうではないことになる。また、ヴェデンスキーはサムルザカノの住民として、5,572戸のサムルザカノ人、222戸のメグレリ人、計5,794戸を挙げ、更にメグレリ人1,500家族が一時的に居住していると述べている。

更に、レキシユヴィリ氏はラコバ氏が触れなかった新しい数字を提示した。第

一は民俗学者ゼイウドリッツ (N. Zeidrits) の与えた、1881年の全アブハズィアの人口である。これは以下の通りである (表はレキシユヴィリのもの)。

	メグレリ人と スヴァン人	アブハズ人と アバザ人	トルコ人
スフーム市	0	0	0
オチャムチレ	26,475	5,700	4
ピツヴィンタ	0	6,900	42
ツベルダ	0	605	0
計	26,475	13,205	46

ロシア人	一時的住民	計
0	1,500	1,500
0	0	32,179
138	0	7,080
0	0	605
138	1,500	41,364

1881年のオチャムチレすなわちサムルザカノの人口は、メグレリ人 26,475人、アブハズ人 5,700人、トルコ人 4人を含め総人口人 32,479人である。これは、1886年のサムルザカノ人30,640人に非常に近い。また、ヴェデンスキーの5,794戸にも近いであろう。「サムルザカノ・グルジア人」という表現は、ラコバ氏によって厳しく否定されたが、レキシユヴィリ氏はこの26,475人がそれに該当すると反論する。

1886年の統計では、僅かに4,166人のグルジア人（メグレリ人とラズ人は内数で3,558人）しか登録されていないのであるから、1881年に26,475人の数のグルジア人がいるはずがない。レキシユヴィリの考えは、このグルジア人は86年の統計ではグルジア人とサムルザカノ人に再区分され、さらに1886年のサムルザカノ人は、1897年にはアブハズ人として記録されたと考えている。

このように、サムルザカンにグルジア人が存在したのであるが、「サムルザカン・グルジア人」という概念についても「1886年の反乱まで、アブハズィアには、キリスト教信仰のサムルザカン・グルジア人が住んでいた」（注16）というアブハズ人の研究者サミリの言及を学説上の根拠としてあげる。

また、これもラコバ氏が挙げなかった1917年の統計によって、サムルザカノの民族別人口構成を次の表のように与えている。前の節でラコバが与えた数値（注17）と対比しよう。

1917年レキシユヴィリ		1908年ラコバ	
グルジア人	40,959人	サムルザカノ人	38,362人
アブハズ人	1,161人	メグレリ人	3,014人
小計	42,120人	小計	41,376人
トルコ	352人		
ロシア	27人		
その他	4人		

ト-----ト * レキシユヴィリの与える数は		
総計	42,503人 *	42,401 である。
-----ト		

このようにレキシユヴィリの見解によると、19世紀サムルザカノではメグレリ人とアブハズ人の二重言語化、民族の混交が行われていたが、統計上グルジア人に分類されるべき人々が大多数であり、彼らは1886年にはサムルザカノ人に、1897年には~~グルジア~~^{アブハズ}人に分類されていることが明らかになった。更にレキシユヴィリは、1926年のセンサスに関して「我々は何とか拡大解釈して、5,700から60,000人のアブハズ人を確保している。何故拡大解釈かという、何千人かはアブハズ人に登録しているが、言葉はアブハズ語ではなくメグレリ語だからだ」という当時のアブハズ人の共産党指導者ニコライ・ラコバの言葉を引用している（注18）。正確にはこの時、55,918人のアブハズ人の内、アブハズ語の話者は47,182人、8,736人はメグレリ語の話者であった。

さて、ラコバ氏はアブハズィアにおけるグルジア人の増加をメグレリ人移民が原因であるとしている。レキシユヴィリはこの点についてもラコバを批判し、19世紀におけるグルジア人のアブハズィア移住者数を低く見積もっている。ラコバは、1879年にズグディディとセニャキの農民が大量に移住としたが、1886年の統計では、メグレリ人とラズ人は3,558人にすぎないという点である。更に、1886年から97年に関してもラコバはグルジア人が6倍に増加したとするが、確実に言えるのは、スヴァン人が92人移住したことだけであると言う。レキシユヴィリは、18世紀までメグレリ公国領であったサムルザカノ侯領では、成立の当初より多数のメグレリ人が住んでいた、19世紀のメグレリ化現象によって、アブハズ人の割合が変化したのではないというものである。

結論と展望

小稿では、サムルザカノの固有の住民がアブハズィア人なのか、グルジア人の一部であるメグレリ人であるかに関する、双方の主張を紹介したものである。この議論の結果がアブハズィア特にガリ地方帰属交渉に重要な影響を及ぼすので、双方とも強い姿勢で自分の立場を主張している。従って、両当事者の主張を紹介

する立場にあっても、結論は慎重たらざるを得ない。

18世紀と19世紀の事情のみを考慮しよう。13世紀にシャルヴァシツェ家領であり、14世紀にメグレリ公に支配されるようになった。サムルザカノに土着のアブハズ人が住み続けていたとする証拠はない。サムルザカノでは在来のメグレリ人と新来のアブハズ人が混ざりあい、言語的に、特に19世紀の後半には、アブハズ人のメグレリ化が生じたという仮説が提示できる。もしそうであれば、旧サムルザカノの人々、ガリ地区とオチャムチレ地区のガリツガ川以東の地域の住民を土着の民族的権利をもつアブハズ人と新来の権利を持たないメグレリ人に区分することは無意味であることになる。あるいはサムルザカノ侯領期に両種族の融合現象があったのであるとすると、土着のメグレリ人と新来のアブハズ人に区別する必要もないのではなかろうか。しかも、少数民族やその子孫が、社会的状況に応じて、エスニックな帰属を使い分けることは、しばしばみられることである。特にアブハズ人は有罪民族に指定されて海岸部の居住を禁止された。また、強制的にオスマン帝国領へ移住させられ、後に帰国するものがあってももとの住地への居住は許されなかった。ロシア帝制期の時代の民族登録に際してかなりの揺れが生じても当然と言えよう。長い歴史過程で人種的、文化的、言語的に混交した地域の住民を両断する政策は政治的^な連続きとしては適当であるとは思えない。

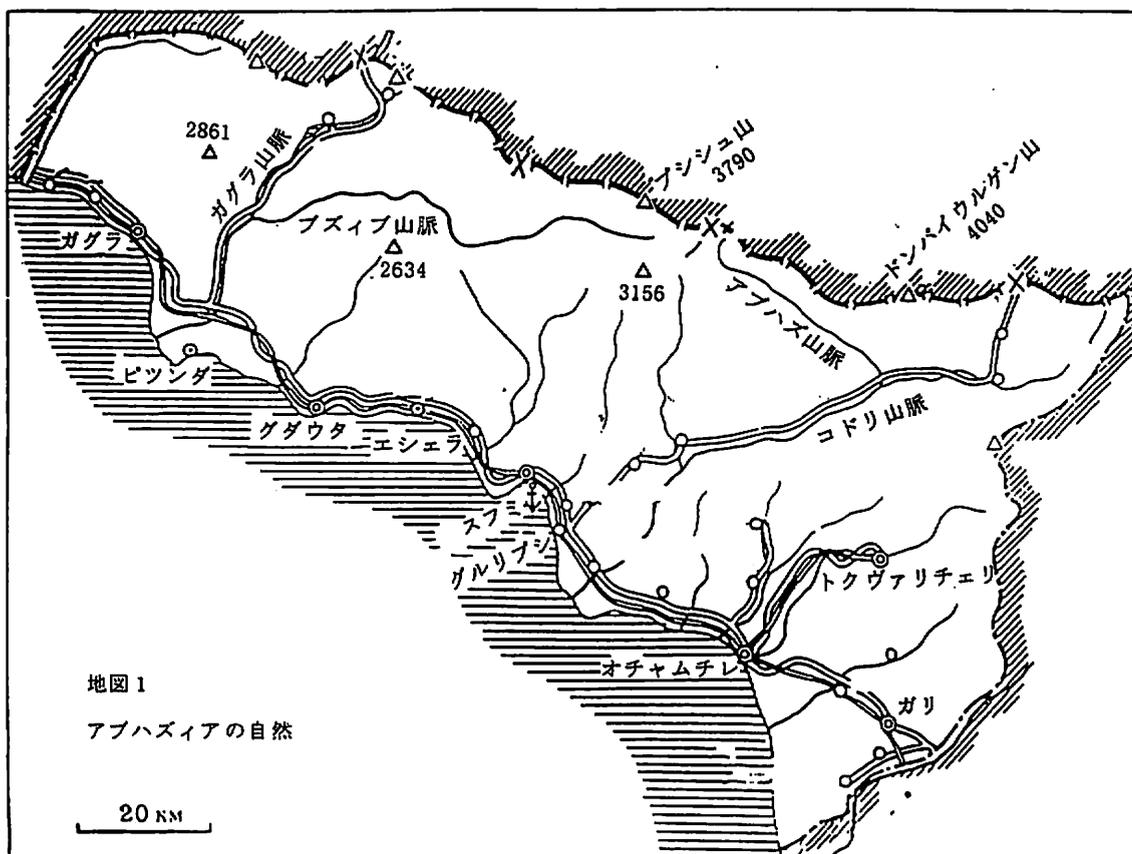
アブハズィア全体について見れば、アブハズィアの独立を巡る紛争の中で、グルジア人はソ連時代のアブハズィアにおいては、ソ連内の他の同程度の政体と比較してアブハズィア人の政治的、文化的権利が保証されていたと主張する一方、アブハズ人にとってそのような保証は不十分であるか名目的に過ぎないものであった。

アブハズィア最高議会の民族別議席配分では、現在アブハズ人の先住民族として統治権を維持するに十分な政治的権利を与えている。しかし、これは逆にグルジア人や他の少数民族の政治的な権利を損なうことになっている。冠民族(title nation, korennyj narod)に最大限の政治的、文化的権利を保障するソ連的民族政策は、ソ連崩壊後の今、国民に平等な政治的権利を認める西欧型民主主義と合致しないのではないであろうか。政策として、国民の一部に他の国民よりも多くの権利を認めることは、アメリカ合衆国のクォータ制、インドの指定カースト制度にもみられるが、これらの制度によって自己の利益がせばまれていると信じる他

の国民の批判も受けている。

また、経済に関しても、私有化の原則は、あくまでも原則はあらゆる市民に平等な権利を与えることであるが、もしそのような私有化を実施するとアブハズ人は、国の富の17.8パーセントしか所有することができない。それを避けるためには私有化を実施しないという政策、あるいは、1864年に居住していた住民の子孫にのみ市民権を認める、あるいはマハジル運動で出国したアブハズ人の子孫にも国籍や私有化の分配を行う等の政策を採るしかないであろうが、これによっては世界のどのような国家、国際金融機関の援助も受けられないであろう。

サムルザカノ地方の19-20世紀の民族形成過程を概観した上で、アブハズ・グルジア平和交渉に一つの案を提言することができる。恐らく、民主主義政体を採用し、しかもアブハズ人の冠民族としての権利をも保持する方法の一つは、グルジア人が集中して住むガリ地方をグルジアに譲渡することであろう。これによって、アブハズ人は、ロシア人かアルメニア人と協力することによって、政治的多数の地位に留まることができる。少なくとも、現在のところ、アブハズ人とロシア人、アルメニア人の関係は良好である。カフカース民族同盟の最初の綱領にあったように、北カフカース国家を形成して、スフーミをその首都にしたところで、その新しい国家では最大民族はアブハズ人ではなくチェチェン人になるのである。ガリ地区分離は、既に第三者調停機関の提案しているところでもある。



注

- 1) Ocherki istoriaja Abkhazskoi ASSR,ctr..201:Inal-Ipa,Abkhazy,1996,st
r.70
- 2) Kazkazskij Kalendar' na 1898 god;Svod staticheskikh dannyx o nasel
enii Zakavkazskogo kraja,izvlechennykh iz posemejnykh spiskov 1886,Tifli
s,1893
- 3) Kavkazskij kalendar:1909,p.459-60
- 4) Pervaja vseobshchaja perepis' nasekenija Rossijskoj omperii 1897 g.
65.Kutaiskoja gubernija.,CPb.,1905,c,88
- 5) Chernomrt'skoj vestnik,1899,2 aprelja
- 6) ibid.1899,8 maja
- 7) しかし、ガチャチエラツェは、サムルザカノでは、アブハズ人でさえ大部分
がキリスト教徒であると考える (The New Georgia,p.83,85)
- 8) Apkhazetis istoriis narkvevebsh,t.1,gv.122
- 9) Mogzauroba kavkasiis garshmo ,Sukhmi,1976,gz.119,rusenaze
- 10) G.Dzidzaria,P.Tornau da misi XIX s, Kavkasiuri masalebi,1976 ,gv.11
9
- 11) Kavkazi,1865,No.83
- 12) Zogi ram samurzakanze,1865
- 13) Zapiski Kav.otd. irgo,t.VI
- 14) vo.37,p.202
- 15) Izveskija Kakazskogo otd.IRGO,VII
- 16) G.SAMIRI,Islami Apkhazetshi.1972,gv.74
- 17) Dasakhulebuli tsiqaro,1922,gv.15
- 18) N.Lakoba,Statiebi da mokhsenebebi,(rusenaze),1987gv.213

参考文献

- Chumalov, M. Ju. (sost.) Abkhazskij Yzel: Dokumenty i materialy, Vyp. 2, Moskva, 1995
- Anchabadze, Z. B., Ocherk etnicheckoj istorija abkhazckogo naroda, Sukhumi (Alasjara), 1976
- Antelava, I. G., Ocherki po istorii Abkhazii XVII-XVIII vekov, Sukhumi (Izdate l'stvo Akademii nauk Gruzinskoj SSR), 1951
- Amichba, Abkhazija i Abkhazy srednevekovykh gruzinskikh povestvatel'nykh istochnikov, Tbilisi, 1988
- Artjunov, S., i V. Kobychiev. V kraju gor, sadov i vinogradnikov, Moskva, 1987
- Appendix to Documents from The KGB Arcrive in Sukhum: Abkhazia in the Stalin years, Central Asian Survey, vol. 15, Nos. , 2, 1996
- Benet, Sula. Abkhazians: The Long-Living People of the Caucasus. New York, 1974
- Gruzinskaja SSR, Tbilisi, 1981
- Gruzija, Sovetskij sojuz, M. 1967
- Goskomstat, SSSR v tsifrakh v 1990 godu, Moskva, 1990
- Hewitt, George, A Georgia Reader, London, 1996
- Hewitt, G, Abkhazia ; Problem of Identity and Ownership, . Transcaucasian Boundaries (Ed. by Wright, J. F. R. and oth., London, 1996)
- Khutsishvili, G., The Black Sea Coast of the Caucasus, Moskva, 1980
- Gachechiladze, Revaz. The New Georgia; Space, Society, Politics., London, 1995
- Inal-Ipa, Sh., Abkhazy istpriko-etnograficheckie ochrki, Sukhumi (Agrosizdat), 1960
- Inal-Ipa, Sh. i A. A. Boronov., Istoricheskij Ocherk, pp. 18-25, v Abkhazskoe dolgo-zhitel'stvo, M. 1987
- 北川 誠一「アルメニア、アゼルバイジャン、グルジア」『現下ソ連の民族問題』
外務省欧亜局ソヴェト連邦課1990年、123-147頁

北川 誠一「ソ連崩壊とアブハジアの独立」『旧ソ連の地域別研究』日本国際問題研究所、1996年、68-81頁

北川 誠一「サイングロのグルジア人」『民族の共存を求めて(1)』(『スラブ・ユーラシアの変動』領域別報告輯 北海道大学スラブ研究センター)、1996、50-56頁

北川 誠一「アジャリアのムスリム・グルジア人」『旧ソ連の地域別研究-ウクライナ・ザカフカース・モルドヴァ・バルト』日本国際問題研究所、1996年、94-101頁

Kitagawa, S., The Role of Historiography in the Abkhazo-Georgian Conflict, 1997年、『スラブ・ユーラシアの変動-その社会・文化的諸相』(重点領域研究平成8年冬季研究会報告集)、北海大学スラブ研究センター、1997年

Lakoba, Stanislav. Abkhazia is Abkhazia, Central Asian Survey, vol.14, No.1, 1995,

Lakoba, S., V chom probinilsja uchitel'?, Sakhalkho ganatleba, 14, ivnis, 1990

Lekishvili, Solomon, Paskhad istorikos S. Lakobas, Sakhalkho Ganatleba, 14, ivnis, 1990

Ocheki istorii Abkhazskoj ASSR, Sukhumi, Abgosizdat, 1960

Suny, R. G., The Making of the Georgian Nation, Bloomington and Indianapolis, 1988

Zhorzholiani, G., S. Lekishvili, L. Toidze, E. Khoshtaria-Brosset, Historical, Political and Legal Aspects of the Conflict in Abkhazia, Tbilisi, 1995

初出 『旧ソ連の地域別研究-コーカサス地方を中心として』、平成10年1月、国際問題研究所

4 ソ連崩壊とアブハジアの独立

はじめに

ベレストロイカ政策はグルジア独立運動に幅広い可能性を与えた。メラブ・コスタヴァやズヴィアド・ガムサフルディアのような古くからの反体制主義者が流刑地から解放され、加えて若い世代による最初の政治的活動が環境や史跡保護の市民運動の形で誕生することが許された。

しかし、グルジアに独立を求める運動を可能にした状況は南オセチアとアブハジアにも同様の可能性を与えた。アブハジアの独立、南オセチアのグルジアからの分離・北オセチア（ロシア連邦内の共和国）との合同運動である。しばしば、グルジア人はこの二つを同一の政治過程の中には見ないで、グルジア内部の分離、独立運動はグルジアの独立を阻止するための「帝国」（或いは、モスクワ、共産党）の陰謀であると考えた。「アブハジアの札」が引かれたなどという表現が耳にされた。しかし、「帝国」がどのような札を引こうとその札自体は以前から存在していたと考えなければならない。

当時、ソ連において民族の名称をつけた様々な段階の政治的構成体（共和国、自治共和国、自治州など）が独立を、民族的権利を与えられていなかった多くの集団が新たに自治を求め始めたにもかかわらず、当事者は要求されている独立や自治の目的、内容、効果、デメリット、負担などについては、あまり深く追求していなかったように思われる。あるグルジア政府高官は筆者に、独立がどのようなものであれ、我々は一度独立する必要がある、ロシアとの経済関係が不可欠なものであれば、その時に改めて、再統合を考えればよいという趣旨のことを述べた。その一方で、グルジアの自治州に過ぎない南オセチアでの初等教育におけるオセツ語の地位はロシアの自治共和国の北オセチアよりも、遥かに高いことを指摘して、南オセチア独立のデメリットを強調した。また、当時アゼルバイジャンの教育相も、アゼルバイジャンでアルメニアで教育する学校が少ないことの原因をアルメニア人自身がロシア語による教育を望んでいることを原因にあげた。両者の見解には共通のメンタリティーが感じられる。

独立または分離派の政治的目標の例として、これまでに指摘されているのは、チェチェン・イチュケリア共和国の故ジョハル・ドゥダエフ大統領がチェチェンはロシアからは独立するが、ソ連が復活すればそれに加盟すると語った事実である。ソ連時代の共和国の権能は国連に議席を与えられていたウクライナとベラルーシにしたところで、独立とはほど遠いものであったことを考えると、ドゥダエフが何をソ連に期待していたかを理解することは難しいが、同じ頃、チェチェンと同じ産油国アゼルバイジャンの民族戦線を率いていたアブルファズ・イルチベイ（アリエフ）が、1989年に掲げていた目標に経済自主権の行使があった。勿論、自主権の中には、共和国内の資源を自由に処分し、得られた収入を自由にするだけでなく、ゴスプランの統制から脱却して、生態系や住民の健康を損ねるモノカルチャー経済構造を改めるといった目的もあったであろう。さて、これらを根拠に、自治共和国の独立要求を、連邦の枠内での経済的自主権の拡大であると判断してよいであろうか。小論では、アブハジアの国制、独立運動過程、グルジア憲法の自治共和国関連条規の検討を行い、アブハジアを例として、共和国の独立、ソ連解体と自治共和国の独立運動との関係について論じる。

1. アブハジアの国制

1810年2月17日、自治領としてロシアに併合されるまで、アブハジアにはシャルヴァシツェ（アブハズ語名称では、チャチュバ）家によって支配されるアブハジア公領（samtabro）があった。北のムズィミア川から、南のイングリ川が公（ah）の領土であった。この間には、ガグラやツェベルダには独立、半独立のマルシャニア家、チャンバ家やアチュバ（グルジア名はアンチャバツェ）家の所領があった。シャルヴァシツェ家の公領は18世紀初めに、セグナク公の3人の息子に分割され、アブジュア、サムルザカノの新しい公領が成立した。アブジュアとサムルザカノは17世紀末にサメグレロ公国から征服された領土であった。スフームを含む北のルフィヌイの領主がアブハジア全体の名目的支配者として君臨したが、サムルザカノは事実上独立の君主として行動した。1770年にサムルザカノ地方のレヴァン・シャヴァルシツェは、ロシア皇帝に服属したとされるが、形式的なものであった。公領は1864年ミヘイル・シャルヴァシツェの時に廃止され、以後はロシアの直轄地となった。この年に旧公領はスフーム軍事管区に編成され、1868年に

は、ピツンダと南部のオチャムチレを加えられた。1883年には、スフーム管区と改称され、西グルジアを支配するクタイシの総督の支配下に入った。1904年から1917年まで北部のガグラ地方は、黒海沿岸州のソチ軍事管区に編入された。

2月革命後、スフームでは、シャルヴァシツェ公爵を中心に結成されたアブハジア安保委員会が活動を始め、この年5月に組織されたカフカース山地民統一連盟に加盟した。1917年9月にアブハズ代表団は、ウラディカフカースでコサック軍団南東連合とカフカース山地民草原自由人連盟との連合協定に参加した。しかし、この調印はアブハジアのグルジア人住民から反対を受けた。11月8日、スフームでアブハズ民族大会が開かれ、アブハズ民族ソヴィエトを組織、1918年2月、アブハジア人民共和国宣言と憲法が採択された。代表はトピリスィへ赴き、グルジア人民ソヴィエト執行委員会と交渉。ここで、アブハジアはグルジアの一部として自治権を得ることが決定されたが、グルジア国家自体はまだ存在していなかった。1918年5月26日に、グルジアが民主共和国の成立を宣言すると、1918年6月、グルジア民主共和国とアブハズ人民ソヴィエトとの間で改めて合意が成立、アブハジア国内問題はアブハズ人民ソヴィエトが統治し、グルジア政府内にアブハジア問題相のポストが与えられることになった。

さて、スフームとトピリスィが接近する一方、これに反対する力も動いていた。1918年の始め、スフームのポリシェヴィキは権力奪取を試みたが、独力では不可能であったので、クラスノダルの「黒海クバン・ソヴィエト共和国」にスフーム管区の併合を申し出、赤軍の力を借りてアブハジアを制圧しようとした。かくして、5月、スフームにアブハジア軍事革命委員会が樹立された。また、6月にはアブハジア中部海岸にアレクサンドル・シャルヴァシツェの導入したオスマン帝国の戦闘部隊が上陸した。南北から攻撃を受けたアブハズ人民ソヴィエトはトピリスィ政府に救援を依頼した。グルジア軍はポリシェヴィキとオスマン軍を撃退した。スターリンはこの時のグルジア側の対応をショーヴィニズム的であると非難している。アブハジアとグルジアの統合は、当時両者に可能であった複数の選択の一つであったということになる。

ポリシェヴィキも同様な選択を採用した。1921年3月4日、アブハジアにソヴィエト権力が成立すると、28日、ロシア共産党（多数派）カフカース局はアブハジア・ソヴィエト社会主義共和国の成立を宣言し、これを受けて、5月21日、グルジ

ア革命委員会はアブハジアの独立を承認した。しかし、1921年12月16日、アブハジアとグルジアとの間に条約が結ばれ、アブハジアは「条約共和国」として、グルジアに編入されることが決定された。このとき、プソウ川とメレイア川の間はロシアのソチ地方に残された。

1922年2月12-17日、アブハジア議会でアブハジア・ソヴィエト社会主義共和国中央執行委員会、アブハジア・ソヴィエト社会主義共和国の人民委員会会議が組織されるが、ここで、最初のアブハジア憲法が立案され、1922年4月1日の議会で承認された。このような手順の後、同年、1922年12月、アブハジアはザカフカース連邦のグルジア共和国の内部の共和国という資格でソ連邦に加入した。しかし、これにもかかわらず、1931年2月、アブハジア第6回議会はアブハジアが自治共和国としてグルジアと合同することを決定、さらにこれを受けて全グルジア・ソヴィエト議会でも承認されて、アブハジアは、12月に、条約共和国から、ソ連邦憲法の規定による自治共和国となり、ソ連崩壊に至っている（1）。

今日我々がアブハジアと呼ぶ地域は、19世紀にロシアが併合したシャルヴァンツェ家のアブハジア公領に若干のアブハズ人の独立君主領を加えたものである。但し、その内、一部は今日、ロシア連邦ソチ地方に編入されているので、アブハジアをグルジア固有の領土とする人々の中には、ソチを未回収のグルジア領とする考えもある。また、1810年時のアブハズ公領の内、アブジュア（オチャムチレ地方）とサムルザカノ（ガリ地方）は17世紀末に征服で成立したものであるもので、これをアブハジアには含めない考え方もある。それにもかかわらず、19世紀にアブハジア公が西グルジア王の家臣ではなく、直接ロシア皇帝に臣従したことが、プソウ川からイングリ川までのアブハジアを独立の政治的まとまりとみなす根拠となっている。

2. アブハジアの独立運動過程

1917-18年のアブハジアの状況を見ると、一方でポリシェヴィキが、赤色ロシアとの接近をはかり、他方にトルコの軍事力を利用して支配権を確立しようとするグループがあり、カフカースの山地民と国家連合をもととするグループ、グルジアとの連合を画策するグループの四つに大別されることは、前節で述べた。従って1921年から一貫して、アブハズ人とグルジア人の間に民族問題があったり、

アブハズ人の大部分にグルジアからの分離志向が強かったのではなかった。問題は、ソ連時代、特に1930年代から50年代までの間に生じている。以下に、アブハジア分離運動の主要な流れを、年次を逐って述べる(2)。

1957年、最初の分離宣言。文化人の一団が、アブハジアのロシアへの移管を希望。

1967年、第2回目の宣言。ソ連共産党中央委員会などへ、アブハジアのグルジアからの分離を請願。

1977年、アブハジア知識人130人宣言。民族生活に対するグルジア人の干渉を批判し、アブハズ人の文化の保護、経済発展計画の失敗を批判した。1972年にグルジア共産党第一書記になったシェヴァルツェ時代は、それまで民族的少数派の権利が無視されていたことを反省し、アブハジア人に限らず、民族的少数派の市民生活の様々な分野で、進歩的な政策を実行していた。

1978年、ソ連新憲法制定に関して、アブハジア人グループが自治共和国に与えられた広範な自治に満足せず、ロシア連邦への移管、グルジアからの分離権を要求した。

1981年、アブハズ人閣僚増要求デモ。アブハジア人学生の為にスフーム師範大学の総合大学への昇格が決定される。ペレストロイカ以前にシェヴァルツェが、アブハジア人の為に行った文化政策は、少なくとも表面的には、驚くべき程である。人口10万人足らずのアブハズ人に、一つの総合大学、テレビ局、日刊誌やその他の定期刊行物が与えられた。

1987年、シャルヴァシツェ家の本拠であり、革命後もアブハズ人の政治生活の中心であったグダウタ地方のルフィヌイ村で、アブハジアのロシア移管を求める民族大会が開催された。

1988年、ソ連共産党19回党大会議長団へ、いわゆる「アブハジアの手紙」が送られ(執筆者は作家のアレクサンドル・ゴグア)、アブハジアの地位をグルジアの自治共和国から連邦共和国への格上げが要求された。また、アブハジア民族フォーラム、アイドギララ(Aidgylara)が結成された。

1989年、モスクワは、2年前に就任したばかりのアブハジアのボリス・アドレイバ党第一書記を解任したが、アブハズ人は3月に再びルフィヌイで3万人規模の大

集会を開いた。地方党および当局の承認と参加のもとに、アブハジアの連邦共和国への格上げと、臨時的措置として連邦直接管理が要求された。グルジア人はトビリシで抗議行動を行ったが、これがトビリシの4月9日事件の引き金になった。

1989年6月25日、アドギララはゴルバチョフ大統領にナゴルノ・カラバフと同様のアブハジアの直接統治を要求。14日には、スフーム等で民族対立が始まっていたが、これはアドギララの扇動や事前の用意があったと言われている。8月25-26日には、カフカース民族議会第1回スフーム大会が開催され、スフームを首都にカフカース山地民共和国設立することが将来の目標として採択された。また、アブハジア、グルジア両民族に流血事件の遺憾の意を表明した。9月14日、アドギララはハンガー・ストライキを実施。9月21日、カバルダ民族運動の大会で、ソ連とグルジアにアブハジアのソ連直接統治を要求。11月4日、カフカース山地民連盟第3回大会はソ連とグルジアにアブハズ人の憲法上の保護を要請。

1990年8月25日、アブハジア国家主権宣言。10月グルジア最高会議選挙で、ズヴィアド・ガムサフルディアの円卓会議が勝利、ガムサフルディアが議長に選出された。一方、12月4日、アブハジア最高会議はヴラディ斯拉ヴ・アルツィンバを議長に選出した。

1991年3月17日の全ソ国民投票は、グルジアではボイコット、アブハジアでは大部分がソ連の存続に賛成。30日グルジアは独立の是非を問う国民投票を実施し、承認された。

1991年11月、1-3日、スフームでカフカース民族議会第3回大会が開催される。

1991年12月1日、アブハジア最高会議人民代議員選挙で、アルツィンバ派が多数派となる。

1992年7月23日、アブハジア1925年憲法採択（65名中、36名出席）、続く会期中に、国名をアブハジア自治ソヴィエト社会主義共和国からアブハジア自治共和国に変更した。6月14日、アブハジアのロシア人政治団体「スラヴの家」の主導でアブハジア・コサック大会が開催され、新しくコサック軍が組織されたが、動員兵力は300人であった。8月10日、シェヴァルツェは15日に鉄道に非常事態宣言を發布することを決定、アルツィンバに通告した。11日、深夜、シェヴァルツェ自身の演説によれば、グルジア内乱以来、ロシアとグルジア、アルメニアを

結ぶ鉄道がアブハジア内で、武装集団によって、略奪、通行の妨害を受けており、さらに、ガムサフルディア派が7月に交渉に赴いたグルジアの副首相、外相副内務相を誘拐してアブハジア内に連れ去っていたことが原因であった。14日、グルジア国防軍のアブハジア作戦開始、アブハジア側がこれに発砲したので1994年まで続く戦争が始まった。アルツィンバは、17日、「世界各国の議会と大統領に」宛てた請願文を表し、「1992年8月14日、グルジア国家評議会の軍隊が、占領を目的として、アブハジア共和国の領土に侵入した」、「数十人の無実の市民、観光客、女性子供が死亡した。アブハジアでは、民家、ホテル、学校、病院が放火され、住民は略奪を受け、自宅から追い出された。数百人の人々が人質となり、拷問を受けた。経済は混乱し、パン、薬品、燃料が不足し、情報は入ってこない」と宣言した。アルツィンバは14日朝に国民動員令を發布し、昼のテレビで、国民に英雄的な抵抗を呼びかけたが、前もって国民に状況を知らせたり、グルジア軍の進入自体を阻止する計画はもたなかった。グルジア側は、グルジア軍は事前に通告した限定的作戦を実施する計画であって、アブハジアを武力的に「占領」する意図はなかったと主張している。

アブハジアの知識人が、アブハジアのグルジアからの分離や政治的地位を自治共和国から連邦構成共和国への格上げすることを求めたのは、フルシチョフ時代に遡る。意識するとしないにかかわらず、アブハジアはソ連の枠内での限定された主権を享受するはずであった。1989年には、ナゴルノ・カラバフ方式の紛争地域の連邦政府直接管理が要求されたが、この方式が紛争の解決に役立たなかったことは、後で、事実が証明する。また、カフカース山地民共和国のようなロシア革命後登場した政治組織が再び構想されたのはソ連崩壊以前である。この構想自体は、ソ連が崩壊した後、アブハジアとチェチェンの陰惨な戦争を前にして進展をみていないが、アブハジアは単に連邦構成共和国になることを要求する一方、90年代にはそれまでと異なる政治的枠組みも追求していたと思われる。特に、1991年3月の国民投票で、グルジアがソ連からの独立を達成してからの動きは急激であるが、グルジアがソ連から独立しても、アブハジアは実力で残留する政策であったと思われる。しかしアブハジアの独立への歩みがさらに急速、過激となるのは、ソ連崩壊後であるので、必ずしも、アブハジアがソ連の保護を当てにして、グルジアからの独立を追求したとする結論は出てこない。

3. グルジア憲法とアブハジアの地位

グルジアは、1921年、史上初めてのグルジア民主共和国憲法を持った。ソヴィエト時代には、1922年、1927年、1937年、1978年の4件の憲法があり、さらに、最後の1978年憲法は、1986年、1988年、1990年の3回小改訂を受けている。1991年の独立後、1992年に採用したグルジア共和国憲法は、グルジア民主共和国憲法と同一の内容である。

1978年憲法では、アブハジアの地位は第8章の「自治ソヴィエト社会主義共和国」(79-82章)に規定されている他、第6部「自治共和国の最高機関」の第15章「自治共和国の最高会議」、第16章の「自治共和国の閣僚会議」、人民代議員の種類に関する第85条、選出に関する第92、97条、代議員特権に関する第102条、グルジア最高会議への自治ソヴィエト共和国からの参加に関して第104条、グルジア憲法委員会への自治共和国の代表について第119条、共和国閣僚会議への自治共和国からの参加に関して第123条、自治共和国の最高機関に関する第133条、最高裁判所について第163条、検事が置かれることに関して第177条がある。自治共和国そのものの地位を規定する条項は、第8章第79から82条までであるので、以下に、第8章と、自治州と比較するため第9章の訳文を示す(3)。

(1) グルジア・ソヴィエト社会主義共和国憲法

第8章

自治ソヴィエト社会主義共和国

第79条

自治共和国はグルジア・ソヴィエト社会主義共和国の構成の中に含まれる自治ソヴィエト社会主義共和国である。

自治共和国はソヴィエト社会主義共和国連邦およびグルジア・ソヴィエト社会主義共和国の憲法の範囲内で、管理下の問題を自立的に決定することができる。

自治共和国はソ連邦憲法、グルジア・ソヴィエト社会主義共和国憲法に対応し、自治共和国の独自性を考慮する独自の憲法をもつことができる。

第80条

アブハジア自治ソヴィエト社会主義共和国とアジャリア自治ソヴィエト社会主義共和国は、グルジア・ソヴィエト社会主義共和国およびソヴィエト社会主義共和国連邦に係わる問題の決定に、グルジア・ソヴィエト社会主義共和国とソヴィエト社会主義共和国連邦のしかるべき最高国家権力と機関を通して参加する。

アブハジア自治ソヴィエト社会主義共和国とアジャリア自治ソヴィエト社会主義共和国は、ソ連邦およびグルジア・ソヴィエト社会主義共和国の国家権力の最高機関と組織の決定を実現にすることによって、その領域において総合的な経済的社会的発展を保証し、その領域におけるソ連邦とグルジア・ソヴィエト社会主義共和国の全権の実現を助ける。

アブハジア自治ソヴィエト社会主義共和国とアジャリア自治ソヴィエト社会主義共和国は、その固有の問題について、連邦および共和国（グルジア・ソヴィエト社会主義共和国）に従属する企業、団体、組織の活動と協力し、監督する。

第81条

アブハジア自治ソヴィエト社会主義共和国とアジャリア自治ソヴィエト社会主義共和国の領域は、その同意なしには変更されない。

第82条

グルジア・ソヴィエト社会主義共和国の法は、共和国の領域の範囲では、どこにおいても同等の効力を有している。自治共和国の法とグルジア・ソヴィエト社会主義共和国の法が抵触した時は、グルジア・ソヴィエト社会主義共和国の法が効力を有する。

第9章

第83条

南オセチア自治州はグルジア・ソヴィエト社会主義共和国の構成の一部である。

第84条

南オセチア自治州に関する法律は、この州選出の人民議員の提案によって、グルジア・ソヴィエト社会主義共和国最高会議によって制定される。

(2) グルジア民主共和国憲法

この憲法は1921年2月21日に採択されたが、直後に赤軍が共和国の領土内に侵入、共和国政府は崩壊した。1992年、ガムサフルディア政権を逐った軍事委員会は2月21日に1921年憲法の復活を宣言した(4)。

第11章 自治的行政

第107条

グルジア共和国の不可分の一部であるアブハジア(スフーム地方)、ムスリムの住むグルジア(バツーム地方)およびザカタラ(ザカタラ地方)に関する行政に関しては、自治を享受する。

第108条

前条で述べられた地方の自治に関する地位は、特別の法律の対象となる。

グルジア民主共和国憲法では、今日のアブハジアとアジャリア、およびアゼルバイジャン共和国ザカタラ地方への自治を承認している。しかし、憲法の規定自体からはこの自治の質を知ることはできない。これらの地域に与えられた自治権の具体的内容は、関連法規によって規定されることになっているからである。勿論その法規は結局は制定されなかった。同月、グルジアは赤軍によって占領されるからである。従って、憲法で規定されている自治権を保証する法律が制定されなかったことは、グルジア民主共和国政府の責任とはいえないが、それにしても、グルジア科学アカデミーの小冊子が主張するように、グルジア民主共和国憲法で、アブハジアに対して十分な自治を与えていたとも断言できないであろう。

1978年憲法を廃止し、1925年憲法を採用するアブハジア側の主張は、1992年2月にグルジア軍事委員会が1978年憲法を廃止したが、アブハジアの1978年憲法は、グルジア1978年憲法、ソ連1977年憲法に応じて制定されたものであるので、グルジア1978年憲法の廃止によりアブハジア1978年憲法は法律上の根拠が失われた。この状況にかんがみて、アブハジアの最高会議は1992年7月23日、グルジアと特別の条約によって統合されていた1925年当時の憲法(1925年憲法)を再び採用したというものである(6)。

1925年憲法では、アブハジアの法的地位について「アブハジア・ソビエト社会主義共和国は、グルジア・ソヴィエト社会主義共和国と合同の特別の条約を結び、これを通じて、ザカフカース社会主義連邦共和国に加盟する」とされた(7)。

この条文を文字通りに解釈すれば、アブハジア共和国はグルジア共和国と新たに特別の条約を結ぶことによって、ソ連邦に加入するべきことになるが、勿論この時ソ連邦は存在していない。

アブハジア最高会議がグルジアから独立した国家機能を持つようとしたのは、ソ連邦が健在であった1990年に始まった。8月25日アブハジア最高議会は多数意見として、「アブハジア・ソヴィエト社会主義共和国の国家主権宣言」をおこなった。また、同日、「アブハジア国家防衛の法的保証について」を可決した。これに対してグルジア共産党政府は、この決定がアブハジア自治ソヴィエト社会主義共和国、グルジア・ソヴィエト社会主義共和国、およびソ連邦の憲法に抵触することを表明した。翌年、1991年6月9日アブハジア最高会議はグルジア人に26議席、アブハズ人28議席、その他の民族に11議席を与える新しい選挙法を制定した。また、8月30日グルジア・ソヴィエト社会主義共和国の「グルジア共和国国立銀行法」、「銀行および銀行業務法」がアブハジア国内で無効であることを宣言した。また、ソ連崩壊目前の12月29日には、最高会議幹部会で「自治共和国の領土に配備している軍人、警察要員の管轄法」を決定し、アブハジア国家防衛隊をウラジスラヴ・アルツィンバ最高会議議長の指揮下に置いた。また、同時に山地民同盟はアブハズ大隊を設立した。また、1992年に入ってから、3月5日、KGB、国有財産および私有化国家委員会、資源国家委員会を最高会議議長の管轄下に置いた(8)。憲法自体の整合性はアブハジアの述べる通りであろう。ソ連が消滅した以上、ソ連憲法に準拠したグルジアの1978年憲法廃棄自体も当然の帰結であるからである。しかし、アブハジアの脱グルジア化はソ連邦崩壊後、着々と進められていた。また、1925年憲法自体、ソ連邦やザカフカース連邦の存在を前提とする憲法である。アブハジアの公用語をロシア語とし、プロレタリアートの独裁を規定する古証文がとり出されたのは、そこには、アブハジアはグルジアの一部であるとは書かれていないからだけであろう。ソ連が崩壊し、連邦は構成共和国を支配し、連邦構成共和国の枠組みを通して、自治共和国を支配するという、憲法の組立が崩壊し

たので、アブハジアを独立の共和国とする古い憲法が残り、その結果、法律上、アブハジアが独立したという議論は法律的虚構であろう。

グルジアの憲法について短い報告を記したが、アブハジア紛争を法律的側面から見ると、国籍の問題が抜け落ちていることに気がつく。紛争前のアブハジア人口の50パーセント弱がグルジア人、20パーセント弱がアブハズ人である。従って、民主的方法によっては、アルツィンバの要求は何一つ実現しなかったはずである。65名の人民代議員の内、アブハズ人に28議席、グルジア人に26議席を与える不平等選挙法によって、初めて最高会議での独立宣言が可能となった。ほとんど全てのグルジア人がアブハジアの国外に避難したいま、1996年秋の選挙では、グルジア人議員は30人中わずか1名である。法律的にグルジア人を排除する国籍法は人口の約30パーセントを占めていたロシア人とアルメニア人等をも敵にすることになるであろう。そのような代議制度をもつ国家が、国際的に承認を受けたり、国境の不変更を保証されることもないだろう。国籍法の制定は現状では不可能というよりは、無意味である。

結 論

1992年のアブハジアの独立宣言すなわち1925年憲法採用は、ソ連崩壊とグルジア共和国憲法採択の後である。比較するとナゴルノ・カラバフ自治州の独立は、1991年の8月事件、アゼルバイジャンの独立宣言の後である。アゼルバイジャン共和国のナゴルノ・カラバフの独立では、それ以前にアゼルバイジャン議会がナゴルノ・カラバフの自治州としての権利を廃止したので、州は解体されて、個々の郡に分解されていた。また、先だって直轄統治を行っていたソ連政府がクーデターによって弱体化し、調停者としての存在感が薄くなる状態で行われた。独立は目的であるよりは、手段あるいは経過処置であると考えられる。アブハジアではどのような形態であろうとグルジアからの独立が、70年間の運動の目標であった。その内容は未定ではあっても、必ずしもソ連の保護をあてにするというものではなかった。カフカース民族連盟の共通の目標と戦時下の協力関係にもかかわらず、チェチェンの故ジョハル・ドゥダエフ大統領とアブハジアのアルツィンバ最高会議議長の求めるものは、非常に異なることになる。チェチェンは反ロシアであるが、アブハジアでは決定的に親ロシアである。目下、チェチェンが事実上ロシア

から独立しているように、アブハジアが事実上グルジアから独立している現状が、アルツィンバの求めるところであったかも知れない。もしそうであれば、アルツィンバはそもそもシェヴァルツェと協議する意図はなく、戦争で決着をつけるつもりであったということになる。アブハジア、グルジア戦争の開始についてロシア連邦の科学アカデミー所属「ロシア民族学人類学研究所民族間関係センター」スヴェトラナ・チェルヴォンナヤの見解は次の様である。「もし、アブハジアが突然の圧迫の犠牲者であるのであれば、アルツィンバの宣伝家達の主張のように、（グルジアが、自ら、自分の国土の一部に対して侵略を行うことは、実際不可能であるという議論からは、離れよう）、アブハジアの指導部によって採られた行動は、全く違ったものであるというのにはあり得ることである。そのような場合には、侵略者に対抗して動員された軍隊と志願兵部隊は前線に送られるはずである。道路沿いや集落に部隊を展開してグルジア人住民を脅かしたり、本物の戦争を布告することではないはずである。彼らが見つけたグルジア人は誰であろうと脅迫し、事実、入念な民族浄化を開始したのである」（9）。現在アブハジアの地位は、法的には未定である。ロシア連邦が、アブハジアを構成共和国として、編入する展望は非常に低い。独立が国際的に承認される見込みもない。経済的にも困難を抱えている。グルジア側はアブハジアをグルジア国家に統合し、グルジア人難民の帰還を望んでいる。ロシアへの鉄道と道路の交通再開も必要である。しかし、残念ながら、グルジアとアブハジア統合の計画は未完である。アブハズ人の歴史家スタニスラヴ・ラコバは、次の様に述べる。「もし、アブハジアに対してグルジアが武力的圧力を加えた1992年8月14日の前に、アブハジア人とアブハジアの議会がグルジアと連邦的關係を持つ望みを表していたら、またこの草案がアブハジア側のイニシャティブで、戦争の前に表明されていたら、今、残虐と流血の後、せいぜいグルジアとの連合について話し合うだけで済んだ。しかし、どちらの側にもこれを支持する人々は僅かだった」（10）。ただし、戦争前にアルツィンバがグルジアとの対等の合同を拒否したことはなかったし、1978年憲法廃棄から、開戦までの間に、彼に目標の重大な変更があったとは思えない。

この短い文章で、考えることのできなかつたいくつかの事項がある。一つは、なぜ、アブハジア人はグルジア人がきらいかという単純なことである。彼らはグルジア人が意識的に、モスクワの政策に関係なく（或いは、アブハジア人はスタ

ーリン、オルジョニキーツェ、ベリアの例をあげるまでもなく、モスクワとはグルジア人であると感じるのかもしれないが)、アブハジア語を圧迫し、グルジア人を大量に移民させ、アブハズ人を民族的に、物理的にではないにしろ、絶滅させようと計画していたと主張している。ごく最近では、イギリスの言語学者ヘウイット等が国際的発言力の弱いアブハズ人の立場の紹介を行っているが、もっと明解な状況を示さなくてはならないであろう。グルジアの作家が民族主義的な観点からの作品を発表し、国外へも紹介されているが、アブハジア側文学者の中では、国際的に主張する力を欠いているようである。アブハジアの作家の中で最も著名なファズル・イスカンドルも文学者としての責務は果たしているようは思えない。但し、彼がどれほど自分自身をアブハズ作家とみなしているかどうかは疑問である。彼の父親はイラン人である。彼は非ロシア人のソヴィエト作家であり、むしろ、グルジア人の父、アルメニア人の母を持ったブラト・オクジャヴァなどと同じく、非ロシア人のロシア作家という歴史の重荷を背負って歩きつつあるのかもしれない。

第二に、CIS全体のイデオロギー地図の中でのアブハジア・グルジア紛争の位置づけについてである。スヴェトァナ・チェルヴォンナヤは、アルツィンバの側近には、ソ連の復活をもくろむロシアの政治勢力と結びついている者が多く、公然と、ゴルバチョフ、ヤコヴレフ、エリツィン、シェヴァルツァツェの打倒を唱えているという(11)。しかし、アルツィンバと彼の盟友故ドゥダエフは、民族独立派であると同時にソ連復活派でもある。故ガムサフルディアと故ドゥダエフはまた盟友であった。するとアルツィンバと故ガムサフルディアとの関係はどのようなものであったのであろうか。少なくとも、ガムサフルディアの時代には、アブハズ人とグルジア人の内戦はおこらなかったのだ。アブハジア救援には、クバンや遠くドンのコサックが駆けつけたが、当時彼らの間ではルツコイの人氣が高かった。しかし、ルツコイはチェチェンの武力制圧を主張していた。ゴルバチョフはソ連復活に賛成であろうし、エリツィンといえどもソ連邦自体に反対であったわけではないであろう。故ガムサフルディアもロシアの8月クーデターがグルジアの独立を危うくするとは考えなかった。恐らく、彼ら一人一人のイデオロギーの幅は非常に広く、具体的な局面では、多様な結びつきが可能で、現状はその多様性の中の一つの、また変わり得る選択であって、将来の予測は困難であると考

えられる。

- 注 -

- (1) Dale, Catharine, The Case of Abkhazia, In Lena Jonson and Clive Archer (Eds.), *Peacekeeping and the Role of Russia in Eurasia*, Oxford, 1966, pp. 121-138; John, F.R. Wright, Suzanne Goldenberg, Richard Schfield, *Transcaucasian Bondaries*, London, 1996; Akademija Nauk Gruzii, Tsentrpo issledovani ju Mezhnatsional'nykh Otnoshenii, *Istoricheskije i Politiko-pravovyje Aspekty Konflikta v Abkhazii*, Tbilisi, 1994; Svetlana Chervonnaya, *Conflict in the Caucasus—Georgia. Abkhazia and the Russian Shadow*, Frome and London, 1994; A. Menteshvili, *Iz Istorii Vzaimootnoshenij Gruzjnskogo. Abkhazskogo i Osetinskogo Narodov*, Tbilisi, 1990; *Gruzinskaja Entsiklopedija, Gruzinskaja SSR*, Tbilisi, 1981; *Očerki Istorii Abkhazskoj ASSR*, ch. 1, Sukhumi, 1960; Antelava, I. G., *Očerki poistorii Abkhazii XVII—XVIII vekov*, Sukhumi, 1951
- (2) Akademija Nauk Gruzii, op. cit. pp. 30-42; Chervonnaya, op. cit. 147-158
- (3) *Konstitusija (Osnovoj zakon) Gruzinskoj Sovetskoj Sotsialisticheskaj Respubliki*, Tbilisi, 1990
- (4) Djaparidze, D. (Ed.), *Democratic Republic of Georgia, 1918—1921*. Three historic documents, Tbilisi, 1991, p. 126
- (5) Akademija Nauk, op. cit., 48
- (6) Lakoba, Stanislav, Abkhazia is Abkhazia, *Central Asian Survey*, vol. 14, No. 1, 1995, p. 100
- (7) Appendix to Documents from the KGB archive in Sukhum. Abkhazia in the Stalin years, *Central Asian Survey*, vol. 15, nos. 2, 1996. p. 283
- (8) Akademija Nauk Gruzii, op. cit., ctr. 36-38
- (9) Chervonnaja, op. cit., p., 124
- (10) Lakoba, op. cit., p. 102
- (11) Chervonnaja, op. cit., p. 83

初出 『旧ソ連の地域別研究』平成9年3月、日本国際問題研究所

5 アジャリアのムスリム・グルジア人

はじめに

共産主義イデオロギーの権威の失墜はソ連の各地にそれに替わる様々な新しい価値観を生んだ。グルジアではソ連崩壊を待たず1989年4月のトビリシ事件以降、人心はソ連邦、ゴルバチョフ、共産党から離れ始め、民族主義や宗教にアイデンティティーを求める人々が増加した。1990年の共和国最高会議選挙で共産党が敗北すると、共産主義青年同盟もキリスト教青年同盟に改組された。このような思潮は旧ソ連全体に共通のものであって、必ずしもグルジア特有の現象ではなかったが、この国のロシア（ウラル・ヴォルガと北コーカサスを除く）やアルメニア（1989年に、ほとんどのムスリム住民は自ら退去するか暴力的に追放された）とは違った事情、すなわち、グルジア国内のグルジア人の約10%は文化的にイスラーム教の影響にあった人々の子孫であることは、ほとんど意識されることがなかった。これらのグルジア人の大部分は黒海に面したアジャリア自治共和国の住民である。ポスト・ベレストロイカにおける諸共和国の国民統合運動の状況と比較するとグルジアは多くの非常に込み入った問題を抱えている。ここではアジャリアのイスラーム教の歴史と現状について概略を述べたい。

1. アジャリア地方

アジャリア自治共和国は、黒海の南東岸、グルジア本部とトルコに挟まれる面積3,000 弱、日本の富山県と同程度の広さの山がちの地域である。人口は1989年国勢調査では、392,432人、山形県酒田市と姉妹都市協定を結んでいる首都バトゥーミは人口13万7千人である。1921年7月16日以来、グルジアを構成する自治共和国となり、グルジアのソ連からの独立後も自治権を持ったまま今日に至っている。コブレティ、シュアヘヴィ、ヘルバチャウリ、フロの5郡とバトゥーミ、コブレティ2都市からなる。

民族別人口構成は以下の表の通りである（Mgeladze, N.V., Azhartsy i Ingiloi

tsy: Etnograficheskie gruppy gruzinskogo naroda (Kratkij istroiko-etnograficheskiy ocherk, Rasy i Narody, T.22, Moskva, 1992, ctr.205)。

民族	人(人)	同百分比(%)
グルジア人	324,813	82.77
ロシア人	30,042	7.66
アルメニア人	15,849	4.04
ギリシャ人	7,396	1.89
ウクライナ人	5,943	1.51
アブハズ人	1,636	0.42
アゼルバイジャン人	1,077	0.27
オセット人	815	0.21
計	392,432	

この表で明らかなことは、アジャリア自治共和国という国名にもかかわらず、アジャリアには、統計上アジャリア(より適切には、アジャル)人という民族は存在せず、全人口の80%以上をグルジア人が占めていることである。つまり公式にはアジャリアがグルジア人の自治共和国であるのは「アジャリアのグルジア人によって自治を構成する根拠は、我が国の他の自治共和国のような民族的指標からでなくはなく、この地域の歴史的過去とそれに起因する社会経済、政治的要素による」(Gruzinskaja sovetskaja Entsiklopedija, Gruzinskaja SSR, Tb., 1981, str.340)のであった。

アジャル人(或いはアジャリア人)とは、単にアジャリアのグルジア人を称するに過ぎない。彼らの言葉はグルジア語の、トピリスィの方言と近い関係にある。全く何の自治権も持っていない西グルジアのサメグレロ(メグレリア)やスヴァネティ(スヴァネティア)の言語(メグレル語、スヴァン語)が、グルジア語とは同系であるが、相互に理解不可能の別個の言語であるのとは対照的である。

次に、上記の諸民族の母語使用率、および都市居住率は、1979年の調査の場合、以下の表のようになる（Goskomstat SSSR, Itogi Vsjesojuznoj Perepisi Nasele nija 1979 goda, T.4, Hatsional'nyj Sostav Naselenija SSSR, Ch.1, K.1, 1989, str.25）。なお、この10年間で、ユダヤ人がイスラエル移住等で抜け、替わってオセッ人が入っている。

民族	人口	母語使用者数	同百分比	都市居住者数	同百分比
グルジア人	283,872	282,025	99.35	96,813	34.10
ロシア人	34,544	34,478	99.81	31,236	90.42
アルメニア人	16,101	13,066	81.16	15,460	96.02
ギリシャ人	7,072	5,908	83.54	3,743	52.93
ウクライナ人	5,402	2,970	54.98	4,880	90.03
アブハズ人	1,508	884	58.62	675	44.76
ユダヤ人	996	112	11.24	974	97.60
アセ'ルハ'イ'ツ'ソ人	994	669	67.30	697	70.12
計	354,224	342,174	96.60	157,621	44.50

この表で注目すべきことは、都市居住率が民族ごとに極端に異なっていることである。8位までの民族中、グルジア人、アブハズ人は極端に低い都市居住率を占め、ロシア人、ウクライナ人、ユダヤ人、アルメニア人は90%以上が都市に住んでいる。これは、これらの諸民族の来歴を示すものである。著者の手元には郡別の人口統計がないが、明らかに人口分布は黒海岸に多く、内陸の山地には少ない。国土の中央をほぼ東から西にチョロフ川が流れ、この流域にタバコ、葡萄、穀類栽培が行なわれるが、山がちのフロ、シュアヘヴィ、ケダでは、この他に牧畜が主たる産業である。海沿いのコブレティとヘルバチャウリでは、茶や柑橘類など

の重要な柑橘類の栽培が行われている。工業はバトゥーミとコブレティ両市以外にはほとんどない。従って、人口の大部分は海岸部とチョロフ川流域に集中している。ロシア人やその他のマイノリティーは、バトゥーミとコブレティに集中している。その結果、エスニシティと産業は連関することになる。旧共産党政権に対する態度、古い伝統とのつながりの両方が、アジャリアのグルジア人が農村常住者であることと強い関係がある。

2.アジャリアのイスラム化

アジャリアの自治権を説明する公認の見解では、アジャリアの信仰について明言されないが、アジャリアが自治共和国とされた唯一の理由は、この自治共和国が作られた時、住民の大多数がイスラーム教徒であったからである。ユーゴスラヴィアのボスニア＝ヘルツェゴヴィナ共和国、中国の回族自治区と同様の理由である。アジャリアは、15世紀半ばまで、今日のトルコ北東部のサムツヘ地方（グルジアでは西南グルジアと呼ばれている）のアタベク（君主）ジャケリ家の領地であったが、アタベク、クワルクワレII世は、グルジア下ギオルギVII世との戦争に際して、グリアの領主グリエリ公にこれを譲渡、16世紀初頭にはアタベグ・ムゼチャブクの時ジャケリ領、1535年には再びグリエリ領となった。16世紀70年代にはオスマン帝国に併合され、上、下アジャリアの2サンジャク（旗。モンゴリアの「旗」と同じく、行政区画）が置かれ、旧サムツヘ・アタベグ領であるチルディル・ヴィラーイェトに編入された。1582年アタベグ・マヌチャルII世の反乱では、アタベグを支持したアジャリアの住民はオスマン軍の要塞を攻撃、1587年に再侵入したオスマン兵は、1609年グリエリ公マミヤII世によって撃退された。しかし、1614年グリエリ公は敗戦、撤退し、アジャリアのオスマン化が進行した。同世紀末には、領主層がイスラム化し、キリスト教は部分的には18世紀末まで残ったが、以後残ったキリスト教徒住民は移住した。オスマン支配は長い間名目的で、住民は納税と軍事奉仕を拒否していた。1737年アハルツィへのパシャは、かろうじて彼らを弾圧することができた。18世紀後半、現地支配層はオスマン政府に仕え、ベクやアガの称号を与えられるようになった。80年代にアブドゥル・ベク・ヒムシアシュヴィリは、上アジャリアに支配権を確立、1803年アハルツィヘ

のパシャに就任したアブドゥルの息子セリムは、ロシアの援助により、かつてのサムツヘ・アタベグ領にグルジア人のムスリム国家を樹立しようとした。1928-29年の露土戦争に先だって、セリムの後継者アフマドはアジャリアのロシア併合を画策したが、失敗の後は却って反ロシア政策に転じ、スルタンも彼にアハルツィへのパシャ職を約束した。アフマドはオステンサケン將軍のロシア軍アジャリア派遣部隊を撃破、この結果エディルネ条約（1829）で、アジャリアはオスマン領に残った。しかし、1840年上アジャリアでセリムの息子キョル・フセイン・ベクが反乱を開始し、エジプト王（ヘディープ）ムハンマド・アリーと同盟した。1843年、反乱は両アジャリアに広がり、参加者数5千人に達した。反乱側は減税と徴兵免除を求め、要求が容れられなければ、キリスト教に復帰して、ロシアに併合される事を主張した。反乱は、1846年にはカルス、トラブゾン、エルゼルムの部隊によって最終的に鎮圧された。アジャリアは、トレブゾン・パシャリク（1944）、および新設のラズィスタン・サンジャク（1851年）に編入される。オスマン政府の直轄統治で、イスラム化政策が強力に勧められたが、古いグルジア的習慣は遺された。住民の名前はほとんどトルコ語化されたが、「シュヴィリ」とか「ツェ」のつくグルジア的姓は遺された。グルジア語といくつかの古いキリスト教的習慣も遺された。また、前キリスト教的な氏族的組織も特に東部山村で遺された（Mg eladze, op. cit., str. 203）。1877-78年の露土戦争の結果、アジャリアはロシアバトゥーミ地方に編入された。戦争中、ロシアに協力的態度をとっていた上アジャリアの支配者シェリフ・ベクは、その功績によって侍従武官長を拜命し、キリスト教に改宗した。一方では、下アジャリアの支配者オスマン・パシャ・タウドギリツェのようにオスマン領に移住するものも少なくなかった（Gruzinskaja SSR, op. cit., str. 340）。

ロシア支配下、バトゥーミは黒海に面した港湾、特にバクー石油の積み出し港として繁栄したが、アジャリアのムスリムはロシア植民地としてのグルジアに同化することがなかった。イタリア人の旅行者ヴィラリは、1905年のアジャリアの情勢について次のように述べている。「一層の不安要素はトルコ人とイスラム教徒のアジャル人であった。後者は、グルジア人の種族に属するが、ポマック人（筆者註—ブルガリアのイスラム教徒）やその他のイスラム帰化者と同様にひときわ狂信的であって、非常にグルジア人を嫌っていた（Villari, Luizi. Fire and

Sword of the Caucasus, London, 1906, p. 57) 」。

第一次大戦の開戦にあたってオスマン政府はコーカサスの独立派グループに接触を計っていた。1914年11月オスマン軍第3軍の分遣隊がバトゥーミ周辺に達すると、グルジア人ムスリムはロシアに対する反乱を起こした。しかし、同年サリカミシュの戦闘で無謀な作戦にでたオスマン軍が敗退すると、ロシア軍は前進に転じ、リアホフ將軍の掃討作戦の結果、5万2千人のチョロヒ川流域の住民の内僅か7千人が遺されたという (Tadeus Swietochowski, Russian Azerbaijan, 1905-1920, Cambridge, 1985, pp. 78-79) 。

1918年秋にトルコ、ドイツ軍の撤退に替わって、イギリス軍がバトゥーミを占領した。当時グルジアに民族政権を樹立したメンシェヴィキはバトゥーミに政治組織「メジュリス」を組織したが、この組織では2勢力が権力を争った。雑誌『グルジアのムスリム (Samusulimano Sakartovlo)』(1919-21年刊行。ヒムシアシユヴィリ、メメド・アバシツェ等が中心。)は自治区としてグルジアに併合されることを求め、一方『民族の声 (Sedaj Milet)』派は親トルコの主張を展開した。イギリス占領軍は1920年7月バトゥーミより撤退、アジャリアをトビリシのグルジア政府に引き渡した。グルジアのクヴィニタツェ將軍はバトゥーム接收後直ちに「何人たりとも我が軍に抵抗する者は、叛徒とみなされる。その者は射殺され、その者および両親兄弟の家財は没収され、国庫に引き渡される。彼の家族はバトゥーミ地方から追放される (Kazemzadeh, Firuz, The Struggle for Transcaucasia, New York, 1981, p. 202) 」ことを宣言した。

翌年2月赤軍は突然グルジアに侵攻を開始、メンシェヴィキ政権はトビリシを捨て、バトゥーミに撤退した。グルジア政府はトルコ軍の進駐を承認し、赤軍を牽制しようとしたが、レーニンとケマル・アタチュルクは友好条約を結び、グルジアのバトゥーミ領有を認めた。この時長くロシア領であったカルスとアルダハンがトルコ領になった。

20年代には、中央アジアと同じく、アジャリアでも女性が顔を隠すベール、チャドルを廃止するキャンペーンが行われ、これに対する激しい反対も生じた。

1925年には農村部でのチャドルだけでなく、婦人の生活習慣全般を改革しようというキャンペーンが行われた。1928年7月9日、フロ郡の共産党第3回大会でチャドル全廃が決議され、これを受けた同月20日の集会で地元のホズレヴァニツェ女

史を初め150人の女性がチャドルを取ったが、この内生きて帰宅できたのは7名だけであった (Volkova, N.G., G.N. Dzhavakhishvili. *Bytovaja kul'tura Gruzii XIX-XX vekakh*, Tbilisi, 1982, str., 217)。ソヴィエト政府に対する積極的反抗も行われ、赤軍の入城後しばらくの間、局地的銃撃戦が続いたという。30-40年代の反宗教運動のもとで、ただ一つを残して、アジャリア中のモスクは閉鎖され、宗教関係者は弾圧された (Gordenberg, Suzanne, *Pride of Small Nations*, London, 1944, p. 39)。

3. ペレストロイカおよびポストペレストロイカのアジャリア

「全ソ連を通じて、アジャリアは唯一、民族ではなく、宗教を基盤に設けられた自治的地域であった。さらに、アジャリアを特例とした理由は、大戦期に住民の90%が、ムスリム・グルジア人であった」 (Gordenberg, op. cit., p. 38)。しかし、グルジアにおいて、これが不安定要素であるというゴールデンベルグの説には留保条件をつけなくてはならない。スターリン時代に世俗化あるいは無神論化政策が完全に成功していたとすると、アジャリアの中央に対する立場はアブハジアや南オセチアとは異なり、民族的少数派が多数派に対するものでなく、カヘチア地方やスヴァネチア地方と同じく中央と地方との関係になるであろう。サニーがスターリン時代に「グルジアはグルジア人の特権が保護される地域となった。彼らは多大の社会的見返り、国家に置く指導的地位、文化的計画の最大の補助金を得た。一方アルメニア人、アブハズ人、オセッット人、アジャル人、クルド人、ユダヤ人は国家予算の分配にかなりの不利を被っていた」と述べ、アジャル人の立場を他の少数民族と対比するのも、正当であるとは思えない (Suny, Ronald Grogor, *The Making of the Georgian Nation*, London, p. 290)。

1990年の共和国最高会議で、独立派ズヴィアド・ガムサフルディアの率いる円卓会議が多数派を占め、翌年の大統領選挙でも、共産党のジェマル・ミケラツェ候補 (名前から見て、アジャル人であると考えられる) を破って彼が勝利すると、アジャリアには共産党系の政府が残った。ガムサフルディアはアブハジアは民族的自治共和国としての実質があるが、住民の圧倒的多数がグルジア人であるアジャリアには自治の名分がないとも主張した。バトゥーミにも円卓会議派の支部の

活動が盛んになった。独立派と共産党派の対立が懸念されたが、結局ガムサフルディアはアジャリア問題に手を付けぬままに失脚した。

共産主義的理想がなくなり、宗教や民族的帰属にアイデンティティーを認める時代に、アジャリアのムスリムの子孫はどのような立場にあるのであろうか。ハンターの評価 (Hunter, Sh. T., *The Transcaucasus in Transition-Nation Building and Conflicy*, Washington D. C., 1994, p. 112) は、アジャリアの住民はロシア人を除いて全てムスリムであり、親トルコ派の力が強くてアジャル人の大部分がトルコ併合を望んでおり、グルジア人は彼らの祖国に対する忠誠を疑っている。40人から60人の若者がイスラーム教育を受けるためにトルコに留学し、バトゥーミにはトルコの資金で高さ45mのモスクを建立された。また、自治共和国最高会議議長のアスラン・アバシツェはパン・トルコ主義者である等というものである。

イスラーム主義とパン・トルコ主義は基本的には別物であり、メスヘティ・トルコ人やトルコ国内のムスリム・グルジア人とは異なって、アジャリアの住民は自分達はトルコ人ではなくグルジア人であることははっきりと自覚していると思われるが、この様な評判が根強いことが、アバシツェ最高会議議長が度々グルジアに対する忠誠を表明しなければならない理由である。彼は1992年にモスクワの中立系新聞『独立新聞』のインタビューに答えて、「アジャリアの状況を南オセチアやアブハジアと較べてはなりません。我々の共和国は行政的区画です。様々な民族が住んでいますが、皆アジャリヤ国民です。つまるところ、グルジア国民です。我々にはけっしてグルジアに対する領土的野心はありませんし、これからも無いでしょう」。また、アジャリアはトルコ併合を望んでいるかという質問に対して、「アジャリアはグルジアの歴史的領土です。歴史上アジャリアが祖国グルジアの問題の種になったことはありません。我々の共和国がトルコの一部になることを望んでいるという情報は何の根拠もありません。それはアバシツェが、人々とともに火星に旅だって移住することを今日決心したという程度の真実です。我々はトルコと友好関係を維持しておりますが、それはアジャリアがトルコの一部になりたいなどということの意味しません」と答えている (Nattela Zyl'fikarova, *Menja Mozhno Bybrat' iz VS tol'ko silok*, *Nezavisimaja Gazeta*, 1992, 6, 27)。また翌年も、トピリスィの政府系新聞『自由グルジア』誌に同様なメッセージを発表している (Tengiz Pachkorija, *Adzharija vseгда bydet chact'ju G*

ruzii, Nezavisimaja Gazeta, 1993, 10, 6)。

ハンターとは全く異なった報告もなされている。ムゲラツェは今日アジャリアにキリスト教回帰現象が生じていて、十分に広範な性格を持っている。その結果、イスラム教やイスラム教的な名前は、基本的に古い世代の間に残っているだけであり、中年の世代は宗教には無関心で、名前もグルジア人やソ連に共通のもので、若い人々の大部分には十字を切る習慣があり、ほとんど例外なく伝統的なグルジア的名前かキリスト教に共通なものを持っていると述べている (Mgeladze, N.V., op., sit., ctr. 204)。

アスラン・アバシツェは大統領選挙においてはシェヴァルツェを支持した。1995年11月のグルジア総選挙では、自身「再生同盟」を率いて、第一次投票得票数の7%を確保した。これは、結果的にアジャリアの票を独占するものであるが、投票の強制もあったという非難もあった (Covcas Bulletin, 30 November, 1995, vol. 1.5, nos. 22, p. 7)。

結 語

小論はグルジア共和国アジャリア自治共和国が、宗教的起源の自治権を持つに至った歴史的経緯を俯瞰し、あわせてイスラム化の現状について少し言及したものである。ここで、ポスト・ペレストロイカのアジャリアのイスラムの動向に二つの相反する見方があることが明らかになった。キリスト教志向およびイスラム回帰である。どちらも、ファンダメンタリズム的傾向は報告されていない。住民から圧倒的に支持を受けているアスラン・アバシツェ自身は、グルジア帰属と世俗主義を表明している。しかし、彼は旧共産党ノームクラトゥーラ出身の人々と同じく、恐らく現実主義的政治家であって、国民の雰囲気に従うであろう。あるいは、文化的差異を利用して、国民を扇動して政治的既得権を守ろうとするかもしれない。

アジャリアには少数のローマ・カトリック教徒がおり、大多数の文化的帰属の点でのムスリム、少数の正教徒と合わせて、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナとよく似た構造になっている。

これまでのところアジャリアには、「ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ紛争」はな

いが、これからも起こらないためには何が必要であろうか。現地調査も含めた研究に待たねばならない。

初出 『旧ソ連の地域別研究-ウクライナ・ザカフカース・モルドヴァ・バルト-』平成8年3月、日本国際問題研究所

6 サインギロのグルジア人

はじめに

かつてアンドレイ・サハロフ博士はグルジアを「小さな帝国」と呼んだことがあった。この不名誉な称号は、ロシアと違ってグルジアには征服によって併合された地域はないという、グルジアからの抗議によって後に撤回されたが、グルジアが多くのかつ多レベルの民族問題を抱えている事実には、変わりない。しかし、グルジアは国内に抱える非グルジア人をどのような形でグルジア国家に統合するかという問題の他に、グルジア国外のグルジア人をグルジア国家に統合する問題を抱えている。ここに述べるサインギロ・グルジア人の問題は、後者に属する課題である。

1. サインギロ

グルジア語で言うサインギロ (Saingilo) は、ロシア革命以前はザカタラと呼ばれた地域で、現在アゼルバイジャン共和国北西部のザカタラ、カヒ、およびベラカニの三郡からなっていて、北はロシア連邦、西グルジアに接している。ザカタラ (Azerb., Zagatala) 郡は面積1,348km、人口79.7千人 (1979年センサス) 1市69村、カヒ (Azerb., Gakh) 郡は面積1,494km、人口43千人 (1977年推計) 1市60村、ベラカニ (Azerb., Balak'n) 郡は面積923km、人口55.6千人 (1976年推計) 1市、56村からなる。このサインギロ三郡にはアヴァルAvar人、ツァフルTsakhur人、アゼルバイジャン人と混住して、グルジア語の方言を母語として用いる人々が居住する。大部分がムスリム、一部はキリスト教徒である。カヒではキリスト教、ベラカン、ザカタラでは、ムスリムが多い (Dzhangidze, s.5)。これらのグルジア人は、グルジア語でインギロ人、アゼルバイジャン語ではイェンゲロイ (Jengel oj) と呼ばれるが、サインギロは、グルジア語でインギロ人の国を意味する。ムゲラツェによると、サインギロ人の人口、自己認識 (1989年, Mgeladze, s.205) は以下のとおりである。

グルジア人	3,555人	(内、母語使用者 3,327人)
インギロ人	192人	
アゼルバイジャン人	36人	

三郡の内でも大部分が、イェンギアン (Jengian)、タスマリ (Tasmali)、ゼガム (Zegam)、カラガン (Karagan)、アリベグル (Alibeglu)、コトゥクル (Kotuklu)、メシェバシュ (Meshbash)、カフ・インギロイ (Kakh-Ingiloj) 等の農村部に居住していると言われる。

2. サインギロのイスラーム化

インギロ人のキリスト教化は1822年には始まり、1880年代までにはかなり進んだ (Sbornik svedenij o Kavkazskikh gortsev, vyp.4, s.20) が、この改宗はロシア併合後にムスリムから正教に改宗した二次改宗である。このサインギロは、10-11世紀に現在のグルジアとアゼルバイジャン国境に跨って存在したヘレティ (Hereti) 王国の故地であると考えられる。テンギズ・パプアシュヴィリ『ラン人とカヒ人の王国 (8-11世紀)』(トビリシ、1982年) では、8世紀50-60年代に東グルジアのカヘティ (Kakheti) 地方にあったキリスト教徒のカヘティ王国の領土は、クヘティ (Kukheti)、ヘレティ、ツヘティ (Tskheti)、シャッキ Shakki (シェッキ Shekki) に及んだが、10世紀にヘレティが分離してヘレティ王国として独立した。しかし11世紀始めには、カヘティに再統合された。独立期のヘレティ王の称号は「ラン人の王」であり、11世紀の統合期にはカヘティ王はそれを併せて「カヒ人とラン人の王」を称した。1104年統一グルジア王国 (サカルトヴェロが正式国名) が成立すると、「ラン人」の王はグルジア王の称号に加えられる。ここでは非グルジア系、ダゲスタン系の民族であるヘレティ人は、ラン人すなわちアルバニア人と呼ばれてカヘティア王国の一部とみなされ、ヘレティの東にあるシェッキもヘレティ地方の一部としてカヘティ王国、後に統一グルジア王国に統合されているのである。グルジアの伝道団によってキリスト教化されたヘレティ人は11-12世紀にグルジア人と同化したと言われるが、中世グルジア王国の衰退

と解体後、イランからの圧迫によりサインギロ地方のイスラーム化が進行した。16世紀にはグルジア全体がサファヴィー朝とオスマン帝国の脅威を前にするが、17世紀初めダゲスタン南部のアヴァル人は、サファヴィー朝のシャーフ・アッバースとともにインギロ人を征服した。サインギロを征服したダゲスタン人は、征服地に村落を基礎にした共同体を形成した。この共同体はザカタラ郡の村ジャル（Jar）とベラカンの名を取って、ジャル・ベラカン自由共同体（Azerb., Car-Balak'n Camaatlygy; rus., Dzharo-Belokanskie vol'nye obshchestva）と呼ばれる。各共同体は、ジャロ（Car, Jari）、ベラカン（Balak'n, Belakani）、カテヒ（Katekh, Katekhi）、タラ（Tala）、ムハヒ（Mukhakh, Mukhakhi）、キニヒ（Kinikh, Kinikhi）などのアヴァル人、ツァフリ（Tsakhuri）、エリス（Elisu）、スヴァギリ（Suvagili）、カラドゥラキ（Qaradulaki）等のツァフルの村落とそれぞれに従属するイェンギロ、ムガル（モンゴル）人の村落から構成されていた。

18世紀、ダゲスタンの領主は絶え間なくグルジアに侵入したが、ジャロ・ベラカンのダゲスタン人も行動を共にした。カルトリ王ヴァフタンギ（Vakhtangi）六世の時、ロシアのピョートル大帝の軍隊がギャンジェ（Gyanje、旧キロヴァカン Kirovakan、エルザベトポリ Elizavetpol'）に接近、イラン側のタフマスブ（Tahmasbi）王子に組するカヘティア王コンスタンティネ Konstantine（ムハンマド・クリー・ハーン Muhammad Quli Khan）は、ジャロからの援軍を得てカルトリ軍に応戦し、1722-3年の冬トピリスィ近くで戦闘が行われた。またカルトリ王ティムラズ Teimrazi がイラン・アフシャール朝のナーデルシャーに従ってアフガニスタンのカンダハールへ遠征中にも、ズィモ・カルトリ地方の領主シャンシェ（Shan she）は王に対して反乱を起こし、グルジア国内にジャロの「レズギン」人を引き入れた。1839年ティムラズは帰国し、ナーディルシャーの息子イブラヒムと共にレズギン人掃討に従事したが、イブラヒムは作戦中死亡した。

1785年、カルトリ・カヘティアのイラクリ Brakre 王は、オスマン軍と呼応したアヴァルのオマル・ハンとジャリヤボルチャルロで戦った。グルジアがロシアに併合された後もこの地方はダゲスタンの独立勢力と呼応し、イランと結んでロシアと戦おうとする人々の根拠地となった。1803年には、イラン側についたグルジアの王子アレクサンドルがサインギロに逃げ込んだ為、ロシアはついにこの地方を征服し、ここにジャロ・ベラカン・アヤラットを置いた。サインギロのダゲス

タン人は、1830年にはダゲスタンでロシアに対するジハードをおこなっていたハムザット・ベグを支持して反乱に立ち上がったが、鎮圧された。1845年には、エリサー（Ilisu）のスルタン領と併せて、ジャロ・ベラカン軍事管区が設置された。これは1860年ザカタラ軍事管区と改称された。1897年の人口は、79千人であった。

3. 領土帰属過程

ロシア帝国の解体後、ザカタラ地方はこの様な複雑な歴史的事情から、グルジア、アゼルバイジャン、ダゲスタン三国の係争の地になった。1918年には、アゼルバイジャンは、全土をバクー、ギャンジェ、カラバグ、ザカタルの四州に編成した（Sowietochowski, p.147, D. Z. T., pp.229-36）。

カーゼムザーデ（Kazemzadeh, p.226）はザカフカース三カ国の解体後、グルジア、アゼルバイジャンの間にザカタラの帰属を巡る紛争が生じたが、この問題は速やかに解決されたと述べる。しかし、他ならぬそうを述べた書物に、1920年、グルジア共和国はソヴィエト・ロシアと条約を結んだが（5月7日）、第四条で、グルジアとロシアの国境を決定し、グルジアはティフリス、クタイスイ両県とバトゥーミ、ザカタラの両管区を得た。この条約の付帯条項の第一条は、グルジア・アゼルバイジャン両国間に紛争がある事を認め、ザカタラ問題解決の為ロシア人を議長とした両国の合同委員会の設置を決定していると述べている（*ibid.*, p.299）。ザカタラを実効支配していたアゼルバイジャン共和国は、アゼルバイジャンの歩兵師団第二（ザカタラ）連隊を配備していた。1920年バクーを占領した赤軍もただちにザカタラ占領を計画し、この作戦を第十一軍第二騎兵隊に振り充てた（*Internatsioal'naja Pomoshch'*, s.42, s.87）。1920年8月3日付のアゼルバイジャン軍事革命委員の命令では、ザカタラとヌハ、エヴラフ街道の警備を第58狙撃兵大隊に命じている（*ibid.*, s.103）。グルジア、ロシアの条約に続いて、6月16日グルジア、アゼルバイジャン両国も友好条約を締結した。これには両国間の紛争に関する長い簡条書きがつけ加えられた。赤軍の活動に注意を払っていたグルジア政府はこの年12月にザカタラで赤軍が活動しているという報告を受けた。グルジアはアゼルバイジャンの外交人民委員に、ザカタラにおける赤軍の活動とソヴィエト当局によるザカタラ住民虐待を非難した。グルジア側は「ザカタラは

係争地であるので、この所属は将来の決定を待たなければならないが、それ故、その住民の福祉に関心を持つ権利がある事を指摘した」(Kazenzadeh, pp.309-310)。翌1921年2月、赤軍はグルジアに侵入し、ソヴィエト政権を樹立する。この結果、ザカタラはアゼルバイジャン領に留まることになった。従って、サインギロは一時グルジア領になったが、赤軍のグルジア占領後アゼルバイジャンに譲渡された(Mgeladze, s.207)とする見解も、グルジア側からの立場からするとあながち間違いとは言えないが、実行支配は行われなかった。

アゼルバイジャンにおいても、他のソヴィエト共和国同様にロシア人以外のマイノリティーに対する権利の擁護は充分なものではなかったもので、グルジアではサインギロのアゼルバイジャン帰属に対する不満が残っていた。アゼルバイジャン政府もザカタラにグルジア人が住み続けている事実を承認していたが、この事実をアゼルバイジャンのアルバニア起源説によって説明しようとした。アルバニアは北はカフカース山脈、東はカスピ海、南はアラス(アラクス)川の下流、西はグルジアに接する地域の古代の国家名である。アルバニアという国家の名前が初めて言及されたのは、紀元前331年のガウガメラにおけるアレキサンダー大王とダリウス3世の戦いに関する記述の中で、大王伝の作者アリアヌスは、アルバニア人部隊がカドゥスイ(Cadusuii)、サカエ(Sacae)の部隊と共にメディアのサトラップ、アトロパテス(Atropates)の指揮下にあったと記している。従って、この時アルバニアはアケメネス帝国のメディア州に所属していたと考えられるが、アルバニアの領域内でメディア時代のもと思われる遺跡が発見されるので、そもそもアケメネス朝以前は、メディア王国に属していたと考えられる。

歴史や歴史地理の研究も両国政府の利害や国民の感情を無視しては行われなかった。アゼルバイジャン歴史学界から見ると、グルジアのヘレティ地方はアゼルバイジャンのシェッキの一部に過ぎない。中世のシェッキはギリシャ正教化したアルバニア人の国であり、グルジア人の「ラン人とカヒ人の王国」はシェッキに他ならない。ダヴィド・ムスヘシュヴィリは『東グルジアの歴史地理より(シェッキとゴガレナ)』(トビリシ、1982年)の中で次のように述べる。ストラボンが最初に名前を挙げるゴガレナは本来イベリア(東グルジア)国領だが、紀元前2世紀にアルメニアに併合される。この地方はクラ川中流の南と東にまたがり、グルジア人の言う下カルトリのガチャニ、ガルダバニにあたり、住民グガル族は

グルジア系種族で、紀元4世紀以降はイベリア王国に帰属する。シェッキを中心とするヘレティ地方は古代アルバニアの極西地域であり、キリスト一性説のアルメニア教会とカルケドン主義のグルジア教会が双方から布教を行ったが、10世紀にはグルジア教会の勝利に帰した。11世紀にはヘレティ領の統一とグルジア語化も併せて終了した。この地方は11世紀のグルジア史料では、先に述べたように「ラン人とカヒ人の王国」、アラブ語史料では「シャツキとジュルザーン王国」と呼ばれている。12世紀のグルジアの統一と中央集権化に伴い、カヘティ、ヘレティ、シャッキにはエリスタヴィ（領侯）が置かれて14世紀に至った。一方、アゼルバイジャンのファリード・マメドヴァは『カフカース・アルバニアの政治史と歴史地理—紀元前3世紀から西暦8世紀』（バクー、1986年）において、ハプアシュヴィリがゴガレネをアルバニアに向けて拡大し、ヘレティをシェッキの方に拡大し、カンピセネ、シェッキをイベリア（東グルジア）国領に数えている事を批判している。カンピセネに関しては、ストラポンは明らかにアルバニア領としているし、シェッキは古代にはアルバニアの首都カバラがあった国家の中心部であったのであるから、両地方がグルジアの固有の領土でなかったことは明確である。しかしまた、これらの地方が中世にグルジア王権とキリスト教を通じて、グルジアに強く結び付けられていたことも事実であるというのがマメドヴァの主張である。

中世グルジアの政治的統合に注意を払い、王権とキリスト教による諸種族、諸民族の統合の過程を重視するグルジア人の研究動向に対するアゼルバイジャン学界からの批判は、ギヤスッディン・ゲイブッライェフの『アゼルバイジャンの地名—歴史的・民族学的研究』（バクー、1986年）にも見られる。これはアゼルバイジャンの地名をトルコ語系、カフカース語系、イラン語系、アルメニア語に分けてそれらの年代的、地域的分布と変遷を記述し、アゼルバイジャン民族の形成過程を示そうとするものである。同書第2章「カフカース語地名」はダゲスタン語グループのインギロ、ウディン、レズギン、シャフダグ諸語起源の地名について述べ、グルジアとの国境に近いザカタラ、カヒ、ベラカン郡に住み、グルジア語の東部方言を話し、大部分がムスリム、一部がキリスト教徒であるインギロ人は古代の文献にある「ゲル人」の子孫であると述べている。これに対して『ラン人とカヒ人の王国（8-111世紀）』の著者であるテンギズ・パプアシュヴィリは「真実は何よりも最初に」（『グルジア文学』1987年11月号所収）を著し、「ゲイブ

ツライェフの著書の中に於けるカフカース民族史、特にグルジア民族史は、必要かつ十分な説得性を持たなかった」と述べ、ゲイブツライェフが中世初期のグルジア史に関して、根本的な点で重要な過ちを犯していると批判した。さらにこれに対して、ゲイブツライェフは『アゼルバイジャン科学アカデミー紀要』（1989年第1号）で反論を述べ、インギロという名称は、パプアシュヴィリの主張するように社会的身分からでも、ザカタル地区のイエングアンという村名から来るのではなく、17世紀にそれまで「ゲロイ」という名称で知られていたグルジア人キリスト教徒がイスラーム化し、新ゲロイすなわちアゼルバイジャン語でイエニゲロイと言う名称で呼ばれるようになり、後にはムスリムだけでなく、キリスト教徒も同じくこの名で呼ばれるようになったと主張した。今日ゲロイの名は自称では用いられなくなっているが、近隣のアゼルバイジャン人、アヴァル人及びツァフル人はそれぞれ彼らを「ゲロイ（Geloj）」、「ゲロウ（Gelou）」、「ゲラヴ（Gelavu）」と呼んでいるという。また、インギロ人が全体としては古代アルバニア人の子孫であると考えるパプアシュヴィリに対して、ゲイブツライェフは更に詳細に、彼らの祖先が古代の「ゲルGel人」であり、中世グルジアの「ヘルHer人」であると主張した。また、北東アゼルバイジャンに住むダゲスタン系民族クルィズ（Kryz）人、ハプトリ（Khaputlu）人の自称が「ヘルHer」であり、しかも千年以上前、ヘルナ（Herna）という地方から来住したという伝承を持っているが、これはヘレティ地方のハラント（Haranta）、ヘルナブジュ（Hernabuj）に比定することができることを繰り返して強調している。またゲイブツライェフはパプアシュヴィリが著書『ヘレティ史の諸問題』で、ヘレティがグルジアの文化的民族的不可分の一部であり、紀元1、2世紀にはイベリア王国の領土になり、さらにヘレティの東のヌーハ（シェッキ）が五世紀にイベリア王国領に、7世紀にシェッキとさらにその東部のシルヴァンがグルジア教会区に編入されたとする説を批判している。ただしヘレティが歴史時代に入ってグルジア化されたということ事態はアゼルバイジャン、グルジアを問わず今日多くの研究者が認めることである。

4. ポストベレストロイカのサインギロ

共産主義イデオロギー崩壊後のサインギロの社会思潮について、ムゲラツェは

次の様に要約している。サイングロでは、イスラームの普及にもかかわらず、キリスト教の遺跡が各地に残り、本来キリスト教の祭典である聖ギオルギの祭「クルムホバ kurmukhoba」には、キリスト教徒かムスリムかを問わず祝われる。また教会に対する尊敬の念が残り、ムスリム人にもムスリム的名称ではなく、伝統的なグルジア名を用いる傾向があらわれた (Mgeladze, s.201-110)。ザカタラ地方はインギロ人、ダゲスタン人、アゼルバイジャン人の混住地域であることは冒頭で述べた。ベラカン郡およびザカタラ郡は、ダゲスタン系のアヴァル人が多いが、ロシアに征服されるまで、この地方の人々はアゼルバイジャン人のハン達の支配に屈しない農村共同体をつくっていた。今日に至るまで、彼らの民族的精神は高く、バクーからは不信の目でみられてきた。この地方では、アゼルバイジャンからの分離とダゲスタンへの統合を目指す「ジマフト (民族)」の運動が伝えられていたからであるが、1994年秋にはベラカン郡で警察と地方住民との間に武力衝突が起こり、武装勢力が一部の村落を掌握したと言われる。アヴァル人の活動はこれまでのところ進展は見られないが、アヴァル人の活動がサイングロ人の動向ともかかわる状況になることも有り得よう。

むすび

アゼルバイジャン共和国のインギロ人は、わずか三千五百人を数えるにすぎない小集団であるが、民族にかかわる諸問題、特に共存の問題を考察するとき重要な示唆を与えるであろう。

文献目録

- Allen, A History of the Georgian People, London, 1932
- Balakani Rajony, Azerbaican Sovet Ensiklopediası, t.1, 1976, pp.579-80
- Berdzenishvili, N., Aghmosavlet kakhētis tsarsulidan, mis tsgn; Sakartovelos Istoris Sakitkhebi, Tsgn, 3, Tbilisi, 1966
- Gax Rajony, Azerbaican Sovet Ensiklopediası, t.3, pp.101-2
- Gejbullajev, G.A., Toponimija Azerbaidzhana (Istorilo-Etnografichesko

je issledovanije), Elm, Baku, 1986, s. 80 – 82

D. Z. T., La premiere republique, Revue du Monde Musliman, 36, 1918-9, pp. 229-36

Datushvili, I. I., Materialy i kharakteristika sovremennogo sostajani ja religioznostiv Belakanskom, Zakatal'skom i Kakhskom rajonakh (AzSSR), v. Konkretnye issledovanija sovremennykh religioznykh verovanij, Moskva, 1987

Dunbadze, M., Iz Istorii vostochnoj Kakheti (Saingilo), Tbilisi, 1953

Dzhangidze, V. T., Ingiloskij dialekt v Azerbajdzhane, Tbilisi., 1974

Zagatala Rajony, Azerbaica Sovet Ensiklopedias, t. 4, pp. 281-2

Istorija Azerbajdzhana, t. 1, 1958, t. 2, 1960, Baku

International'naja pomoshch' XI armii v bor'be za pobedu sovetskoj vlasti v Azerbajdzhane, Baku, 1989

Kazemzadeh, F., The Struggle for Transcaucasia (1917-1921), Westport, 1981

北川誠一「ザカフカースにおける歴史学と政治—アルバニア問題をめぐって」『ソ連研究』第11号、1990

Mamedova, F., Politicheskaja Istorija i Istoricheskaja Geografija Kavkazskoj Albanii, Baku, 1986

Mgeladze, N. V., Adzhartsy i Ingiloitsy: Ethnograficheskie gruppy gruzinskogo naroda (Kratkij istoriko-etnograficheskij ocherk) Rasy i Narody, T. 22, Moskva, 1992

Mil'man, A. Sh., Politicheskij stroj Azerbajdzhana v XIX-nachale XX v, Baku, 1966

Muskheshvili, D. L., Iz istoricheskoj geografii vostochnoj Gruzii (Shak i i Gogarene), Tbilisi, 1982

Papuashvili, G. T., Heretis Istorii Sakithebi, Tbilisi, 1970

on zhe, Tsarstovo ranov i kakhov (XIII-XI), Tbilisi, 1980

vints, Ranta da Kakhta Samepovo (VII-XI ss.), Tbilisi, 1982

on zhe, Istina prezhdje vsego, Literaturnaja Gruzija, 1987, no. 11

vints, Tchar-Belakani (ist. narkeveri), Tbilisi, 1972

vints, Saingilo, Kartlo Sabotchta Entsiklopedia, t. 8, 1984, P. 663

vints, Tchar-Belakani, sadats, t. 11, 1987

Petrushevskij, O. P., Dzharo-Belakanskije vol'nyje obshchjestva v 1-oj
j treti XIX stolentija, Tiflis, 1934

Poserbskij, A., Ocherk Zakatal'skogo okruga, Kavkazskij Kalendar' na 1
866 g., Tiflis, 1865

Rostiashvili, P., Slovar' ingilojskogo dialekta, Tbilisi, 1987, Na gruz.
jaz.

Sowietochowski, T., Russian Azerbaijan, 1905-20, Cambridge, 1985, p. 147,

Fon-Ploto A., Priroda i ljudi Zakatalinskogo okruga, Sbornik sveden
ij o kavkazskikh grotskh, Tiflis, 1870

Chagashvili, G. Z., Saingilo (Geograficheko-istoricheskij ocherk), Tbil
isi, 1970, Nagruz. jaz.

Car-Balak'n Camaatligy, Azerbaican Sovet Ensiklopediasi, t. 10, 1987,
pp. 399-400

Edili, Z., Ingilojtsy, Tbilisi, 1947, Na Gruz. jaz.

初出 『民族の共存を求めて』(1) 「スラブ・ユーラシアの変動」領域研
究報告輯、No. 13、北海道大学スラブ研究センター、1996年9月

7 グルジア国民統合とメスヘティ・トルコ人

はじめに

かつて、アンドレイ・サハロフ博士はグルジアを「小さな帝国」と呼んだことがあった。この蔑めしい称号は、後にグルジアからの抗議で撤回されたが、グルジアが多くのかつ多レベルの民族問題を抱えていることを表している。グルジアの抱える民族問題は第一には、グルジア共和国内部の非グルジア人をどのような形でグルジア国家に統合するかという問題であるが、第二に、グルジアはグルジア国外のグルジア人をグルジア国家に統合する問題を抱えていることである。しかし、ここに述べるメスヘティ・トルコ人の問題はグルジア人とメスヘティ・トルコ人の双方がメスヘティ・トルコ人をどのような民族であるとする判断により、第一の性格にも第二の性格にもなる微妙で、境界的な問題である。ここでは、どのようにしてこの状況が生じたのかその過程を明らかにしたい。

1.メスヘティ・トルコ人問題

1989年6月ウズベキスタン共和国のフェルガナ地方で、地元ウズベク人によるメスヘティ・トルコ人襲撃が起こり、100人に及ぶ死者、1000人以上の負傷者を出した。いわゆる「フェルガナの悲劇」である。モスクワ政府は現地における問題の解決をあきらめ、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギズスタンの全メスヘティ・トルコ人をロシアに脱出させざるをえなくなった。このようにして、一部の専門家にしか知られていなかったメスヘティ・トルコ人問題は、ペレストロイカ以後の旧ソ連の主要な難民問題の一つになった。メスヘティ・トルコ人はグルジア移住を望んだが、これはグルジア政府の認めるところにならず、現在多数が居住する北コーカサスのクラスノダル、スタヴロポリ両地方ではロシア系住民からも排斥されている。アゼルバイジャンに再移住した者も、移住地にアルメニア人との係争地ナゴルノ・カラバフやレズギ人の民族運動が強いダゲスタン寄りの地域に片寄っているなどの問題があって、安住の地を得たとは言い難い。

1944年11月15日、ソ連政府はグルジアのトルコ国境アジャリア自治共和国、メ

スヘティ・ジャヴァヘティ州のムスリム住民を中央アジアに追放した。北コーカサスの「処罰された諸民族」とは違って、彼ら是对独協力を行ったのではなく、又帰還アルメニア人の居住地を確保するためでもなく、スターリンがトルコの対ソ参戦を予期していたのが理由であったと判断されるが、公式理由は「ドイツ軍の前進からの保護」という理解不能の説明以外、発表されていない。一般的にグルジアでは、対トルコ協力が理由であると考えられていた。この時、NKVD部隊は移住対象の村落を包囲し、パスポート（passport 国内旅券）保持者はアゼルバイジャン人と書かれていた個人、大部分のパスポート非被交付者については、ムスリムと自称する家族を集合させた。いわゆる「処罰された諸民族」と同じく、50年代に追放地からの移住は公式に許されたが、グルジア政府は彼らの帰還を禁止した。この結果、大多数は追放地の共和国に残留し、一部が移住を許可されたアゼルバイジャンに入植、フェルガナ事件に至るのである。追放された人々の公式なエスニック呼称がこのとき何であったかは不明である。1968年のソ連最高会議幹部会の表現では、「かつてグルジア社会主義ソヴィエト共和国のアジャリア自治社会主義ソヴィエト共和国、アハルツィヘ、アハルカラキ、アディゲニ、アスピンツァ、ヴォグダノヴカ郡に住んでいたソ連市民であるトルコ、クルド、ヘムシェリおよびアゼルバイジャン人」である。しかし、これらの人々が、1964年、帰還のために「トルコ人の民族的権利防衛のためのトルコ人協会」を設立して以来、自称のトルコ人に元住地の歴史的名称メスヘティ（メスヒ人の国を意味するグルジア語。ロシア語ではメスヘティア）の名を付してメスヘティ（メスヘティア）・トルコ人として知られるようになった。グルジアでは通例、単にメスヒ人と呼ばれることが多いが、本稿では便宜上メスヘティ・トルコ人の語を用いる(1)。

今日に至るまで、モスクワからは、強制移住計画の詳細な記録が公表されていない。強制移住の規模について、当初、サミズダードによって50万人の数字が出され、アレクセーエワ(L.Aleksjeeva)、アキナー(Sh.Akiner)は、30万と推計したが(2)、コンクエスト(R.Conquest)、シーヒー(A.Sheehy)、ナハイロ(B.Nahaylo)、ウィンプシュ(S.E.Winbush)、ウィクスマン(R.Wixman)等は、1929年の人口統計をもとに約20万人と推計している(3)。また、メスヘティ・トルコ人の側の最新の数字では、1万6700世帯、8万6000人である（カザフスタン4万人、ウズベキスタン3万人、キルギズスタン1万6000人）(4)。グルジアでは、12万5000人(5)という数を

挙げるものが多かった。最も少ない数字は、グルジアの内部資料で、ナトメラツエ(Natmeladze)が発表した1951年11月、1957年9月付の文書によると、1944年11月15日の強制移住の対象は以下のとおりである(6)。

アジャリア

バトゥミ Batumi市

トルコ人	84家族
クルド人	75
ヘムシン人	6
計	165

ケディ Kedi郡

トルコ人	44
クルド人	12
ヘムシン人	5
計	61

バトゥミ郡

トルコ人	346
クルド人	472
ヘムシン人	231
計	1,049

フロ Khulo郡

トルコ人	124
クルド人	35
ヘムシン人	28
計	187

コブレティ Kobuleti郡

トルコ人	70
クルド人	198
ヘムシン人	34
計	302

メスヘティ Meskheti地方

アディゲニ Adigeni郡

トルコ人	5,643
計	5,643

アスピンツァ Aspindza郡

トルコ人	3,743
クルド人	488
計	4,321

アハルツィヘ Akhaltsikhe郡

トルコ人	2,609
クルド人	389
計	2,998

ジャヴァヘティ Javakheti地方

アハルカラキ Akhalkalaki 郡		ヴォグダノヴカ Vogdanovka 郡	
トルコ人	614	トルコ人	157
クルド人	155	クルド人	6
計	769	計	163

総計

トルコ人	13,434 家族	57,782 人
クルド人	1,830	8,627
ヘムシン人	304	1,462
計	15,568	69,869

82,000人と69,869人の二つの数字は比較的近いと言えるが、誰をメスヘティ・トルコ人とみなすかが、この二つに共通であるということは断言できない。

1957年の全ソ人口センサスでは、トルコ人の人口は3万5000人とされている。これは事実上全員メスヘティ・トルコ人であると判断できる。メスヘティ・トルコ人の全追放地での死亡者数はウズベキスタンだけで5万人、3万人、あるいは後に細かく1万4895人と言われるから(7)、82,000あるいは69,869という数字と1957年の人口とは、かなりの整合性がある。1970年の予備センサスでは、トルコ人は3万5000(1959年)から、7万9000人へと増加しているが(8)、1979年本調査では9万2689人で(9)、これは實際上すべてメスヘティ・トルコ人であるが、1957年の民族名称変更により、これ以外にもアゼルバイジャン人と称されている者と居住地で基幹住民として数えられている者があるであろう。従って、トルコ人協会が1970年代に人口を50万人と称すると、ウインブシュはこの数字を妥当であると考えた(10)。1989年のセンサスでは、トルコ人は20万8000人、母語使用者91.1パーセントである。一方、全連邦メスヘティ・トルコ大会で、1988年のアゼルバイジャンのトルコ人人口の推計を39万8000人とした(12)。グルジア側公文書では追放された集団中にトルコ人以外にクルド、ヘムシン人を、1964年の最高会議幹部会布告では、クルド、ヘムシリおよびアゼルバイジャン人の名を挙げている。ヘムシン(arm., Khemshin)あるいは、ヘムシリ(geor., khemshili)は、アルメニア人起源のスニー派ムスリムで、主としてトルコのトラブゾン地方、グルジアのアジャリアに居住し、ロシア革命以前には黒海東南部の都市で彼らの姿が目立った。従っ

て、前記の表でもヘムシンの居住地は黒海岸のバトゥミ市、バトゥミ郡、コブレティ郡、及び隣接するアジャリアのケディ、フロ両郡に限られ、内陸部のメスヘティ・ジャヴァヘティ州の諸郡には見られない。ヘムシン人は、独自の権利回復運動を行っており、出身地もアジャリアであるから、自分自身をトルコ人とはみなしてはいないと考えられる(13)。クルド人はザカフカースの三共和国にわたって居住しているが、宗派はスンニー、シーア、ヤズディーの三派にわたっている。トルコやイランのクルド人がトルコ人と同化する例は少なく、1941年以来、何度かにわたってザカフカースから追放されたクルド人もまた別個の運動を行っているから、このとき強制的に移住させられたクルド人が自分自身のアイデンティティを失って、トルコ化したと判断するのは容易ではない(14)。いわゆるアゼルバイジャン人と東北アナトリアのトルコ人の言葉は非常に近く、同一方言と言ってもよい。最高会議幹部会がどのような基準でアゼルバイジャン人とトルコ人を区別したかは不明である。トルコ人の多数はスンナ派、アゼルバイジャン人の大部分はシーア派であるが、アナトリア東部にはシーア派のトルコ人が多いので、宗派は両者の決定的な定義とはならないであろう。ウィンプシュはかつてロシア、イラン、オスマンの国境地帯に多く住み、シーア派の異端アリーアッラーヒー派の信者が多いカラバパフ karapapakh 人の存在を示唆するが、彼らはソ連の1926年センサスによると全体で6316人、アルメニアのグルジア国境に6311人がいたが、メスヘティ・ジャヴァヘティ州には住んでいなかったことを認めている。また、テレキメ Terekiime (トルクメンの複数) の存在を主張するが、この集団は1926年のセンサスには項目として挙げられていないものの、確かに少数がメスヘティ・ジャヴァヘティ州に居住して、グルジアでも追放者の中にテレキメが含まれていたと信じられている。ウィンプシュは、「シーア派とスンナ派、トルコ人と非トルコ人、さらにはグルジア人とアルメニア人さえ中に容れるメスヘティ人の運動は独特の将来的な民族的 (ethnic) 同盟の可能性を示唆している」と述べるが(16)、もしこの中に、ヘムシン、クルド、カラバパフが含まれていないとすれば、これはほとんど根拠のない空想的展望であろう。また、メスヘティ・トルコ人の自称はトルコ人であって、メスヒ人 (あるいはメスヘティア人) ではないことも重要である。メスヒ人はグルジア人の一種族であって、現代的な民族帰属感からすれば、トルコ人であり、かつ、メスヒ人であることはできないからである。

注

- (1)メスヘティ・トルコ人の強制移住と帰還闘争の経過については、Wimbush S. Enders and Ronald Wixman, *The Meskhetian Turks: A New Voice in Soviet Central Asia*, Canadian Slave Papers, Nos. 2/3, 1975; Sheehy Ann and Bohdan Nahaylo, *The Crimean Tatars, Volga Germans and Meskhetians* (Minority Right Group, No 6, 3rd ed.,) London, 1980; 山内昌之「ペレストロイカを揺るがすイスラム勢力」『アスティオン』、1989年第9号、180-187頁; Panesh, E. Kh., L. B. Jermolov, *Turki-Meskhetinsy (Istoriko-ethografiches kij analiz problemy)*, Sovetskaja Etnografija, No. 1, 1990; Helsinki Watch, "Punished Peoples" of the Soviet Union, Washington DC, 1991; Panesh E. Kh., L. B. Jermolov, *Meskhetinskije Turkii: Dinamika etnokul'turnykh sotsial; no-politicheskikh izmenenii, Etnosy i Etnicheskie protsesy-Pamjati R. P. Itsa*, Moskva, 1993などを参照。
- メスヘティ・トルコ人追放の理由として、ウィンブッシュは、海外から帰還するアルメニア人に居住地を確保するためであったかもしれないと示唆するが、メスヘティ・ジャヴァヘティに大量のアルメニア人が新たな定住の計画の事実はもちろん計画も確認されていない。
- (2)山内、181頁、および口頭発表。
- (3)Wimbush and Wixman, p. 323 n. (Robert Conquest, "Russia's Meskhetians - A Lost People," *The Times* (London), 5 August, 1970; *ibid.*, *The Nation Killers*, London, 1970, pp. 64-65); Sheehy and Nahaylo, p. 24)
- (4)Lapidus, G., 《My Khatim zashshishshat' Gruziju kak svoju rodinu》, *Nezavismaja Gazeta*, 1992, 11, 6
- (5)後述、ミミナシヴィリの論文。
- (6)Natmeladze, *Maqvala*, 1944 *tslis sakartvolos sazghriapira rainebidan*

deportirebuli mosakhleobis raodenobisa da erovnuli shemadgenlobis
shesakheb, Matsne, 1991, 1, c. 167-170

- (7) Sheehy and Naylo, p. 24; "Punished Peoples" , p. 53
- (8) Wunbush and Wixman, p. 337 n. (Pravda, 10, April, 1970)
- (9) Itogi Vsjesojuznoj Perenisi naselenija 1979, goda, t. 4, ch. 1, kn. 1, p. 8
- (10) Winbush and Wixmzn, p. 337
- (11) Goskomstat SSSR, Narodnoe Khozjajstvo SSSR v 1989, M. 1990, s. 31
- (12) Panesh, Ermolov, 1990 s. 17
- (13) M生「消された民族、ハムシェリ-アルメニア」『正論』19年4月、124-5頁。
- (14) "Punished Peoples" , pp. 71-72
- (15) Winbush and Wixman, pp. 322-323
- (16) Winbush and Wixman, pp. 339

2. 帰還運動

1956年4月28日、メスヘティ・トルコ人の「特殊移住者」処置は解除されたが、クリミア・タタール人と同じく原住地への移動許可は伴わなかった。メスヘティ・トルコ人の代表はモスクワで当局に請願を行ったが、回答はアゼルバイジャン人はアゼルバイジャンへ移住が許されるというものであった。彼らの民族名称は再びアゼルバイジャン人に変更されたのである。グルジア党第一書記ムジャヴァナツェ Mzhavanadzeも、メスヘティ・トルコ人の帰還を拒否し、実力で移住したものは排除された。このような経過の後、1964年、ウズベキスタンで「トルコ民族の民族的権利防衛トルコ協会」が設立され、臨時組織委員会（「ヴァタン Vatan」エンヴェル・オダバシェフ議長）が設置された。ここにメスヘティ・トルコ人の組織的居住地への帰還運動が始まった。タシュケント近郊の農村で行われた創立大会には各地から600人の代議委員が出席した。大会は関連党機関へ招待状を発行するとともに、大会終了後は議事録を機関に提出した。この会議でモスクワへ請願に出かけるための125人の代表が選出された。しかし、クレムリン当局は彼らとの会見を拒否し、現地のKGVも運動を圧迫するようになった。1968年4月、タシュケント近郊ヤンギルで開かれた6000人の集会では、参加者は警察と内務省軍

に包囲され、解散後も30人ほどの代表が身柄を拘束された。しかし、1968年5月ソ連邦最高ソヴィエトは「以前、グルジア社会主義ソヴィエト共和国のアジャリア自治共和国、アハルツィヘ、アハルカラキ、アディゲニ、アスピンザ、ボグダノヴァ地区に住んでいたトルコ人、クルド人、ヘムシン人、アゼルバイジャン人とその家族は、その他のソ連邦市民同様、雇用およびパスポート規則に従ってソ連邦の全土に居住する権利を有する」という政令を発行した。同年7月、これに応じた7000人のメスヘティア人がトピリスィで集会を開いたが武装警察に阻止された。結果的にムジャヴァナツェは数人の代表を呼び、メスヘティアには再居住の余地がないが、年間100家族に限ってグルジア各地に入植することができる。これに不満であれば、モスクワに請願するようにと言い渡した。この時、ムジャヴァナツェは非公式に民族名称をグルジア人、姓をグルジア式に改めることを求めたといわれる(1)。代表団はモスクワに請願したが、グルジア各地に入植を許可され、毎年15から30家族がメスヘティア居住を許可すると言い渡された。しかし、彼らは現職からの解雇や現住地転出の許可を得られず、また家財運送の便宜供与も拒否された。家財を放棄したまま、グルジアに移住したものは現地当局によって追放された。また、1969年6月黒海沿岸の荒蕪地コルキス低地に移住した500家族は地元住民には歓迎されたものの、ただちに当局によって追放された。1968年8月、120名からなる第33次代表団がモスクワに赴いたが、かえって中央委以会より前言を否定する回答を得た。これに反発してソ連邦市民権を放棄する宣言を行った代表団は、モスクワから追放された。

このような状況下、オダバシェフとその他の指導部はメスヘティ地方に帰還できないのならばトルコに出国を求める作戦にでた。国境の南には、広大な歴史的メスヘティアが広がっているからである。1970年4月アゼルバイジャンのサアトル Sa'tluで開かれた大会でこの方針は承認された。1970年4月6日、運動の指導者オダバシェフと若干の人々は在モスクワ・トルコ大使館にメスヘティ・トルコ人の受入れを請願した。この行動は同年5月2日にサアトルで開催された大会で承認され、「もし、最高会議が強制移住に責任ある者を処罰し、メスヘティ・トルコ人のためにグルジアに自治共和国か州を創設して、そこへ帰還する要求を容れないのであれば、トルコ移住の許可を求めなければならない」という宣言を採択した。グルジアに自治共和国か州を創設するという要求が、これ以来運動の目標になっ

た。5月15日には、トルコ移住希望者のリストが提出された。移住は最高会議から拒否されたので、1971年5月61人からなる代表団がトルコ大使へ面会を求める行動に出たが失敗した。この後三人の指導者は領事に面会をとりつけたものの治安当局に拘留された(2)。1971年、協会は新たな戦術として、国外に請願を行うことを始めた。1971年7月大会の請願書コピーもウ・タント国連事務総長とトルコ共和国大統領に送られた。これに対してソ連当局はオダバシェフをはじめとする執行部の一斉逮捕に踏み切った。しかし、外国要人に対する請願作戦は継続された。

1972年に運動の指導者はオダバシェフからレシト・セイファトフ Resht Seif-atovに替わった。セイファトフはトルコ政府に対する請願を継続、国連にも請願した(3)。メスヘティ・トルコ人の大多数はトルコへの移住を希望、メスヘティアのトルコ併合を要求する極端な主張も現れた(4)。トルコ側の回答は原理的にメスヘティ・トルコ人の受け入れを拒否したのではなく、トルコにはその時、多数のメスヘティ・トルコ人を受け入れる余裕がないという現実的な理由づけによるものであった。

ソ連当局が彼らの要求を容れず、トルコへの移住が事実上、不可能である以上運動の展望は全くなくなったといってよい。かくして、「ヴァタン」は新しい理論的支柱を必要とする。「我々は、今ではトルコ移住を望んでいない。我々は2400年前からの故郷へ帰還を望む(5)」。漸次的帰還の方針が1976年6月16日のカバルディノ・バルカリヤ、エロッコ Brokko大会で決定された(6)。北カフカースの追放された諸民族とは異なって、追放解除後も居住地への帰還を認められなかったメスヘティ・トルコ人には、ただ単に失われた権利の回復を求めるだけでは十分ではなかった。彼らは積極的に、メスヘティが彼らの歴史的故郷であることを主張しはじめたのである。グルジアでは、トルコ系遊牧民のメスヘティ来住を16～17世紀とすることが多いのであるが、メスヘティ・トルコ人の帰還運動に同情的なパネシュの論文では、12世紀のセルジューク朝の時代に多くのトルコマン遊牧民がグルジアに定住した可能性を指摘して、メスヘティ・トルコ人の歴史を通説より400年遡らせるが、メスヘティ・トルコ人の中には、紀元前4世紀にクセノポンが記しているタオコイ、カリュベス、マクロネス、コルキス等の諸民族をトルコ人とみなし、自らの祖先に比定していることになる。1950～60年代のトルコ共和国では、トルコ人をアナトリアの原住民であるとする主張が強かった。また

ポスト・ペレストロイカのアゼルバイジャンでも、アゼルバイジャン人の祖先の、つまりトルコ人のということであるが、アゼルバイジャン来住を極端に遡らせようとする傾向が強い。「2400年」は、同様の心理からきたものであろう。

1988年9月8日付『トゥルード』(V.Galenkin, Chestnoe Imja)は、新しい指導者イスラム・スレイマノフ Islam Suleimanovのインタビューで、彼らの全員がグルジアに帰還を望んでいるわけではないと認めながら、「しかし、かなりの人々が、あたかも全トルコ人のためであるかのように戦い、不適當な活動を行っている。彼らは、重荷にも負けず、様々な手紙やアピールで署名を集め、同胞に故郷帰還の請願書を畫かせ、仕事を休ませて多くの集会やミーティングに出席させている。確かに我々の間には『トルコに夢中』なものもいることは事実だ。しかし、彼らは少数だし、我々は彼らと行動を共にしていない」と答えている。

(1)The Crimian, p.27; Panesh, Jermolov, ctp.19

(2)The Crimian..., p.26, Winbush, p.336

(3)Winbush, 337

(4)The Crimian Tatars, Volga Germans and Meskhetians, p.26

(5) "Punished Peoples", p.54 (Chronicle of Current Events, No.9, August, 1969; Peter Reddaway, Uncensored Russia, Protest and Dissent in the Soviet Union, New York, 1972, p.276)

(6)Panesh i Jermolov, 1933, p.187

3. グルジア社会の対応

メスヘティ・トルコ人は、70年代、グルジアの反対派との連携を深め、1976年には、グルジアのヘルシンキ宣言監視委員会と連絡をとることに成功した。著名な人権運動家メラブ・コスタヴァ Merab Kostavaとヴィクトル・ルツヒラツェ Viktor Rtskhiladzeは1977年に逮捕される前に、彼らの権利を支持し、『クロニクル・オブ・カレント・イェヴェンツ』の編集者が、グルジア人であるメスヘティ人をメスヘティ・トルコ人と書いたことを批判した(1)。また、ヘルシンキ委員

会の創立メンバーで、コスタヴァと共に逮捕された後のグルジア初代大統領ズヴィアド・ガムサフルディア Zviad Gamsakhurdiaも、メスヘティ・トルコ人の違法な強制移住を批判する論文を発表していた(2)。メスヘティ・トルコ人の運動は孤立から連携へと向かったのであるが、コスタヴァと連絡をとった時点で、運動は重大な条件を与えられることになる。つまり、メスヘティ・トルコ人はメスヘティ地方のトルコ人ではなく、メスヒ人すなわちグルジア人でなければならないということである。この点に関しては、反体制派の主張と移住希望者はグルジア民族籍とグルジア風の姓を持たなくてはならないというグルジア共産党幹部の発言は、奇妙にも一致する。

そして、この限りにおいてメスヘティ・トルコ人は孤立はしていなかった。1978年2月グルジアの知識人は、当時ソ連共産党政治局員に抜てきされていたエドヴァルド・シェバルツェ Eduvard shevardnadzeに請願書を提出し、トルコ人と自称するグルジア人ムスリムの帰国許可を求めた。この請願書には、グルジアの最高の知識人、文化人達、歴史家ギオルギ・チタヤ Giorgi Chitaya、グルジア科学アカデミー会員セルゴ・ジキヤ Sergo Dzhikia、ヴァフタング・ベリツェ Vakh tang Beridze、アルノルド・チコヴァニ Arnold Chikovani、言語学者、後のグルジア科学アカデミー会員アカキ・シャニツェ Akaki Shanidze、言語学者、後グルジア科学アカデミー会員パタ・ググシュヴィリ Paata Gugushvili、Georgi Melikishvili、考古学者マリヤム・ロルディキパニツェ Mariam Lordikipanidze、アレクサンドル・ジャヴァヒシュヴィリ Aleksandr Zhavakishvili、作家オタル・ジャッパリツェ Otar Dzhaparidze、歴史家ショタ・ロムサツェ Shota Lomsadze、マミア・ドゥンバツェ Mamia Dumbadze、ヴァフタング・ジャパリツェ Vakh tang Dzhaparidze、グラム・マムリア Gulam Mamulia、作家ズラブ・ツィンツアツェ Zurab Ts-intsadze、レヴァズ・ジャパリツェ Revaz Dzhaparidze、ジャンスグ・チャルカヴィアニ Dzhansug Charkviani、グラム・アサティアニ Guram Asatia-ni、カミラ・コリンテリ Kamilla Korinteli、哲学者アカキ・バクラツェ Akaki Bakradze、ムフラン・マチャヴェリアニ Mukhran Machavariani、作家レヴァズ・イナニアシュヴィリ Revaz Inaniashvili、ウチャ・ジャパリツェ Ucha Dzhap-alidze、ギガ・ロルディキパニツェ Giga Lordikipanidze、彫刻家メラブ・ベルツェニシュヴィリ Merab Berdzenishvili、アレクセイ・マチャヴェリアニ

Ale-ksei Machaveriani、レヴァズ・タバカシュヴィリ Revaz Tabakashvili、ダ
ヴィド・トラツェ Dadid Toradze等が加わっていた。また、上記文化人の代表は、
1978年3月12日、シェヴァルツェに面会し帰還の実施を求めた。これは、197
9年の4月4日付けのグルジア共産党および閣僚会議のメスヒ人のグルジア受入れに
関する布告に結びついた(3)。

1985年6月、グルジアの著名作家で、グルジアにおけるロシア語公用語化反対の
旗手であり、1976年の作家同盟大会で、歴史、地理およびその他の科目もロシア
語で教えられるべきであると発言した教育相を厳しく批判したこともあった上の
リストにもある(4)レヴァズ・ジャパリツェは、グルジア作家同盟主催のシンポジ
ウムで、グルジアの知識人は25年以上前からメスヘティ人の帰還を支持していた
と宣言した。この発言及び同年9月に新聞で発表された論文によって、近年グルジ
ア当局は、わずかな数のメスヘティ・トルコ人の帰還を認めていることが公表さ
れた(5)。

グルジア人のメスヘティ・トルコ人受入れは毎年300家族であるが、1989年のセ
ンサスでは初めてメスヘティ人という名称が採用され、この時1,375人が自分をメ
スヘティ人であると申告した(6)。

メスヘティ・トルコ人をグルジア人ムスリムであると規定した上での帰還許可
は、1988年以降の独立運動の趨勢の中で、微妙な色彩を帯びてくる。当初、反体
制派の民主主義的、民族主義的団体は全てメスヘティ・トルコ人の賛成であった。
これに対し、シェヴァルツェと対抗関係にあったパティアシャヴィリの率い
るグルジアの共産党は反対の立場をとった。

1989年6月15～18日、聖イリヤ義人協会、国民正義同盟、イリヤ・チャフチャ
ヴァツェ協会等の反政府組織は、トピリスィで数千人規模の集会を行い、メスヘ
ティ・トルコ人のグルジア帰国を要求した。このとき数人の酔っぱらいが会場に乱
入し、「メスヘティ人はトルコ人でグルジア人を皆殺しにするだろう。メスヘテ
ィのトルコ人がグルジアに帰るのは反対だ」などと叫んだ。協会は、この乱入事
件に関して共産党に抗議を行った。7月には、帰還反対のデモも行われた。グルジ
ア共産党は、『モスコフスキー・ノーヴィスティ』のデモ報道に対して、グルジ
アの党機関誌はカフカースにおける民族関係の激化と土地不足を挙げて、グルジ
アは受け入れる状況でないことを述べた(7)。北オセチアのオルジニキツェ(現

ウラディカフカース)近郊でイングーシュ人追放後の新しい住民であるオセット人と追放から帰還したイングーシ人との流血事件が起こった例をみれば、一つの問題の解決が次の紛争の原因となる恐れはあったが、しかし、本音はここにはない。

このころまで、メスヘティ・トルコ人がグルジア人ムスリムであるという考え方は、グルジアの知識人に共通であったように思える。評論家ロマン・ミミナシユヴィリ Roman Miminashviliの『グルジアにはどれだけの敵があるか』(1990、Metsiniereba)所収の「事実に関する正しくない名前」にも明確に示される。これは、1988年9月8日『トルード』誌に掲載されたイスラム・スレイマノフのインタビューによる、ガレンキン V.Galenkinの「真実の名前」に対する反論で、メスヘティ・トルコ人は、移住者12万5000人のうち、11万5000人がグルジア人ムスリム、7000人がテレケミン人、3000人がクルド人である。テレケミンは16~17世紀に移住した新来者である。スレイマノフがどうしても自分はトルコ人だと言うのであれば、彼の民族帰属意識を尊重せざるをえない。それであれば、祖国はトルコでなければならない。すでに数百家族がグルジアに帰国したというが、彼らはトルコ人ではなく、グルジア人であるというものであった。このような考え方はメスヘティ・トルコ人の帰国を積極的に進めようとする「ムスリム・グルジア人の権利擁護同盟」(ズラブ・ママラツェ Zurab Mamaladze)議長の立場にも共通である(8)。反体制派の大勢は帰還支持であり、聖イリヤ義人協会などの立場は六月集会で明らかで、明確にメスヘティ・トルコ人の帰還を支持している。国民民主党、民族独立党の立場も同様であった。メスヘティ・トルコ人の間にも自分自身をトルコ人ではなくグルジア人であるとみなす人々の活動が目立つようになった。このころには、「民族自称の復活と故国帰還のためのメスヒ人ムスリム運動(D-vizhenija meskhov-musliman za vosstanovlenija natsional' nogo somohaz ban-ija vozbrashsheniya na rodinu)」が機能していた。しかし、1988年6月28日にカバルディノ・バルカリヤで開催された第9回大会では、各地から参加した276人の代議員の長時間の討論の後、正式に自分をグルジア人であると宣言した者は帰郷できると主張する「グルジア反対派」は敗北した。大会は「グルジア反対派」の方針を批判し、指導者に誤りを認めさせた。彼らはトルコ人の民族名称を保持したままの帰還を決定し、この大会を「統一大会」として宣言した。この時、運動の代表者は初めてモスクワ・オスタンキノ・テレビの取材を受けた(9)。

この一方、1989年9月2日、アゼルバイジャン、サアトル郡のアディギェン Adigju n'コルホーズで開催された第10回大会では、5,727人の代議員が出席したが、70～80パーセントが、グルジア帰還が認められない場合には、トルコ移住を希望した(10)。

1988年のメスヘティ・トルコ人大会のトルコ人宣言、1989年のフェルガナ事件による全メスヘティ・トルコ人の難民化は、グルジアに過激な反応を引き起こしていた。組織として、この問題に最も早くから関心をもっていたはずのヘルシンキ委員会はコスタヴァの死後代表となったズヴィアド・ガムサフルディア Zviad Gamsakhurdiaが、一転して、帰還に反対しだした。アメリカ人ジャーナリスト、エドモンド・スチーヴェンスに対するグルジア共和国最高ソヴィエト議長ズヴィアド・ガムサフルディアに対する回答(11)では、ガムサフルディアが1989年12月6日の美術ギャラリーの集会で、ヘルシンキ委員会の名をもってトルコ人の民族意識を持つ人々のグルジア帰還に反対したが、その他の公式の声明では、グルジア人には民族的偏見はないと述べているが、両方の差をどのように説明するのか、という質問に対するものであった。回答は「ヘルシンキ条約は国家に無制限に自国の領土に数十万の外国人に永住権を与えることを命じているものではない。どの民主的な国家にも市民権に関する法律があるが、グルジアだけにはない。だから、我々はこの法律制定まで、これほど多数の外国人を小さい、狭い国にいれるわけにはいかない。それでなくても、人口の35パーセントは外国人なのです」というものであった。ガムサフルディアはその政治的活動の発端である1956年3月のトピリスィ事件(スターリンの銅像撤去に反対)より、民族主義的傾向が強かったが、しだいに個人に対する人権から、民族の権利を口にするようになっていた。

1988年、党のグルジア語機関誌『コミニュスト』は、チクヴァナヴァ Z(urab?) Chikvanadze署名の論文を掲載し、自ら、「グルジア人口基金(Demograficheskiy Fond Gruzii)」を創設する宣言を行い、アゼルバイジャン人やトルクメン人はグルジアやヴァルト諸国より4倍も人口増加率が高いことを指摘した。また、同年『リテラトゥラ・サカルトヴェロ』で、クヴァンチラシュヴィリ T.Kvanch-lashviliが、「方法は見つかった」という論文を著し、非グルジア人の人口調節を主張した。これらは、ツォトニアシュヴィリ A.Tsotniashviliの批判を浴びた。1990年、トピリスィの青年共産主義同盟機関誌ロシア語『マラデヨジ・グルージ

イ』はヘルシンキ委員会等の団体の名で「グルジア人へのメッセージ」を掲載して、自分自身をトルコ人と呼ぶ者はトルコへ送られるべきで、グルジア人のために保存しなければならないメスヘティへ入ることを許すべきでない。中国・ブルグンド人がいないように、メスヘティ・トルコ人などという民族は存在しないと主張した(12)。

1989年、いったん北ロシアに避難させられたメスヘティ・トルコ人は後に北カフカースの西部クラスノダール地方に再移住した。同地方は戦乱の結果故郷を脱出した数多くの民族の移住の地であるが、またロシア系住民による新来者排斥の気分もかねてから指摘されていた。1992年4月、地元のコサック軍団は地方政府に最後通牒を発し、4月15日から5月1日までにこの地方に居住する5万人のメスヘティ人をグルジアに移住させることを要求し、要求が容れられない場合には、強制的に排除すると通告した。グルジアの国家評議会は、映画監督のエルダル・シェンゲレイヤを派遣して協議に当たらせた。メスヘティ人には二つの重要な政治団体が形成されていて、一つは「救済 Spasenije」で、自分達をムスリム・グルジア人と考えて、グルジアへの帰還を望み、もう一つは自分達をトルコ人と見なす「ヴァタン Vatan」である。グルジア代表団とクラスノダールの地方政府との協議の結果、この年中にメスヘティ・トルコ人のグルジア帰還を開始することが決定された。

しかし、グルジアでは前ガムサフルディア政権のプロパガンダによってメスヘティ・トルコ人に対する反感が高まっている。「ヴァタン」の新議長 Jusuf Sarvarovは、メスヘティ人は、かつて存在したこともないようななどのような国家機関の設立をも望んでいない。文化的自治権も望んでいない。グルジアの市民権を望むと答えている(13)。またユスフ・サルヴァロフは、「我々は、グルジアの憲法を遵守したい。かつてファシストから防御したように、グルジアを祖国として守りたい。トルコは我々を受け入れる準備ができているが、そこは自分の国ではない。我々は何処にいても移住者で、喜ばれない客だった。生きるためには、トルコへいくことを承知するものがあるかもしれないが、明日にでもグルジアが我々を受け入れると言え、一人だってトルコへ行く者はいない。実のところ、我々はムスリムであり、グルジア人はキリスト教の国だが、我々の先祖はメスヘティアとジャヴァヘティアでキリスト教徒と平和に住んできた。我々は、トルコとグ

ルジアの平和の架け橋になりたい」。サルヴァロフの「グルジアを祖国として守りたい」という発言は、メスヘティ・トルコ人のアブハズ戦争従軍申請にもあらわれたのである。また、「ヴァタン」副議長シリン・ファズリヘフ Shirin Fazlijevaは、「我々はもう何度も騙された。今、シェヴァルツェは言う、グルジアは経済的に困難である、後で帰ってくださいと。彼は一度は、メスヘティ・トルコ人を迎えることはグルジアの道徳的義務だと発言した。しかし、明日だと誰がいうだろう。ズヴィアド・ガムサフルディアも帰還を約束した。まだ権力を握らないときは。しかし、グルジアの指導者になると、民族的にトルコ人だから、トルコへ帰ることを提案した」(14)。

(1)The Crimian Tatars...,p.26

(2)Suny,R.G.,The Making of the Georgian Nations,Stanford,1988,p.309

(3)Baratashvili,My,Meckhi...,Literturnaja Gruzija,1988,nos.11,ctp.170

(4)Suny,p.309

(5)Nahayo B.,and Victor Swoboda,Soviet Disunion-A History of the Nationalities Problem in the USSR,New York,1990,p.235; Elizabeth Fuller 'Georgian Muslims Deported by Stalin Permitted to Return', RL 32/86,14 January 1986;ibd., 'Depotation o Meskhetians Discussed in Georgian Press',RL 168/88,12, April)

(6) "Punished Peoples" ,p.54.筆者の手もとのソ連人口統計には、この項目はない。

(7)高橋清治『民族の問題とペレストロイカ』平凡社、1990年、280頁(Moskovskij Novisti,25 ijulia,1989;Zarja Vostoka,7 ijulia 1989)

(8) "Punised Peoples" ,p.55(Novy Vremja,No.37 に掲載された、ママラツェの編集部あて書簡)。

(9)Panesh i Jerlomov,1990,p.19-21;Panesh i Jerlomov,1993,p.188

(10)Panesh i Jermolov,1993,c.197

(11) "Punised Peoples" ,p.54-55;Panesh i Jermolov,1993,p.188

(12)Panesh i Jermolov,1990,21-22

(13)Tavkhelidze,M.,《Repatriatsija Turko-Meskhetintsev-Moral'hyj dolg

(13)Tavkhelidze,M.,《Repatriatsija Turko-Mesketintsev-Moral'hyj dolg Gruzin》Nezavismaja Gazeta,1992,4 Avril,30

(14)Lapidus,G.,《My khatim zashshishshat' Gruziju kak svoju rodinu》, Nezavismaja Gazeta,1995,11,6

むすび

メスヘティ・トルコ人の帰還要求に対するグルジア政府旧共産党（ムジャヴァナツェおよびバリアシュヴィリ）とガムサフルディア政権の拒否あるいは制限の理由はムスリムであるトルコ人に対する忌避であった。これをグルジア人の過剰な民族主義の現れとするのは手易いが、ここでは断罪は目的ではない。問題はグルジア人の多数の間に国境近くに隣国人が集中的に住むことの恐怖であり、民族的自治が民族的分離となることの危惧である。そのような危惧が現実となることは、ザカフカースの現状を瞥見すれば明白である。グルジア中央からみて、アジャリアの忠誠心がいかにたよりないとされていることは、別稿で述べた(1)。グルジア民主共和国の時代には、メスヘティ・ジャヴァヘティのムスリムにはトルコ側について戦った者もあった。自治州や、はてはトルコへのメスヘティ・ジャヴァヘティア割譲を主張する人々の帰還を拒否することが、過激な反応であるとすることはできない。50万人に達すると自称されるメスヘティ・トルコ人の受容はグルジア国家の統合を疎外するからである。

メスヘティ・トルコ人の帰還運動は自らをトルコ人であるとみなしたことでグルジアへの帰還の機会を失っている。ウィンプシュの主張するように、彼らが「トルコ人であるという意識 T rtkl k」が、50年にわたって帰還運動を続ける力となったのであるのならば、それは意義のあることである。彼らの多数派が、真実、かつて中央アジアから移住したトルコマン遊牧民の子孫であると信ずるのであれば、これを批判するにはあたらない。しかし、彼らにトルコ人という呼称が与えられた1926年には、それはただムスリムを意味したにすぎないと思われる。アジャリアのグルジア人ムスリムをグルジア人と分類した当局は、しかしメスヘティ・ジャヴァヘティ州ではキリスト教徒のみにグルジア人の呼称を認め、ムスリムはトルコ人に分類したのである。民族帰属意識が問題解決の障害となったの

代政治の密接な一面が伺われる。

「メスヘティ・トルコ人（あるいは、メスヘティのグルジア人ムスリム）」問題と様々な共通項を持つ問題にインギロ人（アゼルバイジャンのザカタラのグルジア人ムスリム）の状況がある。第一に、彼らは当然なことにグルジアとかかわりを持つが、現在はグルジアの国境外に疎外されている。第二に両集団の種族的過去は複雑であって、彼らのあれかこれかの母国への統合、移住の権利は、各国政府や彼ら自身が彼らの複雑な過去からどのような歴史像を作り上げるかにかかわっている。このようにして、グルジア人ムスリムの問題は、一層複雑なグルジアの国民的統合、国家領域の再構成の問題にぶつかる(2)。グルジア国家とオセット人、アブハズ人の関係、グルジア人諸種族間の矛盾と調和、トルコ北東部（西南グルジア）のグルジア人ムスリム問題である。これらについては、稿を改めて述べたい。

(1)グルジア人ムスリム問題については、「グルジアのイスラーム教徒」、重点領域「スラブ・ユーラシアの変動」計画研究班「民族の問題と共存の条件(C01)」第2回班会議(1995.9.14)における口頭発表。「忘れられたグルジア人—グルジア人イスラーム教徒について」日本国際問題研究所、「旧ソ連の地域別研究」研究会(1995.9.20)における口頭発表。「アジャリアのムスリム・グルジア人」「旧ソ連の地域別研究」、日本国際問題研究所、1996年3月などを参照。

(2)Hewitt,George,Yet a third consideration of Volker,Sprachen und Kulturen des sudlichen Kaukasus,Central Asian Survey,1995,14(2),pp.185-319

初出 『ロシア研究』第22号、1996年

8 歴史記述に於ける境界

ーエスノヒストリーとアゼルバイジャンの解体

本稿は、1994年1月に国際問題研究所で開催された同研究所とイギリス王立国際問題研究所(RIIA)との共同研究会「ポスト・ソ連の周辺：ウクライナ、トランスコーカサス、中央アジアおよび極東」の発表原稿(Internal Affaires and Ethnic Conflicts in the Trans-Caucasia--Disintegration of the Soviet Republics: The Case of Azerbaijan)を和訳し、補正、増補を加えたものである。なお、当日発表された原稿は、GIIA Paper, 1994, No. 8, pp. 55-61に発表されている。

1 アゼルバイジャンの解体。

1-1 アゼルバイジャン人の自己意識。

ナヒチェヴァン自治共和国を除くと、今日のアゼルバイジャン共和国の領域は歴史的アゼルバイジャンの範囲には、含まれていなかった。ナヒチェヴァンNakhchevanはアラス川の左岸にありながら、タブリーズ地方と関係が深く、伝統的イスラーム地理学では、現イラン領の都市タブリーズに付属する「アゼルバイジャン」地方の一部であった。アルメニアの伝統的地理区分でも、ドヴィンDvin、イエレヴァンYerevanのあるアララットArarrat州ではなく、ヴァン湖東岸と同じヴァスプラカンVaspurakan州に属していた。アラス川とコーカサス山脈に挟まれたアゼルバイジャン共和国の主要部分は、中世にはアゼルバイジャン第二の都市ギャンジャGyanja (Janza)を中心とするアッラーンArran、バクーがその一部であるシールヴァーン、現イラン領にまたがる平地のムガーンMughan、シールヴァーンShirvanとムガーンの間、グーシュタースフィーGushtasfi等個々の名称で知られていて、地名としては、それらの全てを合わせる単一の地名はなかった。中世にこれらの地域がアゼルバイジャンの一部に含められる場合があるとすれば、単にこれらの地方が本来のアゼルバイジャンと同一の支配者によって統治されていたときである。

この地域住民のトルコ化およびトルコ語を話す人々のシーア派イスラーム教化

のかなり後になって、初めて19世紀に知識人の一部にアラス川の北（現在のアゼルバイジャン共和国）と南（イラン領アゼルバイジャン）のトルコ語を用いるイスラーム教徒住民は単一不可分の同一民族で、アゼルバイジャン人と呼ばれるべきであるという主張が見られるようになった。このような近代的な民族同一性を最も早く唱えたのは、小説家ムハンマド・シュレイマノフ Muhammad Suleimanovで、彼は1891年新聞カシュクル Kashkul（1880年ジャラルール・ウンスィザーデ Jalal Unsizadeによって発刊された進歩的雑誌のちに新聞）で、ロシア領とイラン領に分断され、民族的アイデンティティーが混乱していたロシア領ザカフカースのムスリムに対して、「貴方がたは、何故、自分自身をアゼルバイジャン・トルコ人と呼ぶ事によって、貴方がたの（アイデンティティー）のジレンマを解決しないのですか」と呼びかけている。このような発想はシュレイマノフただ一人のものではなく、他の人々と共有のものであって、ウンスィザーデ自身も『アゼルバイジャン』という名称の新聞の発刊を計画していた。また、同年マメド・アガ・シャフタフティンスキー Mamed Agha Shah-Tahtinskiyは、雑誌『カスピ Kaspi』で、「ザカフカースのムスリムを何と呼ぶか」という論文を掲載し、「近年、ロシア語で、『タタール』とい名称が使われだしているが、ザカフカースのトルコ人と内地のタタール人には、言語、外見、習慣の面にわたってかなりの隔たりがあるので、適切な名称とはいえない。ザカフカースのムスリムの言葉は、オスマン、セルジューク、アデルベジャン（=アゼルバイジャン）の大きな方言に別れるトルコ語に関わっている。まして、ザカフカースのトルコ人はイラン人ではない。これらの人々は、言葉によって互いに区別されるが、トルコ語とペルシア語は、全く異なっている。ザカフカースのムスリムはアデルバイジャン人、彼らの言葉はアデルバイジャン語と呼ぶのが全く好ましい」と述べた。これまで、凡トルコ主義的傾向のあるジャディード主義に隠れてあまり注目されていなかった、トビリシィとバクーを活動の舞台としたザカフカースの進歩的ムスリムの中で、アゼルバイジャンという名称によるアイデンティティー確立の努力がなされていたのである。

この様な流れを受けて、アラクス川からコーカサス山脈までのザカフカース東部を「アゼルバイジャン」と呼ぶ最初の公的な試みは、1918年共和国として新たに独立したこの地域を「アゼルバイジャン民主共和国」とする命名であった。1920年赤軍のバクー入城後、成立したソヴィエト政権もそのままこの国名を採用し

た。ただ、民族名称はアゼリ・トルコ人とされ（あるいは、単にトルコ人）とされた。民族名称としてアゼルバイジャン人が採用されたのは、1936年、スターリンの命令によってであった。アゼルバイジャンという概念は、アゼルバイジャンの領域にすむあらゆるエスニック集団統合の理念として用いられたのである。

1-2 アゼルバイジャンの多民族的性格。

ロシア政府がザカフカースで行った1897年の国勢調査によるとアゼルバイジャン・トルコ人は、バクー県の人口の60%、エリザベット県の62%、ナヒチェヴァン郡の64%を占めた。ザカフカース全体では29.2%であった。ほぼ100年後の1989年調査では、アゼルバイジャンの人口の79%が、アゼルバイジャン人であった。すなわち、この100年の間、今日のアゼルバイジャンの領域の人口の20-40%が、非アゼルバイジャン人であったという結果になる。その内、ロシア人とアルメニア人は、アゼルバイジャン人マジョリティーの中に同化されるのを拒否したが、アゼルバイジャン政府はその他の少数集団とは常に微妙な問題を抱えていた。ここでは、ターレシュ（Talesh, Talysh）、レズギン（Lezgi, Lezgin）、クルド問題について概略を示そう。イラン語に属するターレシュ語を母語とするターレシュ人は、アゼルバイジャン東南部のアスタラ（Astara）、レンコラン（Lenkoran）、レリック（Lerik）、マサリ（Masalli）郡に集中し、1931年センサスによるとそれぞれ郡人口の、86.4%、86.3%、82.4%、30.1%を占めた。1989年センサスでは、2万2千人のターレシュ人口が報告されている。しかし、別の情報では、アゼルバイジャンのターレシュ人口は15万人を超えるという。同名の集団は国境を挟んだイラン領にも分布しているが、イランでは、彼らの使用言語のトルコ語化と信仰のシーア化の程度とが一致するが、ターレシュ地方はイランではスンニー派信仰の牙城でもある。恐らくアゼルバイジャンのターレシュ地域でもこのような事情があるであろう。この地方では1919年ターレシュ・ムガン・ソヴィエト共和国の建国が宣言されたが、ソヴィエト・アゼルバイジャン成立後、彼らの自治権は承認されず、以後民族的自治権を獲得しようとする運動は弾圧を受けた。ソ連崩壊後の1993年にアリアクラム・グンバトフ Aliakram Gumbatov の指導するターレシュ・ムガン共和国が宣言されたが、グンバトフによるとアゼルバイジャンのターレシュ人口は百万人に達するという。グンバトフの主導する運動は厳密には分

離主義ではなく、アゼルバイジャン共和国内での自治の獲得だが、ソヴィエト時代には彼らの民族的権利は一切否定され、彼らのための学校、ラジオ、新聞等は無かった。アゼルバイジャン政府はその理由を彼らは既にアゼルバイジャン人に同化し、言語的にもバイリンガルであるからであると説明していた。この状況はペレストロイカ以降も変化を見なかった。

アゼルバイジャンのダゲスタンよりの地域には、公式資料では17万4千人のレズギ人が住む。この内90%以上がレズギ語を母語とするものである。彼らの一部はシーア派であるが、大部分はスンニー派である。非公式資料では、アゼルバイジャン内のレズギ人口は80万人を超えるという。彼らの為にも、劇場、ラジオ、新聞、学校はない。ロシア連邦の共和国であるダゲスタン南部には、さらに多くのレズギン人が住み（1989年公式統計によると全人口は、46万6千人）、統一と民族的領土の創設の気運が生じている。アゼルバイジャンのレズギ人はバクー政府に対してかなりラジカルな感情を抱いており、1993年にダゲスタンで開かれた民族大会では、武力闘争さえ主張された。1992年から1993年のアブハジア・グルジア戦争でアブハジア側に多数の義勇兵を送ったコーカサス山地民族同盟のムサ・シャニーボフMusa Shanibov議長もレズギ人に対する支持を表明し、必要とあれば、武力援助を行うことを宣言している。

アゼルバイジャンには、若干のクルド人がいる。彼らはかつてアルメニアと山岳ガラバグの間にラチンLachinを中心とするキュルディスタンKyurdistan自治区を与えられていたが、これは後に撤廃された。かなりのクルド人が強制移住の処置をうけ、現在その一部は、北コーカサスのクラスノダルKrasnodar地方に居住しているが、当地のロシア人に圧迫を受けていると感じている。ペレストロイカ以降、クルド人も民族的権利の擁護のために立ち上がったが、彼らの第一の目標は、キュルディスタン自治区の復興である。一方、ナヒチチヴァン（自治）共和国では、西南部のシャルールSharur地区にクルド人集落があるが、1994年夏には、トルコ、アゼルバイジャン両国の特務機関が襲撃する事件が起こった。アルメニア側の発表では、1993年アルメニア人がラチンLachin回廊を占領した際、クルド人はアルメニア指示を表明したというし、トルコ側情報によるとアルメニアは、トルコ領クルディスタンで、抵抗運動を続けているクルド労働党を援助しているという。アゼルバイジャンにおいては、ターレシュやレズギだけでなく、クルド人

の問題も国内問題ではなく、国家間の問題であるのである。これらのなかで最も深刻であるのは、山岳ガラバグの帰属を巡るアルメニアとの戦争であるが、重要な事はアゼルバイジャンの抱える民族問題はそれだけではないということである。

ソヴィエト政府は常にトルコ系住民の凡トルコ主義的運動に対する注意を怠らなかつたが、アゼルバイジャン民族主義は、限界を超えなければ、大目に見られていた。科学アカデミー版『アゼルバイジャン史』（バクー、1958）では、トルコ系民族集団のザカフカース移住を五世紀から七世紀のフンとハザールの時代に置いているが、この次の世代に属する歴史家達は、この点について、時代を遡る傾向にある。『シルヴァンシャー国家』（1983、バクー）の著者サラ・アシュルベイリはアゼルバイジャンにおけるトルコの要素の起源を三世紀のフン族の侵入に求め、六世紀には、トルコ系住民は今日のアゼルバイジャンのあらゆる地域に居住していたとし、「アッラーン」のようなアゼルバイジャンの地名の語源もトルコ語に求めている。ペレストロイカ以降、この傾向は極端になり、シュメール語をアゼルバイジャン語と関係付けたり、トルコ系住民の移住を2500-3000年前に比定するような、非常識な主張が見えるようになった。また、このような「歴史家」達は素人地名学にも手を染め出し、シルヴァンShirvan、バクーBaku、アッラーンArran、ザンゲゾルZangezor、ナヒチュヴァンNakhchevan等のアゼルバイジャンの古い地名の多くをアゼルバイジャン語で解釈しようとした。これらは30-60年代にトルコ共和国で一世を風靡した偽歴史学の亜流であるが、バクー中東民族研究所の故ブニヤトフ所長は、このような言説を凡トルコ主義傾向であると警告している。旧ソ連の他の共和国と同じく、アゼルバイジャンにおいても民族主義的な歴史学の潮流が強化したのである。アゼルバイジャンにおいては、アゼルバイジャン人としてのアイデンティティーを否定し、アゼリ・トルコ人であると主張するものも多くなったが、民族戦線のリーダーの一人で、後に大統領に選出されたエルチベイElchibeiもその一人であった。この自己規定は、ソ連時代に禁止されていた凡トルコ主義的風潮と関係があるが、これもまた領域的国民国家としてのアゼルバイジャンの解体の要素の一つなのである。

2 アゼルバイジャンにおける国民統合の理論。

ソ連時代にアゼルバイジャンという国名が採用されたのは、国民統合の手段としてであった。アゼルバイジャン科学アカデミー会員のズィヤー・ブニャトフ Ziya Bunyatov (前出者と同一人) は、既に六世紀に南北アゼルバイジャンは単一の領域として統合されており、八世紀以降はアラブやペルシア語の文献の中で、アゼルバイジャンとして知られていたと主張する。恐らく、今日のアゼルバイジャン人の祖先の一部は、コーカサスの古い種族であり、古代の歴史的記録にその名をとどめているが、1958年の共和国史では、アゼルバイジャンの最古の種族として南アゼルバイジャンすなわちイラン領アゼルバイジャンのマンナイ、メディア、アトラパタネを挙げている。通例アゼルバイジャンの語源は、このアトラパテネに当てられることが多いが、アゼルバイジャン共和国の領域はアトラパテネには含まれていなかった。また、メディアもアトラパテネも言語はイラン系であったと考えられている。元来イラン系であった南アゼルバイジャン住民の言語はやがてトルコ化され、さらに後に南北アゼルバイジャン住民の信仰がシーア化されるに至って、単一のエスニック集団となるが、『アゼルバイジャン国家サファヴィー朝』の著者オクタイ・エフェンディエフ Oktai Efendief によると、アゼルバイジャンはサファヴィー朝の成立と共に統合されたのである。一方、このような考え方は、イランの歴史家からは、強く反駁されることになる。※

次に、アゼルバイジャン人歴史学者は、マンナイ、メディア、アトラパタネと並んで、コーカサス・アルバニア Albania にも歴史的起源を求めようとする。1960年代にこの新しいアゼルバイジャン人起源論の学説が現れたが、この説によると現在のアゼルバイジャン人は最初イスラーム化され、ついでトルコ語を用いる事になる古代・中世のアルバニア人の直接の子孫である。

2-1 コーカサス・アルバニア

ギリシャとローマの文献には、現在のアゼルバイジャンの領域にアルバニアという国家が存在していた事が述べられている。これについて述べた最初の著者はアリアヌス Arrianus で、それによるとアルバニア王は、ペルシャの大王の陣営に加わって、マケドニアのアレキサンダー大王と戦っている。この民族は後に、アルメニア語文献のなかにアグヴァン Aghvan 人として知られるようになる。このようにして、アルバニアとアルバニア人はヨーロッパではよく知られていたが、ア

ラビア語とペルシャ語、トルコ語文献では、この古代国家については全く何も記されていない。19世紀にアッバスクリ・バキハノフ Abbas Quli Bakikhanovが自著『エラムの花園』で、ヨーロッパの古典文献によってアルバニアとアルバニア人の存在を紹介しているが、それと彼の時代のアゼルバイジャン、アゼルバイジャン人との関係については沈黙を守っている。当時のアゼルバイジャン系住民はアルバニアに関する伝承は何も持っていなかったのである。アゼルバイジャン最初の系統的かつ公的な通史である1958年版『アゼルバイジャン史』も、両者を結び付けようとする格別の意図は示していない。同書では、単にアゼルバイジャン北部とダゲスタンの主要部が古代アルバニアと呼ばれていたと記されているだけである。

2-2 対アルメニア紛争。

1959年、前述のズィヤ・ブニャトフはアゼルバイジャン科学アカデミーの紀要に、9世紀にアラブ帝国に対して反乱を起こしたホッラム教団の有名な指導者であるバーベク Babekが、「シャッキ Shakkiの領主で、アルバニア王 (Batrik al-Ran) サフル・イブン・スムバト Sahl b. Sumbat」の領地を経由してビザンツ領へ逃亡したことに関する論文を発表した。伝統的にはシャッキはクル川左岸コーカサス山麓にある都市であると考えられているが、ブニャトフはこれをザンゲゾル地方の一村落に比定した。今日アルメニア共和国南部、イラン国境を望む地方である。7世紀に書かれたあるアルメニアの地理書によると、シャッキは元来大アルメニアに属していたが、後にアルバニアに併合されたとある。この場合にはシャッキはクル川の右岸に求めなければならない。するとクル川右岸は、ある時までアルメニア領であったが、ある時からアルバニア領になったという歴史的事実に合致している。ところがブニャトフは、更に南のザンゲズルがアルバニア領であり、この地の領主がアルバニア王の称号を持っていたとするのである。この論文は、他の多くの研究と共に『7世紀から9世紀までのアゼルバイジャン』（バクー、1965年）にまとめ上げられた。この書は、アルメニア、アゼルバイジャン両国研究者の間の深刻な論争の出発点になった。ブニャトフの研究がアルメニアとアゼルバイジャンの歴史地理、特にその境界について、全く新しい理解をもたらしたからである（以下のa)~c)）。

a) アルバニア教会。

アルバニア王ウルナイルUrnaïrのキリスト教化の後、アルバニアにもアルメニアやグルジア同様の国民教会が組織された。教会ではアルバニア語とアルメニア語アルファベットが用いられていたと考えられている。325年のニケーア公会議、552年のドヴィンDvin司教会議に於いてはアルバニアの聖職者はアルメニア、グルジアの聖職者と共に451年に決定されたカルケドン教条に反対した。しかし、後にグルジア人は、カルケドン教条に移り、アルバニアもシリア人教父の影響下に入った。これは、三者の間に深刻な、教義、組織対立が生じていたことを意味する。アラブ人の支配後、アルメニアのカトリコス・エチミアヅィンEchmiadzinのイリヤIliyaはカリフ・アブドメリクAbd al-Mekikの助力を得て、この問題に解決を得ようとし、アルバニア人のカトリコスを逮捕し、アルバニア語で書かれたあらゆる宗教的文献を破棄した。その再多くのアルバニア人君侯がダマスクスへ連れ去られた。ブニャトフは貴重なアルバニア語文献が永遠に失われ、政治的エリートがいなくなったため、アルバニア国家を弱体化したと述べる。

この主張に対するアルメニア人研究者の反応は速かった。直ちに書評の形式で反対意見が表明された。このクーデターがアルバニア教会のアルメニア化を導いたことは事実であろうが、著者は教会組織の争いを民族同士の紛争であるかのように主張し、あたかもアルメニア人がアゼルバイジャン人の仇敵であるかのように記述して、民族友好の精神を損ねていると主張した。

b) アルバニア文学。

アルバニアではキリスト教化の後、モヴセス・カガンカトヴァツィMovses Kag hankatovatsiの記す伝説によるとマシュトツツMashtotsによって、アルバニア語アルファベットが作られた。最近、アルメニアでこのアルバニア語アルファベットが発見され、アゼルバイジャン北東部ミンゲナウルMingenaur人工湖工事予定地からはアルバニア語碑文も発見され、アルバニア語文献の存在が確認された。ブニャトフが主張する第二の論点は、それまでアルメニア人と考えられていた著名な著述家、カガンカトヴァツィ・キラコス・ガンツァケツヅイKirakos Gandzakt si、ムヒタル・ゴシュMukhitar Gosh、ダヴティックDavitik等はアルバニア人であって、彼らの作品は元来アルバニア語で書かれたが、アルメニア語に翻訳され

た後原本は失われたとするものである。またウディン語の研究者グカシヤンGukasiyanは、カガンカトヴァツィのアルメニア語テキストを調査し、この作品の原文はアルバニア語であるという結論に達した。アルメニア人研究者はこれらの主張には納得せず、特にカガンカトヴァツィに見られる特徴的要素がウディン語によるものか、アルメニア語の地方的要素であるかについて議論が集中した。また、中世期におけるアルバニア語の残存についても、議論が行われた。ブニャトフは、アラブ語地理書に見えるアッラーン語、ギリシャ語文献のなかにみえるザンゲゾルのシウニクSiunik語をアルバニア語であると判断した。アルメニア人研究者は、アッラーン語はイラン語、シウニク語はアルメニア語の方言であると主張した。

C) アラス川左岸領有問題。

アルメニア人研究者は、シャッキのサフル・イブン・スンバトをアルバニア人であるとするブニャトフの結論に反対するが、のみならずアラス川左岸クティシュKutish、バルサンBarsan、バイラカンBailaqan、アルツァフ=ハチェンArtsakh Khachen、ウティUti、有名なメフランMehran家の本拠ガルドマンGardman、及びクル川左岸のシェッキ、カバラQabalaの君侯はすべてアルメニア人であると主張している。一方、アゼルバイジャン側はアラス川左岸にアルバニアの残存物を探そうとし、ネアモトヴァNeamotovaは、ザンゲゾルのシスィアンSisianに「アグヴァン人」と記された、碑文を発見したと報告し、アリエフAliefもこの地域にアルバニアの教会の遺跡を発見したと称した。

80年代に論争は活発化し、マメドヴァF.Mamedovaが、アルバニア人は国家形成を終了しており、領土はナヒチェヴァンに広がり、カガンカトヴァツキとダヴィティクの原文はアルバニア語で書かれ、ムヒタルとキラコスは、アルメニア語を用いたが、その精神において彼らはアルバニア人であるとした。論争が進むに連れ、両者の言葉使いは、次第に激烈になっていった。

2-3 対グルジア紛争。

グルジアとアゼルバイジャンは、相互に民族的紛争の可能性となる地域を抱えている。グルジア南部にはアゼルバイジャン人が集中して居住するマルネウリMarneuli郡があるし、アゼルバイジャン北西部には、グルジア人ムスリム（シーア

派)が多い、ザカタラZakatala郡があるからである。

ギリシャ、ローマの古典文献には、アルバニア人の土地は西はイベリア(グルジア)人の土地と接しているとある。一方、中世のグルジア語文献では、古代アルバニアの首都カバラを含むアルバニアの中央がグルジア王国の一部であるとされている。この点に関して、両国歴史学者の意見は異なっている。これが、アルバニア問題の第二の戦線となっている。1982年、テンギス・パティアシュヴィリ Tengis Patiashviliは『ランRan人とカヒKakhi人の王国』(トピリスィ)を出版し、8世紀の50-60年代に、カヘティ王国はクシェティKusheti、ヘレティHereti、ツヘティTskheti、およびシャッキを含んでいた。この内カヘティの東隣のヘレティは10世紀初カヘティから分離され、その王は「ラン人の王」と称された。11世紀にヘレティが再びカヘティ王国に編入されると、カヘティ王はヘレティ王の称号を合わせて「カヒ人とラン人」の王を称するようになる。1040年ダヴィティ三世が、グルジアを再統一すると、このラン人の王という称号も彼に付与された。ヘレティの住民は起源的には、グルジア系ではなく、ダゲスタン系であると考えられるが、アゼルバイジャン人歴史学者の共通見解は、グルジア人のいうヘレティでは、アルバニアの一部である。古代アルバニアの首都であるカバラは、シャッキの近くにあったからである。中世シャッキの住民は、グルジア化された(正教徒の)アルバニア人であるとされる。

さらに、ダヴィド・ムスヘシュヴィリ Davidi Muskhesviliは自著『東グルジアの歴史地理から—シャッキとゴガレナGogarena』(トピリスィ、1982年)で、最初にストラボンが述べ、中世のグルジア人がガチャニGachaniあるいはガルダバニGardabaniと呼ぶゴガレナをイベリア(すなわちグルジア)の一部であると述べ、この地は2世紀にアルメニアに併合され、4世紀にはグルジア領になったが、住民のゴガルGogar族はグルジア系であると主張する。ヘレティに関するムスヘシュヴィリの見解は、シャッキを首都とするヘレティはアルバニアの最も西の地域だが、10世紀にグルジア人によってキリスト教化され、11世紀には政治的にも、言語的にもグルジア化されたとする。同時代のグルジア資料では、パティアシュヴィリの見解と同じく、ラン人とカヒ人の王国と呼ばれ、アラブ資料では、シャッキとジュルザンJurzanとよばれた。グルジア統一の後この地域はカヘティ、ヘレティ、シャッキに三分割され、それぞれの領主によって統治された。しかし、マメドヴ

ァはムスヘシュヴィリがアルバニアからシャッキとカンピセネをアルバニアから奪ったと、これを批判し、ストラポンはカンピセネ Canbiseneがアルバニア領であると明言しており、シャッキは古代アルバニアの首都であると反駁した。マメドヴァの見解は正しいであろうが、中世グルジアではシャッキとカバラはグルジア王権に強く結ばれた地域である。

アゼルバイジャンのゲイブツラーイエフ Geibullajevは、アゼルバイジャン人がアルバニア人の正統な後継者であり、ザカタラ係争地はアゼルバイジャン領であるとするアゼルバイジャンの主張と敵対し、中世グルジアの境界を拡大しようとする誘惑に負けがちなグルジア人歴史学者の傾向を批判した。彼の著書『アゼルバイジャンの地名』（バクー、1986年）では、今日グルジア語の方言を話すインギル Ingil族はストラポンの言うゲル Gel族で、グルジア化したアルバニア人であるとする。パティアシュヴィリによる書評に反駁して、さらに、今日のサインギロ Saingiloのキリスト教徒住民は、17世紀にゲロイ Geloiと呼ばれていた。彼らはイスラム化した地の新しいゲロイ、すなわちイエニゲロイ Yeni Geloiと呼ばれたが、やがてムスリムだけでなくキリスト教徒もインギルとよばれるようになった。ゲイブツラーイエフの論拠はインギルが、近隣のアゼルバイジャン、アヴァル Av ar、ツァフル Tsakhul人によって、それぞれゲロイ Geloi、ゲラヴ Gelav、ゲロウ Gelouと呼ばれていることである。さらに、彼は中世グルジア文献に見える「ヘル Her人」はストラポンの「ゲル」人の子孫であり、現在のクリズ Kuriz人、ハプティル Khaptir人の祖先であるとし、彼らはヘルナ Hernaから今日の住地に移住したとする伝承を持つが、ヘルナは歴史的ヘレティのフランチ Htantaまたはヘルナブジュ Hernabujであると述べる。パティアシュヴィリに対するゲイブツラーの批判の第二の点は、パティアシュヴィリがヘレティをグルジアの不可分の一部であるとし、ヌハ Nukhaをグルジアの一部であると述べ、シルヴァンが中世グルジア教会の指導下にあったとする点であった。

結論

我々は、ここでカフカースの諸国家の公認・非公認の歴史記述の論争を整理し、歴史地理上の地域や国家間の境界と現実に機能している歴史イデオロギー上の境

界を対比した。この境界は通過することによって他者の理解に導かない不毛の境界であった。

自らを古代、中世初期のアルバニア人の領土の正当な後継者であるとするアゼルバイジャンが共和国の内部にすむレズギ人にその権利を分かつたないのは、全く不自然であろう。共和国北部に住むレズギ人の言語は言語的にはアルバニア語に非常に近いからである。また、アルバニア教会は教義と用語においてアルメニア化したことは先に述べたが、組織としてのアルバニア教会は19世紀まで存続した（総大主教座は、13世紀にギャンジェ Gyanje からカラバグ山中のガンザサル Ganzasar に移転された）。19世紀のアルメニア人の大移住以前にアゼルバイジャン各地（コーカサス山脈南麓や山岳カラバグ）に住んでいたアルメニア人は、中世のアルバニア人の一部の子孫であると想定される。アルメニア人の多くはギリシャ、ローマ古典中のアルバニアの南境をクル川とみなす。同河左岸はアルバニア固有の領土であるが、右岸はアルメニアの歴史的領土であると考えるのである。山岳カラバグのみならず北に隣接する丘陵をアルメニアの一部であるアルツァフであると主張する根拠はここにあるのだが、レズギ人も少数者の権利の理念によってだけでなく、歴史的正当性によって、分離と独立を主張するようになるであろう。ターレシュ人の歴史的権利に対する主張の声は小さいが、彼らはアゼルバイジャン国史の最初のページに記述されるメディア、アトラパテネが、自分達の祖先であることを意識している。アゼルバイジャン史のなかのイラン的要素も、さらに求められるであろう。

参考文献

北川誠一「ザカフカースにおける歴史学と政治—アルバニア問題を巡って」

『ソ連研究』第11号、1990年10月、106—130頁

Akademija Nauk Azerbajdzhanckoj SSR, Istorija Azerbajdzhana, v trjokh toma kh, 1958—1963

Alijev, L., Kavkazskaja Albanija, Baku, 1984

Altstadt, A.L., The Azerbaijani Turks—Power and Identity under Russian Rule, Stanford, 1992

- Ashulbeili, C., Gosudarstvo Shirvanshakhov (VI-XVI), Baku, 1983
- Bunjatov, V. M., Azerbajdzhan v VII-IX vv., Baku, 1965
- Efendijev, O., Azerbajdzhanskoe Gosudarstvo Sefevidov v XVI beke, Baku, 1981
- Gejbullajev, G., Toponimija Azerbajdzhana, Baku, 1986
- Mamedova, F., Istorija Alban Moiseja Kalankatujnskogo kak istochnik po obshchestvennomu ctroyu rannecredev ekoj Albanii, Baku, 1977
- Muskhceshvili, D. L., Iz Istoriceskoj geografii vostochnoj Gruzii (Shakki i Gogarena), Tbilisi, 1982
- Nejmatova, M. C., Memorial'nye Pamjatniki Azerbajdzhana XII-XIX beka, Baku 1981
- Papuashvili, T. ., Rant'a da Kahet'a Samep'o (VIII-XXI ss.), Tbilisi, 1982
- Swietochowski, Tadeusz, Russian Azerbaijan, 1905-1920--The Shaping of National Identity in a Muslim Community, Cambridge, 1985

注

- ※ 羽田正氏はアゼルバイジャン人の起源説に関するエフェンディエフ教授との対話を永田雄三、羽田正『オスマン帝国とイラン（「世界の歴史」第15巻）』、中央公論社、1998年において紹介している。

—参考文献—

- 北川誠一「コーカサスの諸民族」『中東世界』岡崎正孝編、世界思想社、1990年
- 同 「ザカフカースにおける歴史学と政治」『ソ連研究』第11号、1990年
- 同 「ザカフカース--グルジアの内乱とカラバフの戦争」『国際問題』1992年5月号
- 同 「歴史記述における境界—エスノヒストリーとアゼルバイジャンの解体」『境界とコミュニケーション』（文部省特定研究報告書）、弘前大学、1995年
- 同 「ザカフカースにおける国際政治と民族問題」『スラヴ世界』第2巻、弘文堂、1995年

初出 『旧ソ連の地域別研究-ウクライナ・ザカフカース・モルドヴァ・バルト-』、平成7年3月、日本国際問題研究所

9 アゼルバイジャン政局と民族問題

はじめに

アゼルバイジャンは、旧ソ連南部カスピ海西側の国で、面積8万6千6百平方キロメートル、人口は7百万を少し上回る。規模や緯度において、我国東北地方を連想することができる。20世紀に至るまで、この地域は単一の名称をもつことも、政治的に統合されることもなかったが、ロシア革命の後、1918年、アゼルバイジャンという国名をかかげて進歩的憲法を持つ、世界最初のイスラーム共和国として独立した。1920年から1992年までは、アゼルバイジャン・ソヴィエト社会主義共和国としてソ連邦の一部であったが、連邦解体の結果完全に独立した。新生のアゼルバイジャン共和国は旧ソ連の国々に共通する数々の問題を抱えている。特に、1988年のスナイト事件に発端するナゴルノ・カラバフ問題等の民族問題はモスクワ政府との関係と並んで、国家の経済、社会、政治上の主要な政治ファクターになっている。民族問題および対ロシア連邦との関係から、独立以後のアゼルバイジャンの政治情勢について簡単に述べよう。

1. ナゴルノ・カラバフ問題とアゼルバイジャン政局

19世紀の始め、クラ川とアラス川に挟まれたいわゆるカラバフ地方はギャンジャ（エリザベトポリ、キロボヴァド）を中心とするギャンジャ・ハン領とハンケント（ステパナケルト）を中心とするカラバグ・ハン領の二つの封建的諸領国に分れていた。後者、カラバグ・ハン領の山がちの西部は、中世からアルメニア人住民が多い地域で、ハムサと通称される五つのアルメニア人領主領に別れていた。ロシア併合後、ムスリム住民のイラン移住やイランからのアルメニア人農民の移住によってカラバグ西部のムスリムとアルメニア人の人口バランスは、アルメニア人の圧倒的優位に変化していった。ソヴィエト政権の成立後、アルメニア人住民の多いカラバフ西部には、アゼルバイジャンの自治州としてナゴルノ・カラバフが設置された。「ナゴルノ」とは、山岳を意味するロシア語である。しかし、ナゴルノ・カラバフ自治州のアルメニア人の間では、次第にアルメニアへの帰属

変えを望む声が強くなって、ペレストロイカの時代を迎えた。

グラスノスチ政策はアルメニア人の帰属替え要求に絶好の機会を与えた。1987年帰属替え講求署名運動が進展し、ナゴルノ・カラバフのアルメニア人成人のほぼ全員が請願書に署名し、アルメニアの首都イエレヴァンでも百万人に達する支持集会が開かれた。このような動きはアゼルバイジャンにおいても周知のことであり、アゼルバイジャン党は、党やKGVの組織を動員して、署名運動弾圧に務めたが、1988年2月、ナゴルノ・カラバフでアゼルバイジャン人デモ隊が警官隊と衝突して死者二名をだす事件が起こった。

続いて、1988年2月アゼルバイジャンの首都バクー近郊の工業都市スンガイトで、アゼルバイジャン人群衆がアルメニア人を襲撃する事件が起った。事件後、ソ連共産党中央委員会は共和国の幹部を更迭した。この結果地元で強い人的を持つヴェズィーロフに替わって、共和国内部での人的つながりの弱いムッタリポフが党第一書記に就任した。モスクワの信任厚いムッタリポフは反共産党・反モスクワの人民戦線の台頭、アゼルバイジャン人群衆がアルメニア人を襲撃したバクー事件、それを口実にソ連軍が導入され、多数の死傷者を出した「黒い一月事件」（共に1990年）を乗り切ったが、ナゴルノ・カラバフ問題を解決に導くことはできなかった。ムッタリポフはモスクワ八月事件後の共和国最高会議選挙では、ナゴルノ・カラバフ問題の平和解決を訴えて勝利した。同月新議会はアゼルバイジャンの独立を宣言、続いて9月にはムッタリポフを初代大統領に選出した。同年12月ソ連邦が崩壊するとナゴルノ・カラバフの戦闘は一層激化した。アルメニア人武装勢力は同自治州内部のアゼルバイジャン居住地の占領、同自治州外の都市アグダム砲撃を行った。特に、1992年2月ホッジャルの戦闘では、避難する住民が銃火を浴び、非武装の老人や子供、女性に多数の死者が出た。人民戦線はムッタリポフ大統領の責任を糾弾し、最高議会を包囲して、大統領を辞任に追い込んだ（3月）。5月、アルメニア軍は前進を続け、ことにアルメニアとナゴルノ・カラバフを結び付けるラチン回廊を占領した。翌月の大統領選挙では、ナショナリズム的傾向の強い人民戦線のエルチベイが当選した。エルチベイの親トルコの政策は中央アジアへの経済進出を計画するアンカラには好都合であったが、モスクワやテヘランを喜ばせなかった。しかも、バクーと元共産党の共和国第一書記で、ソ連党中央幹部会員だったことがあるアリエフが大統領となったナヒチェヴァ

ン自治共和国との関係が悪化し、ムッタリポフ派との調整にも失敗するなど政局掌握に失敗した。さらに、アゼルバイジャンはナゴルノ・カラバフの周辺での戦闘に失敗し、4月アルメニア軍は、アルメニアとナゴルノ・カラバフの間にあるキルバジャル郡を占領、さらにイランとの国境沿いにアゼルバイジャン領に前進した。この様な状況で、前線軍指令官ヒュセイノフは反乱を起こして、バクーに進撃、エルチベイを追放した。議会は直ちに、アリエフを大統領に選出した（6月）。アリエフは先ず、エルチベイ不信任の国民投票を実施し、続いて10月の選挙では、民族問題の解決を訴えて大統領に選出された。アリエフはナゴルノ・カラバフの戦争に勝利することはできなかったが、ロシア連邦とは一定の距離を保つ民族主義政策を採った。1994年初夏以来ナゴルノ・カラバフの戦線は鎮静化し、9月にはモスクワでアルメニアのテルペトロシヤン大統領、ナゴルノ・カラバフのコチャリャン議長（ナゴルノ・カラバフ共和国大統領を経て、現アルメニア共和国外相）とが会談、問題の平和解決に希望を抱かせた。

2. アゼルバイジャンにおける少数民族の分離主義

ナゴルノ・カラバフの戦局がアゼルバイジャンの政治を直接左右する重要案件であることは、上に述べた所である。現在、アルメニアはナゴルノ・カラバフを含めてアゼルバイジャン領土の25パーセントを占領し、双方の避難民の数は、200万人に達していると言われる。しかし、ナゴルノ・カラバフの戦闘の中でアゼルバイジャンはアルメニア人以外にも少数民族問題を持ち、対処を誤ればアゼルバイジャンそのものが解体の恐れがあることが、明らかになってきた。ムッタリポフ前大統領は、この問題に重要性を認め、今日レズギ、ターレシュ、クルドなどの問題が新聞を賑わせるのは、故えないことではないと発言した。では、彼らはどんな民族で、どのような要求を掲げているのであろうか。

(1) ターレシュ（タルィシュ）人

ターレシュ人は、アゼルバイジャン共和国のカスピ海岸ターレシュ地方とその北のムガン地方に集中して住むイラン系民族で、ターレシュ語の分布は、北イランにも見られる。1989年センサスでは、アゼルバイジャンのターレシュ人口は、22,000人であると公表されているが、別の資料では15万人とも40万人ともいう。教育、情報、出版上、この集団の権利は全く無視されていて、1938年

以降公式にはターレシュ人という名称すら廃止された。従来、アゼルバイジャン政府は、ターレシュ人は完全にアゼルバイジャン文化に同化しているので、彼らは少数民族ではないと主張していた。確かに、彼らの言語ターレシュ語は、強くアゼルバイジャン語の影響をうけているが、彼らがイスラーム教スンニー派の信者であることが、完全同化を妨げてきたと考えられる。1919年にはターレシュ・ムガン・ソヴィエト共和国が建国されたが、これはその後無視され、民族的自治を求める運動は弾圧された。80年代末には、公的レベルでの民族的権利の回復、アゼルバイジャンの憲法の枠組みの中での自治の獲得を要求するターレシュ民族復興党（ターレシュ民族党・アゼルバイジャン諸民族平等党の前身）が活動開始。1991年のターレシュ民族復興運動大会では、アスタラ、レンコラン、レリク、マッサラの4郡に100万の人口を持つターレシュ人は古代メディア人の子孫であることが宣言された。1993年、アゼルバイジャン人民戦線の元活動家アリカラム・ヒュンマトフ大佐は、エルチベいのパンチュルキズム傾向を嫌って運動を離れ、出身地のレンコラン大隊を率いてカラバフ戦線で戦い、一時はアゼルバイジャン国防次官の要職に就いていた。ヒュンマトフはロシア軍の駐留によるアルメニア、アゼルバイジャンの兵力引き離しによるのみ、ナゴルノ・カラバフ戦争の平和解決が可能であると述べているのはその時の経験によるものであろう。ヒュンマトフは1993年ヒュセイノフのクーデター後の7月21日、東南部の7郡にターレシュ・ムガン共和国を建国する事を宣言した。8月首都とされたレンコランで、人口の割合によって選出された議員や各界代表が集合、ターレシュ・ムガン自治共和国国民マジュレスが開催され、ヒュンマトフが大統領に選出された。バクー政府は状況の把握に務めたが、ヒュンマトフは譲歩を拒否した。同月24日、バクー政府当局は大統領、国防大臣を含む政府のターレシュ・ムガンのメンバー多数を逮捕、アゼルバイジャン諸民族平等党の活動を禁止した。アリエフ・アゼルバイジャン大統領は、初代アゼルバイジャン大統領ムッターリーポフをこの運動の黒幕であると非難している。

ターレシュ人居住地区の各郡における人口および全人口における百分比。

アスタラ Astarā	86.4%	55.6千人(1976)
レンコラン Lenkoran	86.3%	146.9 (1981)

レリク Lehk	82.0%	51.8	(1981)
マサッル Massally	30.1%	125.0	(1981)
ヤルドィムル Jardymly	1.2%		
ジャリラバド Dzhaliabad			(1987年の全郡人口130.1)

(2) レズギ (レズギン) 人

レズギンとも呼ばれる。コーカサスの東部、旧ソ連アゼルバイジャン共和国とロシア連邦ダゲスタン共和国にまたがって住む民族である。言語は、コーカサス語族のダゲスタン語グループに属する。1989年公式統計によると全人口は、46万6千人で、このうち91パーセントは、レズギン語を母語としている。また、この内半数強がロシア連邦ダゲスタン共和国に、半数弱がアゼルバイジャンに分かれている。しかし、レズギ側の主張によると、アゼルバイジャンでは80万人以上が、クサル、フダットなどのダゲスタンよりの郡に集中している。大多数がスンニー派のイスラム教徒である。多種多様な言語の混在するダゲスタンでは、レズギ語を含め9つの共通語の全ての言語がロシア語に対して等距離にあるが、アゼルバイジャンでは、レズギ語の地位は完全に無視されている。

1921年、全ダゲスタン制定会議はサムール川の南に住むレズギ人をダゲスタンに編入することを宣言したが、この主張はモスクワには届かず、この地域はアゼルバイジャン領になった。当初、この地方において初等教育ではレズギ語が用いられたが、1939年以降レズギ語による教育は初等教育を含め行われず、新聞、雑誌、放送等においても、レズギ語の公的地位は全く認められていない。さらに、レズギ民族籍の市民には、外国人であることを理由に就職、住宅の配分、大学入学試験での差別があり、1936-56年の間「レズギ銭」と呼ばれる税を支払っていた。既に50年代に、アゼルバイジャンでは、民族的権利をもとめるレズギ人の活動が開始された。1990年には、「サドヴァル(統一)」が創設されて、急進的な民族統一運動に従事、また、1991年にはバクーにも、穏健で、アゼルバイジャンにおけるレズギ人の地位向上を求める「サムール」が設立された。コーカサス山地民族連盟は、アゼルバイジャンのレズギ人を、抑圧を受けている同胞と認め、必要があれば、志願兵部隊を派遣すると言明している。

レズギ人の人口

公式人口	1970	323,829人	50.2%	ロシア連邦
			42.4%	アゼルバイジャン
	1989	466	295	ダゲスタン
			174	アゼルバイジャン

レズギ人の分離運動にも、カラバフ戦争の直接の影響がみられる。「サドヴァル」の主張によると、レズギ人の兵士は戦線の最も危険な部署に配置されたという。一方、レズギ人はレズギ人の徴兵やカラバフからのアゼルバイジャン人避難民、メスヘティ・トルコ人のレズギスタン（レズギ人居住地区）への定住に不安を抱いてきて、1994年、夏には、両民族の間で死者2名をだす衝突が起こっている。ナゴルノ・カラバフ方面におけるアゼルバイジャン側戦線の解体に際して、レズギ人兵士の脱走やアルメニア側によるレズギ人捕虜のみの解放がおこなわれた。アゼルバイジャン政府当局は、脱走兵の逮捕を実施しようとしたが、1994年夏には、当局と地方住民の衝突でも死者をだす事件が生じている。

サドヴァルの指導者の一人は、ロシア連邦とアゼルバイジャン共和国の分離独立が国境に跨って住んでいるレズギ人を社会生活全般における困難な状況に陥らせていると述べ、ソ連時代の民族状況を懐古している。これは、アゼルバイジャンの民族政策の困難さを端的に示している。

(3) クルド

アゼルバイジャンには、若干のクルド人が、アルメニアとナゴルノ・カラバフの間のラチン、クバツル、キルバジャル、ザンゲランなどの郡に集中して住んでいる。かつては、ラチンを中心に約8万人がキュルディスタン自治区を与えられていて、学校、師範学校、新聞、雑誌、民族部隊をもっていたが、これは後に撤廃された。1937年、トルコ国境沿いのクルド追放が決定された時、かなりのクルド人が強制移住の処置をうけた。現在その一部は、北コーカサスのクラスノダル地方に居住しているが、当地のロシア人に圧迫を受けていると感じている。1989年人口調査の全ソ連クルド人は、15万2千人であるが、クルド人活動家は、この数は実数より遥かに小さいと考えている。ペレストロイカ以降、

クルド人も民族的権利の擁護のために立ち上がったが、彼らの第一の目標は、キュルディスタン自治区の復興である。アルメニア側の発表では、1993年アルメニア人が、ラチン回廊を占領した際、クルド人はアルメニア支持を表明したという。ナヒチチヴァン（自治）共和国では、西南部のシャルール地区にクルド人集落があるが、1994年夏には、トルコ、アゼルバイジャン両国の特務機関が襲撃する事件が起こった。理由はクルド労働党への武器横流しであった。一方、トルコ側情報によるとアルメニアも、トルコ領クルディスタンで、抵抗運動を続けているクルド労働党を援助しているという。アゼルバイジャンにおいては、ターレシュやレズギだけでなく、クルド人の問題も国内問題ではなく、国家間の問題であるのである。

ソ連のクルド人の大部分はイスラーム教徒であるが、アルメニアとグルジアには、ヤズディー教徒のクルド人が集中している。ヤズディー教はゾロアスター教、キリスト教、イスラム教等の宗教からなる混交宗教で、かつては信者の多くがアナトリアに居住していたが、19世紀にオスマン政府の圧迫を受け、当時ロシア領であったザカフカースに逃亡した。ソ連時代は、宗派別登録を行わなかったため、ヤズディーもイスラーム・スンナ派のクルドも総てクルド人と登録されたが、今後彼らがヤズディーとしてのアイデンティティーをもつか、クルド人であると意識するかは、重要である。

ザカフカースのヤズディーの歴史は比較的新しい。オスマン領内からロシア領への最初の移住者は、1828-29年の露土戦争後、ハサン・ベグに率いられたハサナル族であった。これに続く30年代、1877、1879、1882年にもオスマン領からの移住があった。1897年の全ロシア第1回センサスでは、14,726人を数えるようになった。第一次世界大戦後、トルコ領になったカルスやスルマリ地方のヤズディーはアルメニアとグルジアに再移住した。現在ザカフカースには、約6万人のヤズディーが住むとみられるが、大多数の5万5千人程がアルメニア（イェレヴァン、アラガツ、タリン）に、3千人ほどがグルジア（トピリスィ）に住んでいる。ソ連時代には彼らは総てクルド人として数えられたが、アゼルバイジャン人とともにムスリム・クルド人が退去したアルメニアでは、ヤズディーとしてのエスニック・アイデンティティーが定着しつつある。アルメニア政府はシェイフの一人をヤズディ担当顧問に採用し、科学アカデミーに独立のヤズディ部

門を置いた。アルメニアにおけるヤズディ社会の中心には、ヤズディ民族同盟があり、福祉やアルメニア人社会との友好等の事業にあたっていて、1989年の第3回大会には600人もの代議員を集めた。世界中のヤズディ社会の団結を目標としている。

(4) ベラカン郡のアヴァル人

アゼルバイジャン北西、グルジアとダゲスタン（ロシア連邦）国境に近いベロカン郡およびザカタル郡は、ダゲスタン系のアヴァル人が多い地方である。1830年代ロシアに征服されるまで、この地方の人々は、アゼルバイジャンの封建領主の支配に屈しない農村共同体をつくっていた。この地方のアヴァル人は独自の大隊を編成して、カラバフの戦線に導入されたが、バクーからは不信の目でみられていた。この地方では、アゼルバイジャンからの分離とダゲスタンへの統合を目指す「ジマフト（民族）」の運動が伝えられていたからであるが、1994年秋には、ベラカン郡で、警察と地方住民との間で武力衝突が起こり、武装勢力が一部の村落を掌握してといわれる。

3. もっと弱小の民族

(1) ターティー人

ターティー語は、コーカサスの東部、北西イランに分布するクルド語、ターレシュ語、ギラーキー語等と同じくイラン系の一言語で、この言葉を用いる人々がタート人であるが、タートは、元来特定の集団を指す民族名称というよりは、「非トルコ人」、「イラン人」を意味するトルコ語の普通名詞である。1970年の全ソ連センサスでは、17,000人のターティー語使用者、14,200人のタート人が報告されていて、母語と民族的帰属意識の分離を覗かせているが、1979年のセンサスでは、ザカフカースの東部バクー、シャマハ、クーバを中心に22,441人の、1989年には31,000人の利用者がいた。しかし、センサスは、この言語の正確な状況を把握するものではない。ザカフカースのタート人は宗教的にムスリム、ユダヤ教徒、クリスチャンに分かれ、彼らの言語も微妙に異なっている。ユダヤ教徒のターティー語は1886年に21,000人を数えたが、音韻的にアラビア語が基層にあったことが確認されている。彼らは山岳ユダヤ人と呼ばれ、アシケナージやグルジアのユダヤ人からは区別されている。アルメニア人のす

なわち、グレゴリー教会に属するタートは極少数で、アルメニアの2か村に居住するに過ぎない。ムスリム・ターティーはイスラム教シーア派の信者で、言語的にはアゼルバイジャン語とのバイリンガル状態にあると考えられ、公的にはターティー語の権利は一切認められていない。彼らの民族意識は低く、政治的にも、言語的にも民族主義的問題は報告されていない。すなわち、彼らはアゼルバイジャン人に同化されているのであるが、逆にそれが、レズギ人やターレシュ人が、アゼルバイジャンからの分離や自治を要求する理由になっている。

(2) アゼルバイジャンのメスヘティ・トルコ人

1944年、グルジア・トルコ国境から中央アジアに強制移住された集団である。元来、メスヒ人とはグルジアのサムヘティ地方の住民を意味し、民族政策上の意味はもたない。この時移住した人々は、様々な民族名称で呼ばれるが、メスヘティアのトルコ人と呼ばれるのが一般的である。ソ連の人口統計上のトルコ人（1989年センサス、208,000人）は、事実上彼らを指していると考えられる。北コーカサスの「処罰された諸民族」とは違って、彼らは、対独協力をおこなったのではなく、単にスターリンがトルコの対ソ参戦を恐れていたのが、追放の理由であった。この時、ムスリム化したアルメニア人であるヘムシーン人もグルジアから追放された。50年代に追放地からの移住は公式に許されたが、グルジア政府は彼らの帰還を禁止した。この結果、大多数が追放地共和国に残留したが、現地人との関係は好ましくなく、1989年6月ウズベキスタン共和国のフェルガナ地方で、地元ウズベク人による襲撃がおこり、100人に及ぶ死者、1,000以上の負傷者を出した。モスクワ政府は全メスヘティア・トルコ人をロシアに脱出させた（フェルガナ事件）。襲撃には地元官憲の関与が取り沙汰されている。グルジア入国を拒否された人々の一部は移住を許可されたアゼルバイジャンのムガン平原に入植した。グルジア帰還が不可能と考えた人々はトルコへの移住を申請したが、トルコ大使館によって拒絶された。メスヘティア・トルコ人は帰属意識に関して、二分される。大部分は、自分自身をトルコ人と考えている人々で、「ヴァタン」に指導される。しかし、一部の人々は、オスマン支配下にムスリム化したグルジア人の子孫で、自分自身をムスリム・グルジア人と考えている。

グルジア政府が一貫して彼らの帰還を許さなかったのに反して、アゼルバイ

ジャンは常に彼らの受け入れに好意的であった。その理由は、彼らがアゼルバイジャン人であるからであった。ロシア革命後、アゼルバイジャン民主共和国の政府は、ザカフカースの全トルコ語住民をアゼリ・トルコ人とみなし、カスピ海に望むアゼルバイジャンのバクーから黒海の港町グルジアのバツミまでの広い領土権を主張した。メスヘティ・トルコ人も当然その中に含まれていた。しかし、アゼルバイジャンにも多数の農民を受け入れる耕地があった訳ではない。最初彼らに与えられたのは、灼熱の乾ききったムガンの平原であるか、後には、1998年以降多く地元アゼルバイジャン人が避難したあとのホッジアルであった。ホッジアル住民がアルメニア軍の攻撃をうけて撤去したおり、多数の死者を出したことは先に述べた。さらに、複雑なのは、アゼルバイジャン政府がレズギ人居住地帯に彼らを入植させていることである。これが地元レズギ人の不満の原因の一つとなっていることも先に述べた。

結 び

ナゴルノ・カラバフの戦争は、アゼルバイジャンの経済に深刻な影響を与えるだけでなく、戦局の推移が、内戦を含む政権の交替劇の原因となってきた。さらに、重大なことは、アゼルバイジャンの抱えている民族問題はナゴルノ・カラバフのアルメニア人だけでなく、ロシア国境のレズギ人、イラン国境のターレシュ人、アルメニア国境のクルド人、グルジア国境近くのアヴァル人の分離、あるいは自治要求を抱えている。そして、少数民族の運動は、バクー政局の第二の要因である対ロシア関係や第三の要因である石油資源やパイプライン・ルート選定にも直接係わるアゼルバイジャンの最も根本的な政治ファクターとなっている。

ただ重要であるのはアゼルバイジャンのムスリムマイノリティーが主としてスンナ派であるということである。アゼルバイジャンとホメイニー的シーア派原理主義の関係を宗派のバランスという^{視点}~~文法~~から注目する必要があるだろう。